

ジェンダー研究

No. **28**
2025

S p e c i a l S e c t i o n

コモنز／コモニング

Debates on Sustainable Development:
Personal Insights from a Feminist Political Ecology Approach
Wendy Harcourt

Exploring How Commoning Helps Reconfigure Feminist Analytical Tools
in Times of Socio-ecological Crises
Chizu Sato

日本の農山村における洗濯機のコモニング
岩島 史

特 別 寄 稿

沖縄における共有地の軍事化と女性——接収された総有の軍用地から
桐山節子

グローバル化の下での人間の経済活動の拡大が、気候変動や生態系の破壊といった地球規模の危機に結びついているという認識が、「人新世」という言葉とともに広まっている。エコシステムからの暴力的収奪を通じた成長に限界があるのとらえ、人間中心主義を批判的に見直すことで社会経済のありかたを変革していくとする主張が、学術領域でも社会運動の場でも重視されつつある。

コモンズとコモニングは、こうした認識において注目されている概念である。資本主義は財や資源を、個人や法人、国家や行政体によって「所有」されるものとしてとらえ、その枠組みにおいて生産を拡大し富を蓄積することを目指す点において、きわめて人間本位のシステムである。共有資源を意味するコモンズも、人間のコミュニティに水準をあてて財や資源の管理や保全を図るものであり、本来は人間中心主義を超えるものとはいえない。これに対して近年、ポスト資本主義と呼ばれる議論において、脱成長を志向するオルタナティブな社会経済システムの構想のなかにコモンズをとらえなおし、人間本位ではない新たな共同性を目指そうという声が高まっている。そうしたなかで、財や資源の共有についての議論にとどまらず、〈人間以上〉(more than human: 人間を含むすべての生命体と非生命体)の関係性において分かち合い、管理し、そしてケアしていくプロセス「コモニング」に目を向けるアプローチが関心を集めている。

この号では、このコモンズ／コモニングという概念を、フェミニスト・アプローチにおいて考察することを目指した。なぜならコモンズ／コモニングをめぐる問われている〈人間以上〉におけるケアする／される関係への関心や、その土台にある近代的人間中心主義の批判的再考は、フェミニズムの問いと深く結びついているためである。

フェミニズムは近代のなかに生まれた思想潮流であるが、近代の政治的・経済的・社会的・文化的主体としての〈人間〉から女性が除外されていることを鋭く糾弾してきた。近代ヨーロッパに生成し発展した資本主義システムにおいて、財や資源にアクセスし、そこから得られる利益を獲得し、その権利を保障する法や制度を構築することができたのは、成人男性市民のみであった。このことへの気づきはやがて、女性だけではなく植民地の人びと(先住民や黒人奴隷)への抑圧や暴力をめぐる鋭い問題意識とも結びついていった。〈人間〉以外の人びとの労働の搾取や収奪(このときの労働には、炊事や洗濯といった日常のメンテナンス、ケア、セックス、出産、その他コミュニティを持続させるためのあらゆる社会的再生産の営みが含まれる)が、資本主義システムの維持・拡大につながってきたこともとらえられてきた。開発主義やそれと表裏一体の軍事化にともなって、〈人間〉とみなされない存在の放逐やサブシステムからの掠奪が引き起こされていることをめぐって、フェミニズム理論は重要な論点を提示し続けてきたといえる。

このような思索においてフェミニズムは、ポスト資本主義の構想に対しても有

効な問いを投げかけている。分かち合い、管理し、そしてケアしていくという関係論的プロセスに、差別や抑圧の交差のなかを生きる女性やマイノリティ、そして〈人間以上〉の存在はどのように包摂されうるのだろうか。そのことは次世代の社会関係やエコシステムをどのように方向づけうるのだろうか。

本特集ではWendy Harcourtによる論考が、フェミニスト政治生態学 (Feminist Political Ecology) の視座において、社会的再生産をエコシステムと連接する課題として位置づける必要性を提起している。1992年に国連が掲げた「持続可能な開発」の目標は、企業や政府の戦略において、実態として資本主義経済の下に組み込まれてきた。Harcourtはこの点をふりかえり、近代資本主義社会において措定されてきた人間中心主義的な知識生産のありかたを批判的に再考しなければならないと示唆する。オーストラリア先住民が“Caring for Country” (地への慈しみ) という実践において、土地をそこに宿る物質的・精神的・文化的な価値や関係性の総体のなかでとらえ、世代を超えて倫理的責務を果たそうとしていることをふまえながら、再生産過程までを意識したコモニングのありかたを通じてエコロジーと人間との関係をとらえなおすことの可能性を論じている。

Chizu Satoは、人びとに望ましくない共有を強いる「ネガティブ・コモンズ」のなかでのコモニングの戦略的可能性を、静岡県「水車の里くんま」の事例を通じて掘り下げる。この地域では1990年代以降の地方自治体再編や新自由主義的改革によって高齢化や人口減少、ケアの空白、生物多様性の喪失が引き起こされてきた。そのような地域において、地域の女性たちは不要となった田畑を活用しソバを栽培・加工・販売したり、都市住民を対象とした観光型ワークショップを開いたり、地元高齢者向けのケア活動、景観保全などに組み込みながら、生態とのつながりにおいて社会的再生産をつないできた。Harcourtによる提起を受けたケーススタディーとして読むことで、フェミニスト政治生態学におけるコモンズ／コモニングの関心をよりよく理解することができるだろう。

一方で本特集は、コモンズ／コモニングをめぐる関係のありかたが、構造的に差異化された権力の働きを免れるとは限らないということにも目を向けている。岩島史の論考は、1950年代から60年代の日本の農山村における共同洗濯の実践をとらえることで、共有資源へのアクセスや管理のありかたが共同体に埋め込まれた家父長制的な価値規範や、世帯内の「嫁」「姑」の緊張関係、そして農業や農村生活の近代化を志向する国家権力の思惑のなかで揺れ動いていたことを明らかにする。引用される伊田久美子の「昔がよかったわけではない女性には、懐かしむべき過去は存在しない」という言葉は、近代資本主義経済と結びつく家父長制的〈人間〉の権力関係を、オルタナティブな共同性の構想がとりもなおさず再生産してしまう危険性を示している。

資本主義による暴力という問題のみでなく、そうした収奪や抑圧が経験される

ローカルな社会の内部でも、あるいは抵抗運動を展開する人びとのあいだでも、発言や交渉にあたる〈人間〉とそうではない者たちとのあいだの権力関係は見過ごされやすい。今号に特別寄稿として掲載された桐山節子の論考は、沖縄の軍用地料をめぐる女性たちの裁判を事例に、近代的土地管理制度の導入から米軍による接収を経て現代に至るまでの過程において、土地とともに生きる女性たちだけでなく、同じ地域に生き延びざるを得ない、異なって状況づけられた女性たち（そのなかには米軍兵士向けの歓楽街で働く国際移住女性たちも含まれる）が沈黙させられ続けてきたことをとらえている。このようなケースからも、フェミニストの批判的パースペクティブにおいてコモンズ／コモニングが決して単純な目標ではありえないということが浮かび上がる。

だからこそ私たちは、フェミニスト的関心を基軸に〈人間〉の想定に批判的なまなざしを向け、〈人間以上〉の関係を再想像していく必要があるともいえる。今号の特集が、そのような思索と討論の一助になることを願っている。

2025年7月

編集長 大橋 史恵

- 1 巻頭言 大橋 史恵

特集

コモンズ／コモニング

研究論文

- 7 Debates on Sustainable Development:
Personal Insights from a Feminist Political Ecology Approach
Wendy Harcourt
- 21 Exploring How Commoning Helps Reconfigure Feminist Analytical Tools
in Times of Socio-ecological Crises
Chizu Sato
- 39 日本の農山村における洗濯機のコモニング
岩島 史

特別寄稿

- 53 沖縄における共有地の軍事化と女性——接収された総有の軍用地から
桐山 節子

投稿論文

- 69 男にとって化粧はどのような意味を持つのか——ある男性の語りと実践を通じた基礎的考察
小口 藍子

書評

- 84 上野千鶴子、江原由美子編
『挑戦するフェミニズム ネオリベラリズムとグローバリゼーションを超えて』有斐閣
青山 薫
- 86 ジュリア・セラーノ（矢部文訳）
『ウィッピング・ガール トランスの女性はなぜ叩かれるのか』サウザンブックス社
山田 秀頌
- 88 湯澤規子『焼き芋とドーナツ 日米シスターフッド交流秘史』角川書店
土屋 匠平
- 90 吉田容子、影山穂波編著『ジェンダーの視点でよむ都市空間』古今書院
松岡 由佳
- 92 吉村さやか『髪をもたない女性たちの生活世界 その「生きづらさ」と「対処戦略」』生活書院
合場 敬子

- 94 平山亮、佐藤文香、兼子歩編『男性学基本論文集』勁草書房
川口 遼
- 96 メリッサ・M・シュー、キンバリー・K・ガーチャー（三木那由他、西條玲奈監訳）
『女の子のための西洋哲学入門 思考する人生へ』フィルムアート社
槇野 沙央理
- 98 大畑凜『闘争のインターセクショナリティ 森崎和江と戦後思想史』青土社
君島 朋幸
- 100 小田原のどか、山本浩貴編『この国（近代日本）の芸術 〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』月曜社
村上 由鶴
- 102 宋連玉『植民地「公娼制」に帝国の性政治をみる 釜山から上海まで』有志舎
菊地 夏野
- 104 ジョアン・C・トロント（岡野八代監訳）『ケアリング・デモクラシー 市場、平等、正義』勁草書房
武田 宏子
- 106 豊田真穂編『優生保護法のグローバル史』人文書院
貴堂 嘉之
- 108 山崎明子『「ものづくり」のジェンダー格差 フェミニナイズされた手仕事の言説をめぐって』人文書院
大室 恵美
- 110 エルザ・ドルラン（ファヨル入江容子訳）
『人種の母胎 性と植民地問題からみるフランスにおけるナシオンの系譜』人文書院
伊達 聖伸
- 112 土屋葉編著『障害があり女性であること 生活史からみる生きづらさ』現代書館
稲原 美苗
- 114 イヴァン・ジャブロンカ（村上良太訳）
『マチズモの人類史 家父長制から「新しい男性性」へ』明石書店
前川 直哉
- 116 編集方針・投稿規定

Debates on Sustainable Development: Personal Insights from a Feminist Political Ecology Approach

Wendy Harcourt*

The article is a personal reflection about the politics of sustainable development in global negotiating processes and what feminist theory and practice can bring to those processes. I first reflect on my experience as an advocate for gender and environment when the sustainable development debate first emerged at the UNCED Earth Summit in 1992. I then suggest how feminist political ecology in theory and practice can provide insights into how to reshape the sustainable development agenda by embracing the politics of care and commoning.

Keywords: Earth Summit, sustainable development, feminist political ecology, care, commoning

I. Introduction

As the ever-escalating environmental crisis indicates, sustainable development — a fair and just economic and social development that can be sustained without damage to the environment — continues to elude us. In this paper I share my personal experience of several decades as a feminist advocate and researcher involved in challenging and reframing sustainable development policy debates. As I write this article, the second Trump administration has shut down funding for development aid and UN agencies and confirmed its support for the fossil fuel industry and climate deniers. Now more than ever it is important to recall what the sustainable development agenda stands for, and why feminists need to engage with it.

The article is a personal reflection about

the politics of sustainable development in global negotiating processes by looking at what feminist theory and practice brings to those processes. Taking the feminist approach that personal is political does not mean just recording personal experience and emotions in some form of autobiographical recollection. Rather, it recognizes how starting from personal experience and observations strengthens what Sandra Harding (1986) calls “strong objectivity” which makes visible how knowledge emerges from personal experience. Inspired by Harding’s feminist standpoint theory, I critically reflect on my own experience as a feminist advocate to understand the knowledge claims made by people that guided political negotiations around sustainable development at both the grand scale of international relations and at the personal level of individual desire to protect the environment.

* Professor of Gender, Diversity and Sustainable Development, International Institute of Social Studies, Erasmus University Rotterdam

The article is a contribution to the feminist interrogations of existing economic and social orders from the perspective of the personal experience of someone living within that system, with the objective of producing knowledge that can bring about change.

In the first part of the article, I reflect on my experience as an advocate for gender and environment when the sustainable development debate first emerged at the UNCED Earth Summit in 1992. In the second part I discuss how the insights of feminist political ecology help us to reshape what sustainable development could mean today, over 30 years later, as we consider how to tackle increasing inequalities, environmental degradation and the climate crisis. I suggest that feminist political ecology can help us to shift the sustainable development agenda by embracing the politics of care and commoning at the centre of sustainable development processes necessary for the survival of our lifeworlds.

II. Sustainable Development at the UNCED Earth Summit

Since the early 1990s I have been involved in advocating for gender and environment in development policy as coordinator of campaigns and research projects at the international network the Society for International Development, the first international development NGO, founded in 1957. Over the years I have participated in various fora – policy, activist and academic – to bring a feminist political ecology critique to the discourse (meaning both practice and theory) of sustainable development within the global environment and development governance system, as well as social movement and academic arenas (Harcourt 1994; Harcourt 2012; Baksh and Harcourt 2015;

Harcourt 2016; Harcourt and Nelson 2015; Bauhardt and Harcourt 2019; Harcourt et al. 2023). At first, when engaging in sustainable development debates, I presumed with enough political pressure it was possible to change the economic system and end the exploitation of both nature and labour, and specifically women's labour. I belonged to the postdevelopment camp that was explicitly critical of economic development and neoliberal capitalism especially in its destruction of environment and cultures (Harcourt and Escobar 2005). As I trace below, in the early discourse of sustainable development there was hope that it would be possible to negotiate development processes and change the direction of political and economic capital to respect environmental limits and to improve the livelihoods of women and men in countries of the Global South. Over the decades, this hope faltered and alternatives to capitalist logic of exploitation of people and nature have become imperative.

Sustainable development in its first incarnation in the 1970s was about bringing poor countries of the Global South into industrialisation through development projects that provided economic growth and environmental protection (Arsel 2022). The stated goal of sustainable development following the first United Nations Conference on Human Environment, held in Stockholm in 1972, was to balance modernity, industrialization and economic growth while conserving the environment. The push for sustainable development was led mostly by governments of the rich countries of the industrialised world — the Global North — to counter unsustainable economic development practices based on the exploitation of the natural resources of people and territories, mostly of the developing countries of the Global South. Countries from the Global South in that period

contested sustainable development policies, concerned that protecting the environment would block their possibilities for industrialisation and economic growth (Arsel 2022). The shift towards sustainable development as a global concern involving the different interests of governments and civil society as well as businesses and industries in both the Global North and South began in the late 1980s with the Brundtland Commission on environment and development. The Commission redefined sustainable development as an integration of economic growth, social justice and environmental conservation to meet the needs of the poor and future generations while “protecting and enhancing the environment” (WCED 1987, ix).

It was at the Earth Summit held in Rio de Janeiro that the Brundtland Commission’s view of sustainable development was placed at the heart of international environment and development negotiations. It was in Rio that I first witnessed sustainable development policy negotiations at the global governance level at the Earth Summit. I attended the Earth Summit wearing two hats, one as a gender and development advocate and the second as a writer for *Development* the journal of the Society for International Development.¹ My tasks included covering an informal pre-meeting for Rio with Maurice Strong, founding Executive Director of the UN Environment Programme and chair of the Rio Earth Summit, as well as reporting on the events at the Earth Summit.

In my reporting I paid attention not only to the grand scale politics of state negotiations but also to the personal relations that enabled the negotiations. Due to opportunities my job offered, the Earth Summit enabled me to observe how personalities, and their networks, impact global policy. Attending the pre-summit business council meetings as journal editor and

report writer gave me an insider seat into the negotiations as the UNCED Earth Summit was being prepared. I saw how Maurice Strong, a Canadian millionaire fossil-fuel magnate operating with the political clout his money could buy, led the global environmental governance processes. In public and behind closed doors, he was adamant that sustainable development should not be just a government process. He opened the way for both the business sector and civil society to join in the negotiations, albeit at different levels. Through Maurice Strong, members of the fledging business council for sustainable development² made up of key international companies became embedded in the sustainable development policy debate as corporate and specifically oil wealth merged with global government at the negotiating tables. In this way Strong used his influence to promote a green agenda and to open up the concept of sustainable development to different stakeholders.

The role of Strong and those around him (including those in my organisation) meant that from the beginning the sustainable development agenda was positioned between business interests and the civic ideals of visionaries like Barbara Ward, a British economist and writer who was an early advocate of sustainability writing the report for the 1972 Stockholm meeting.³ Ward pushed for rich nations to share their prosperity with poorer countries. She founded the International Institute for Environment and Development and was a member of the Club of Rome, which commissioned the influential report *Limits to Growth* (Meadows 1972).⁴ The authors of *Limits to Growth* argued that continuous economic growth would lead to environmental disaster given the finite natural resources of our planet. The report examined ecological as well as socio-economic development trends using early computer models. Many of its authors were involved in discussions

leading to Rio.

Ultimately, though, the concerns of the visionaries and environmentalists were seconded to business interests. The global environmental architecture set up at Rio was based on the assumption that government regulations and agreements could be put in place to ensure businesses would follow a green agenda. The underlying narrative was that further industrialization would be the best for the Global South while paying attention to conservation through technologies and development projects. Businesses would recognise that a totally free market was not workable and that some measures need to be in place to counter environmental degradation. Strong helped to establish business as partners with government in the sustainable development debate, bringing in their economic technical professionalism and skills. Business inserted itself, via connections with Strong and others, into the UN environmental mega-conference system as part of global environmental structure to tackle climate, biodiversity and forestry pollution. These goals were captured in Agenda 21 adopted by 178 countries which set out guidelines for global strategies to clean up the environment and put in place sustainable development. In addition, governments agreed on technical treaties around climate change and biodiversity: The Convention on Biological Diversity to protect plants, wild animals and endangered species and the UN Framework on Climate Change that required nations to reduce their emissions.

At the same time Strong opened up the possibility for non-governmental organisations (NGOs) to shape the debate as a 'third' sector. Strong enabled the setting up of the Centre for Our Common Future led by Warren 'Chip' Linder which coordinated NGOs during the Earth Summit

and also promoted corporate responsibility as a strategy alongside environmental conservation and an anti-poverty agenda. NGOs were cast as non-state actors, as observers and advocates and implementers of agreed international guidelines through projects funded by state and the private sector. NGOs were at that time represented by a few established environmental and development NGOs such as World Wildlife Fund (WWF) or charities such as Oxfam or my own organization — the Society for International Development. Their voices were heard in the progressive document that emerged from the Earth Summit through the Club of Rome, 'The Earth Charter', which spoke to the broader social issues of human rights, environment and development.⁵

The result of Rio was that business and industry groups could utilize sustainable development as a tool for their 'green agendas' in the UN. Transnational corporations and the World Trade Organization became part of global environmental governance structures. And there was also space for sustainable development as an ideology and vision to be shaped by NGOs as they pivoted around the UN governmental system at a distance.

This distance was evident at Rio itself. As Chair of the UNCED Earth Summit, Strong created divisions among civil society, governments and business. While businesses could attend the official meeting, new practices were put in place at UNCED that determined who could be at the negotiating tables, restricting NGO attendance to those with consultative status one to the United Nations Economic and Social Council (ECOSOC 1).⁶ Strong was instrumental in the setting up of the Global Forum for NGOs held at Flamengo Park, which was attended by half a million people and over 1,600 organisations. This International Forum of NGOs and Social Movements was

the largest ever civil society encounter with the UN system at that time. The Forum brought together international networks of women, youth, religious leaders and indigenous peoples (Seymoar 1992). I was able to attend the two spaces, as my organisation was ECOSOC 1. While in the official venue I could listen and take notes (invaluable for my journal and reports), it was at the Global Forum that I was able to speak and where there was a clear space for a gender, environment and development agenda.

If Maurice Strong and his cronies helped to open the sustainable development agenda to the business sector, it was the indomitable US Congress-woman Bella Abzug and her women's rights network that brought women, environment and development issues to sustainable development through the recently founded Women's Environment Development Organisation (WEDO).⁷ WEDO was the leading group at the Summit that organised caucuses on women, development and environment in the official UNCED space and which sponsored the large and visible Women's Tent in Flamengo Park. WEDO's preparation for the Earth Summit began in 1991 at the Miami Women's Congress for a Healthy Planet (Harcourt 2006). It was organised by the Women's International Policy Action Committee made up of 54 women from 31 countries. The Congress itself hosted 1,500 women from 83 countries who collectively prepared the Women's Action Agenda 21, which demanded space for women's voices to be heard and directly fed into the Earth Summit through the Planeta Femea (The Women's Tent) at the NGO Global Forum. Planeta Femea assembled over 1,200 women daily to consolidate their perspectives on environment and development issues and to enable NGOs, especially women's NGOs, to shape sustainable development.

The Miami Women's Congress and the

Planeta Femea enabled a united contribution by women to the official development discourse. In Miami, women strategized together about how to be effective in the global policy debate so that they could ensure diverse women's needs were in international policy agreements, and how then to translate them into action at home. They were critical of the mainstream development that treated women, the environment and population as technical subjects within the overarching goal of improving economic growth. Instead, they aimed to shape the sustainable development agenda by acting as a bridge between local needs and the complex global policy setting with the slogan "act local, think global". They challenged gender-biased, monocultural, militaristic and economic discourse focused on markets and Western science and they questioned elitist technical solutions to poverty, injustice and environmental degradation (WEDO 1992; APDC 1992). The message from Miami was that the destructive forces of global capitalism and patriarchal exploitation are intimately linked and have led to ecological destruction and gender inequalities. At the same time the experiences shared in Miami illustrated how women resist the exploitation of nature and women's productive and reproductive labour in cultivating sustainable and just ecological practices.

The Miami Women's Action Agenda 21 and Planeta Femea's Women's Declaration at the Rio Conference fed into Chapter 24 on women under the section "Strengthening the Role of Major Groups", in Agenda 21, which was the final text of agreements negotiated by governments at the Earth Summit (UNDPI 1992). The women's agenda was far ranging, bringing together in a holistic and critical account "women's issues" from sexuality and health to legal rights to land and the fight against big corporations destroying community and nature as well as gender blindness of

economics and development policy. The emphasis was on finding strategic common ground, along with a shared sense of optimism that the women's movement could take on the establishment in the spirit of the Women's Action Agenda 21, which pushed an alternative order of economic, social, cultural and political interaction based on gender balance, and equity and justice for all peoples, species and generations (Antrobus 2004).

Both the Miami and Rio de Janeiro meetings were historic moments that fostered a collective feeling of hope and excitement and a belief that women could negotiate with government and ultimately bring about transformative practices and culture. As Abzug stated, they heralded "a new direction – a world at peace, that respects human rights for all, renders economic justice and provides a sound and healthy environment" (Dankelman 2012). The aim was to move the narrative from women as victims of environmental degradation to see women having agency and knowledge to shape the agenda. Even if the strident demands of Miami were watered down in the official Agenda 21, women's voices and demands were there.

During the following UN mega-conferences of the 1990s, leading to the 2000 Millennium Development Goals and 2015 Sustainable Development Goals, women advocates and professionals working in UN agencies pushed for a strong understanding of the need for a gender and environmental approach to development (WEDO 1992). As I have written elsewhere (Harcourt 2012), as the governance structures became institutionalised, personalities such as Strong and Abzug became less powerful. Still, given the current situation of Trumpian chaos and destruction, it is salutary to recall earlier legacies and how individuals can impact agendas even if ultimately, we need to find alternatives to economic

development and neoliberal capitalist agendas.

I have drawn attention to WEDO and the work of Abzug because it set the way for a collaborative feminist engagement within UN spaces that remains in practice today. The caveat is that though women became more visible in negotiations around sustainable development, their demands became more mainstreamed and less feminist (Baksh and Harcourt 2015) as over time the radical perspectives of Miami's The Women's Action Agenda and even the Rio Conference Agenda 21 became diluted. The ins and outs, ups and downs, of how feminists worked within the environmental governance system to bring gender into sustainable development I have discussed in other reflections (Harcourt 2005, 2012). I now turn to how feminist political ecology emerged as a field of study in conversation with gender, environment and development activists and policy makers working on sustainable development.

III. Feminist Political Ecology concepts applied to sustainable development

Broadly speaking, feminist political ecology studies the individual and collaborative politics and practices in the search for environmental sustainability, social justice and economic transformation. In this approach, feminist political ecology sees gender as a profoundly important concept with which to analyse the world (Elmhirst 2011). Gender is not just a static descriptive category, it is in a constant state of negotiation and articulation in different racialized, social and political environmental contexts. Gender relations are produced in the multiple and intersecting exercise of power within economic, socio-natural networks and institutions and in our everyday

practices that are continually renewed in the material environments we live in and experience (Harcourt 1994).

When analysing sustainable development policy, feminist political ecologists examine how gender inequalities are embedded in a multidimensional web of relationships between women and men and other genders, which operate at every level of human experience according to location, natural environment, culture, governance and socio-economic structures. Sustainable development requires profound systemic change at different scales; from changes in everyday relations to global institutional transformation, individual experiences of gender relations interact and are shaped by the global arena.

Feminist political ecology sees gender as key to understanding relations with the environment. It is through our gendered selves that we make sense of the material and emotional dimensions of how we live life. Our experiences of our gender connect us to others through scales of meaning from our intimate relations and surroundings to global institutional formations. How we perceive and are perceived in our gendered selves determine how we go through our personal life's cycle, interact with others on a daily basis, fare in different institutions, social, economic and cultural groups, and how we endure the marks of oppression or privilege. Our gender determines who has access, who can negotiate, linked to culture, education, labour we perform as well as geographical context and type of knowledge we hold. At the Miami Women's Congress and Planeta Femea the focus was on how to bring women's experience and knowledge into decision making spaces so that their gendered experience of environment, beginning with their productive and reproductive labour, at different scales could contribute to a grounded transformative sustainable development.

From my short reflection on the Earth Summit, using the lens of feminist political ecology we can see how gender relations intersect with economics and politics to shape the sustainable development agenda. It is a complex discourse where powerful peoples' influence, experiences and knowledge (such as Strong or Abzug) count. But it was also the different practices that determine which policy emerges: the inclusion or exclusion of groups of people at the official negotiating table or the creation of different spaces and possibilities of influence due to sheer numbers at the NGO Forum. Understanding the different ways relations operate according to gender, race and class in different policy negotiations helps us to see the how sustainable development emerges as a discourse practiced by governments, determined by powerful states, as well as conservation NGOs and business interests in a capitalist system. Strong and Abzug were two powerful individuals who impacted the way sustainable development policy was shaped, but so were the local individuals representing NGOs at Flamengo Park or the chief executive officers of businesses lobbying for a green business agenda at the governmental conference. Class, race and gender intersect in ways that determine, in this case, how individuals could access the rooms that made decisions about how environmental, social and economic resources could be accessed and shape the search for sustainable development.

Moving away from high level global negotiations which framed the international sustainable development debates, feminist political ecology also looks at sustainable development in practice in local places, the urban places, rural settlements, forests, fields, rivers and oceans which determine peoples' practice and knowledge of nature. Feminist political ecology does not separate out local environs from global spaces, rather it looks at how the local shapes the

global, and vice versa in sustainable development. Feminist political ecology focuses on how everyday ecologies are mediated by household and community practices as the global sustainable development agenda is embedded in different local, national and global economic policies. Feminist political ecology studies gender power relations in agricultural practices, waste, water and forest management and labour and household relations to see how sustainable development is rooted in local ecological and economic processes scaling up to the global larger picture. By exploring what is happening in specific places which are negotiating life and livelihoods in human damaged environments in different communities, different everyday labours, feminist political ecology calls attention to emotions, feelings, the spiritual, non-scientific knowledges and interactions with non-humans, with technologies, life and death. In this bottom-up rather than top-down approach to sustainable development, feminist political ecology contributes to rethinking economic and ecological values in a profound critique of capitalism.

This rethinking is not easy in the face of positivist science, which divides nature from society and siloes knowledge, separating hard from soft science and perceives nature as a resource, something to be expropriated, extracted and developed as part of capitalist progress. Over the years of engaging in sustainable development debates, I have become aware of how hard it is for western knowledge systems to understand relations with nature outside of capitalist exploitative gaze. Notions of care, reciprocity and commoning, which prioritize how to live with nature, can be perceived as unrealistic or romantic as they are not driven by economic growth or based on technocratic ways of organizing life. But with worldwide escalation of environmental and climate crises there is an increasing awareness of the need to question a

capitalocentric view of nature. Over fifty years ago Rachel Carson warned that the attempt by people to control nature through pesticides and agribusiness was arrogant, dangerous and will lead to disaster. The uncomfortable questions Carson asked in her book *Silent Spring* in 1962 are even more vital today as the visible impacts of modern industrialization's exploitation of nature are impossible to ignore with climate change leading to fires, floods and global warming. We are exploiting ourselves, our health, well-being and our future.

A major set of questions that feminist political ecology asks is how to change our relationship with nature, and to act recognizing that cultures, societies and economies are dependent on nature, indeed are "tightly knotted" together in our "bodies, ecologies, technologies and times" (Haraway 2007, 107). Sustainable development cannot just be a story of economically and technologically determined finite systemic coherence ruled by institutional governance structures. As renown feminist thinker Donna Haraway warned: we need to become ecological naturalcultural communities if we are to avoid "irreversible climate change and continuing high rates of extinction and other troubles" (Haraway 2016, 11).

These naturalcultural communities can be viewed as commons where people's lives are intertwined with nature, and where nature is not seen as a commodity but as a lifeworld that all living beings share. Belonging to the commons means sharing responsibilities with other beings and recognizing the role of not only peoples' labour but also nature's 'labour' in making our shared commons built on economies of caring and sharing, of flourishing and regenerating. Care for and with other living beings is key to the project of commoning, recognising our personal and political entanglements with nature. These "affective

socionature entanglements” are nurturing grounds for “other than capitalist subjectivities” based on empathy for people and other beings sharing our lifeworlds (Singh 2017, 751). By recasting sustainable development as the search for just lifeworlds, feminist political ecology looks at the relation between more-than-human others and the gendered roles of the reproductive labour of caring for and sustaining the commons (the reproductive commons), critiquing the capitalist discourse about nature as separate from the social domain, to be used as resource for exploitation or conservation for human benefit. In this reframing, feminist political ecology sees care and commoning as key to narratives and practices of sustainable development as we ‘politicize, reimagine, and recreate socio-ecological relations’ (Burke and Shear 2014, 128).

In the following section, I look at how care and commoning can reshape the discourse of sustainable development.

IV. Care and commoning as ways forward for sustainable development

Feminist political ecology understands relations of care as the material and physical processes that sustain ecosystems and human and more-than-human living worlds (Elmhirst 2018; Harcourt et al. 2023). Care is at the core of safeguarding planetary well-being (Barca 2020). In its focus on care, feminist political ecology builds on multiple writings about care, such as Joan Tronto’s understanding of the ethics of care and Maria Puig de la Bellacasa’s *Matters of Care* (2017). These feminist writers see care as “everything that is done to maintain, continue and repair the world” (Tronto 2015, 3) so that “all can live in it as well as possible” (Puig de la Bellacasa 2017, 161). They

invite us to put “caring at the heart of the search for everyday struggles for hopeful flourishing of all beings” (Puig de la Bellacasa 2017, 22). Tending to “relationships between people, place, and stories – will be crucial as we face the challenges of these times” (Todd 2016, 383). And, as ecofeminist Val Plumwood stated: “[w]e are in desperate need of stories that create much greater transparency of [environmental] relationships in our day-to-day lives. We must once again become a culture of stories ... This is the real meaning of ecological literacy ... we have eliminated the stories that connect the two realms of nature and culture” (Plumwood 2003, 44-5).

Commoning is a practice that connects nature and culture and brings to the fore care for human and other sentient beings by paying attention to and fostering environmental relations. Silvia Federici (2010) sees commons as ‘community’, as the relations built on principles of cooperation and of responsibility of humans to each other and to the earth, the forests, the seas, the animals. Commoning is “the collective actions by communities which reconnect human and more-than-human beings. It is based on reciprocity and relations in practices of care where “people come, share and act together” (Clement et al. 2019). It is through commoning that communities reclaim and reappropriate local environmental resources as a “covenant of reciprocity” (Kimmerer 2013). It involves negotiating “access, use, benefit, care and responsibility [through] commoning as a relational process” (Gibson-Graham et al. 2016, 196).

Commoning as a transformative practice of care becomes an alternative way of doing politics, “of imagining and enacting pluriversal, postcapitalist worlds that challenges human exceptionalism and bounded individualism” (Garcia-Lopez et al. 2022, 84-5). It is through commoning that marginalised people around the

world are able to sustain their resources through relations of care, trust and responsibility with each other and other more-than-human beings. As a practice of care, commoning offers the alternative ways of thinking and doing that Haraway and Plumwood call for if we are to create liveable forms that sustain our lives and our development of communities where humans are in relation with nature. It can be seen as a socio-ecological transformative development based on solidarity, social equity and sustainability. It requires that we understand humans as part of living landscapes imbued with dynamic social and ecological relations.

Examples that have inspired me personally to think more deeply about commoning and care as a way forward for sustainable development include writings about the indigenous Australian practice of “Caring for Country”. Caring for Country is the term used by First Nations Australians for “an integrated, more-than-human presence that incorporates land, animals and people, but also non-human beings such as tides, waters, winds, insects, rocks, plants, languages, emotions, songs and ancestors” (Suchet-Pearson et al. 2013). Indigenous stories about Country are based on deep notions of care and human responsibility to live with other beings in reciprocal ways that nourish. As a white settler Australian, I may not fully understand relations with Country, but I am inspired by how Caring for Country is based on an “ethics of collaboration and care, based on recognition of human and non-human agency, is one that would nurture relationships, responsibilities and accountabilities” (Suchet-Pearson et al. 2013). Caring for Country encompasses “looking after all of the values, places, resources, stories, and cultural obligations associated with that area, as well as associated processes of spiritual renewal, connecting with

ancestors, food provision, and maintaining kin relations” (Turner et al. 2023, 1). Suchet-Pearson et al. explains the practice of Caring for Country in the Yolŋu ontology of co-becoming through the gathering of *miyapunu mapu* (turtle eggs):

What it means to see humans as one small part of a broader cosmos populated by diverse beings and diverse ways of being, including animals, winds, dirt, sunsets, songs and troop carriers, we argue for a way of knowing/doing which recognises that ‘things’ can only come into ‘being’ through an ongoing process of be(com)ing together. They are never static, fixed, complete, but are continually emerging in an entangled togetherness. Fundamental to this ontology of co-becoming are key lessons around attention, responsibility and ethics (Suchet-Pearson et al. 2013, 186).

The sharing of stories in these small examples of possible ways for transformation paying attention to turtles and togetherness with them are important. These examples are tangible evidence of why care matters and the importance of valuing care as an ethical and political practice. Following this approach, we can begin to understand how sustainable development can be based on caring collaborations with nature which recognise human and non-human agency and which nurture relationships, responsibilities and accountabilities. Care through commoning holds communities together, restoring neglected and damaged ecologies.

Instead of an anthropocentric human control over nature, sustainable development could pay attention to human relations with all sentient beings so that “all humans and non-humans, actors, actants, everything material, affective, all processes and relationships, are not *things*, are not

even isolated *beings*, but are entangled becomings, creative and vital and always in the process of becoming through their connections” (Suchet-Pearson et al. 2013). These becomings happen on different scales, from respecting turtles’ egg laying to the Australian government recognizing that sustainable development requires different kinds of knowledge about fire management, carbon abatement, invasive species control and water management if climate and environmental crises are to be overcome. White settler Australia is (very slowly) learning to walk in allyship and to take responsibility for a shared living world learning from indigenous practices’ processes of commoning to care for and with Country (Harcourt 2019).

Another inspiring vision comes from Potawatomi Nation botanist Robin Wall Kimmerer who invites us to consider sustainable development through an indigenous world view that argues that western knowledge should allow indigenous peoples to have “a voice in how that land cared for and cares for itself” (Kimmerer 2013). She argues for a “two eye seeing” model where sustainable development requires indigenous science as well as western science. She speaks about sustainable restoration which draws upon indigenous people’s knowledge and relationship with the land. This requires restoring caring relations with the land through processes of healing and reconciliation. Her book *Braiding Sweet Grass* (2013) is based on such a process, “woven from three strands: indigenous ways of knowing, scientific knowledge, and the story of an Anishinabekwe scientist trying to bring them together in service to what matters most. It is an intertwining of science, spirit, and story—old stories and new ones that can be medicine for our broken relationship with earth” (Kimmerer 2013, x). Kimmerer sees sustainable development about learning reciprocity in such a

way that “as we work to heal the earth, the earth heals us” (Kimmerer 2013, 340).

Paying attention to Kimmerer and other indigenous scholars, feminist political ecology aims to “open up space for recognizing, envisioning, and making life-affirming ecologies rather than extractive systems of destruction’ in ways ‘capable of protecting and defending life and living worlds” (Ojeda et al. 2022, 150). In this understanding, sustainable development places care at the centre of environmental processes involving a collaboration of communities building up from their knowledge and experience to global processes in a bottom-up not top-down approach. Sustainable development would not be about the management of nature and green growth but rather about a commoning process that allows “emancipatory emergent ecologies that are care-focused and life affirming” to flourish (Ojeda et al. 2022, 157-158).

V. Strategies for sustainable development

In reshaping our understanding of sustainable development, feminist political ecology proposes that practices of caring and commoning resources could move the world towards greater social justice and ecological sustainability. Dialoguing with diverse worldviews, such as indigenous ways of living with the land, would allow a new form of sustainable development based on ways to reappropriate, reconstruct and reinvent personal and political lifeworlds (Rocheleau and Nirmal 2015).

As I have underlined in this article, care and commoning are both ethically and politically charged practices. Therefore, there is substantive political work to do in order to shape sustainable development so that it can help tackle gender

inequality and the destruction of the Earth particularly for communities exposed and displaced by climate change and environmental destruction in the Global South. As part of reshaping sustainable development, we need to find ways to promote and practice community, relationship building, and care for the planet and for each other. A caring economy that acknowledges gender/environmental relations has to be embedded in the principles of commoning, based on cooperation, sharing, reciprocity, and intersectional environmental justice. Instead of 'greening' the economy we need to be sustaining livelihoods to ensure nutrition, ecological balance, clean water, secure housing, gender equality, meaningful approaches to all forms of labour (Di Chiro 2019). To value care is to recognise our mutual interdependency and our need for sustainable and flourishing relations, not merely survivalist or instrumentalist ones (Rocheleau and Nirmal 2015; Ojeda et al. 2022).

Care and commoning are about the everyday politics of securing the conditions for regeneration and flourishing. If we are to deal with the climate crisis we need to care for the soil, water, non-human animals and plants. Commoning includes care for local ecosystems and strengthened collaboration and reciprocity between humans and nature to create more resilient ecosystems and transform interpersonal relations to be more aligned with intergenerational, intercultural and interepistemic justice.

There are many examples of convivial caring relations among people and their environments where commoning as a practice of care is visceral, material and emotional, linking selves, communities, natural and social worlds such as traditional farming and fishing communities, agroecology, transition towns, slow food movements, community gardens and kitchens

(Escobar 2007; Harcourt et al. 2023). What these examples tell us is that by placing care at the centre of sustainable development we can reshape our economies, societies and our relations with the environment in order to move towards planetary survival.

Instead of the dominant narrative of technofuelled extractivism, AI knowledge systems and fears about energy depletion leading to further conflicts, wars, climate disaster, we need to reshape the sustainable development narrative. It is important not to forget past visions such as those expressed in the Miami Congress and Planeta Femea at the Earth Summit over 30 years ago. Many of the issues we are grappling with now were foreseen at those events. For me, that vision of sustainable development still has meaning, not as a set of goals that require almost impossible agreements to be met by governments, businesses and NGO professionals but the grounded and rooted ways that communities already find to live within our limits, that are caring and respectful of each other and other forms of life on our finite planet. It is important that sustainable development supports and strengthens these commoning-communities as part of a place-based politics that is building a global network based on care.

Notes

- 1 I curated a special issue on the Earth Summit (The Society for International Development 1992) which features both Strong and Abzug and a series of Reports for Women in Development Europe (1992). For current information about SID see <https://www.sidint.org/> and the Development journal at <https://www.palgrave.com/gp/journal/41301>
- 2 In 1995 this turned into the global business council for sustainable development made up of 60 business leaders (now 230) see <https://www.wbcsd.org/>
- 3 Only One Earth: The Care and Maintenance of a Small Planet (1972).

- 4 See <https://www.iied.org/iied-founder-barbara-ward-and-her-report-for-the-stockholm-conference-only-one-earth-the-care-and-maintenance-of-a-small-planet-1972>.
- 5 See <https://earthcharter.org/> and <https://earthcharter.org/the-movement/>
- 6 The United Nations body responsible for coordinating the economic and social fields of the organization (agencies and commissions).
- 7 For the history of WEDO as a global women's advocacy organisation on environment and development, see <https://wedo.org/>

References

- Antrbus, Peggy. 2004. *The Global Women's Movement*. London: Zed Books.
- Arsel, Murat. 2022. "The Myth of Global Sustainability: Environmental Limits and (de)growth in the Time of the SDGs" in Murat Arsel, Anirban Dasgupta, and Servaas Storm. eds. *Reclaiming Development Studies: Essays for Ashwani Saith*. Cambridge: Cambridge University Press: pp261-277.
- Asia Pacific Development Centre (APDC). 1992. "Women, environment and development." *Issues in Gender and Development*, Special Issue No. 4, September. Kuala Lumpur: Asia Pacific Development Centre.
- Baksh, Rawwida and Wendy Harcourt. eds. 2015. *Oxford University Press Handbook on Transnational Feminist Movements*. New York: Oxford University Press America.
- Bauhardt, Christine and Wendy Harcourt. eds. 2019. *Political Ecology and the Economics of Care — In search of Economic Alternatives*. London: Routledge.
- Barca, Stefania. 2020. *Forces of Reproduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Burke, Brian and Boone Shear. 2014. "Introduction: engaged scholarship for non-capitalist political ecologies." in special section Non-capitalist political ecologies, *Journal of Political Ecology*, 21: pp. 127-221.
- Carson, Rachel. 1962. *Silent Spring*. New York: Houghton Mifflin.
- Clement Flora, Wendy Harcourt, Deepa Joshi and Chato Sato. 2019. "Feminist political ecologies of the commons and commoning" Editorial to the Special Feature. *International Journal of the Commons* 13(1): pp. 1–15.
- Dankelman, Irene. 2012. *Gender and Climate Change*. London: Earthscan.
- Di Chiro, Giovanna. 2019. "Care not growth: Imagining a subsistence economy for all." *The British Journal of Politics and International Relations*, 21(2): pp. 303–311.
- Elmhirst, Rebecca. 2011. "Introducing New Feminist Political Ecologies." *Geoforum* 42(2): pp. 129–132.
- . 2018. "Feminist Political Ecologies — Situated Perspectives, Emerging Engagements." *Ecologia Politica* 54. Special Issue on Ecofeminism "Ecofeminismos", January 2018: n.p.
- Escobar, Arturo. 2007. "World and Knowledge Otherwise. The Latin American modernity/coloniality research program." *Cultural Studies* 21 (2-3): pp. 179-210.
- Federici, Silvia. 2010. "Feminism and the Politics of the Commons" in Craig Hughes, Stevie Peace and Kevin Van Meter for the Team Colors Collective. eds., *Uses of a WorldWind, Movement, Movements, and Contemporary Radical Currents in the United States*. Oakland: AK Press: pp. 1-14.
- García-López, Gustavo, U Lang and Neera Singh. 2022. "Commons, commoning and co-becoming: Nurturing life-in-common and post-capitalist futures." *Environment and Planning E: Nature and Space*, 4(4): pp. 1199-1216.
- Gibson-Graham, J.K., Jenny Cameron and Stephen Healy. 2016. "Commoning as a postcapitalist politics 1" in Amin, Ash and Philip Howel, *Releasing the Commons. Rethinking the futures of the commons*, London: Routledge: pp. 192-212.
- Haraway, Donna. 2007. "Speculative Fabulations for Technoculture's Generations: Taking Care of Unexpected Country." *Australian Humanities Review* 49: pp. 95-118.
- Haraway, Donna. 2016. *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene*. Durham and London: Duke University Press.
- Harding, Sandra. 1986. *The Science Question in Feminism*. Ithaca: Cornell University Press.
- Harcourt, Wendy. 2021. 'Rethinking life-in-common in the Australian landscape.' *Environment Planning E, Nature and Space*. 4(4): pp. 1330–1345.
- . 2006. "The Global Women's Rights Movement Power Politics around the United Nations and the World Social Forum" *Civil Society and Social*

- Movements Programme Paper 25* Geneva: UNRISD: pp. 1-26.
- . ed. 2012. *Women Reclaiming Sustainable Livelihoods: Spaces Lost, Spaces Gained*. London: Palgrave.
- . ed. 2016. *The Palgrave Handbook on Gender and Development Handbook: Critical engagements in feminist theory and practice*. London: Palgrave.
- . ed. 1994. *Feminist Perspectives on Sustainable Development: shifting knowledge boundaries*. London: Zed Books.
- Harcourt, Wendy, Ana Agostino, Rebecca Elmhirst, Marlene Gomez and Panagiota Kotsila. eds. 2023. *Contours of Feminist Political Ecology*, London: Palgrave.
- Harcourt, Wendy and Ingrid Nelson. eds. 2015. *Practicing Feminist Political Ecology: Beyond the Green Economy*. London: Zed Books.
- Harcourt, Wendy and Arturo Escobar. eds. 2005. *Women and the Politics of Place*. Bloomfield CT: Kumarian Press.
- Hernández, K.J, June Rubis, Noah Theriault, Zoe Todd, Audra Mitchell, Bawaka Country, Laklak Burarrwanga, Ritjilili Ganambarr, Merrikyawuy Ganambarr-Stubbs, Banbapuy Ganambarr, Djawundil Maymuru, Sandie Suchet-Pearson, Kate Lloyd and Sarah Wright. 2021. “The Creatures Collective: Manifestings.” *Environment and Planning E: Nature and Space*, 4(3): pp. 838–863.
- Kimmerer, Robin Wall. 2013. *Braiding Sweet Grass: Indigenous Wisdom, Scientific Knowledge, and the Teachings of Plants*. Minneapolis: Milkweed Editions.
- Meadows, Donna. 1972. *Limits to Growth*. New York: Universe Books.
- Ojeda, Diana, Padini Nirmal, Diane Rocheleau and Jody Emel. 2022. “Feminist Ecologies.” *Annual Review of Environment and Resources*. 47: pp. 149-171.
- Plumwood, Val. 2003. “Environmental Culture: The Ecological Crisis of Reason.” *Environmental Values*. 12 (4): pp. 535-537.
- Puig de la Bellacasa, Maria. 2017. *Matters of Care: Speculative Ethics in More than Human Worlds*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Rocheleau, Diane and Padini Nirmal. 2015. “History and Trajectories of Feminist Political Ecologies — Grounded, Networked, and Rooted on Earth” in Baksh, Rawwida and Wendy Harcourt. eds., *The Oxford Handbook of Transnational Feminist Movements*. New York, NY: Oxford University Press: pp. 793–814.
- Seymoar, Nola. 1992. “Results of Rio: An emerging social movement.” *PCDForum Column #38* July 20.
- Singh, Neera. 2017. “Becoming a commoner: The commons as sites for affective socio-nature encounters and co-becomings.” *Ephemera* 17(4): pp. 751–776.
- Suchet-Pearson, Sandie, Sarah Wright, Kate Lloyd and Laklak Burarrwanga. 2013. “Caring as Country: Towards an ontology of co-becoming in natural resource management.” *Asia Pacific Viewpoint*, 54 (2): pp. 185–197.
- The Society for International Development. 1992. *The Earth Summit Special Issue* volume 1992(2) Rome: The Society for International Development.
- Turner, Bethaney, Anne Hill and Jessica Abramovic. 2024. “Learning with compost: digging down into food waste, urban soils and community.” online version July 2024, *Local Environment*: pp. 1-15.
- Tronto, Joan. 2015. *Who cares?: how to reshape a democratic politics*. Cornell: Cornell University Press.
- United Nations Department of Public Information (UNDPI).1992. “Earth Summit—Agenda 21, The United Nations Programme of Action from Rio.” United Nations: New York.
- World Commission on Environment and Development (WCED). 1987. *Our Common Future*. United Nations, New York: Oxford University Press.
- Women’s Environment and Development Organization (WEDO). 2005. “Beijing Betrayed: Women World Wide Report that Governments Have Failed to Turn the Platform into Action.” New York: WEDO.
- . 1992. “Official Report: World Women’s Congress for a Healthy Planet.” World Women’s Congress Secretariat New York: WEDO.

Exploring How Commoning Helps Reconfigure Feminist Analytical Tools in Times of Socio-ecological Crises

Chizu Sato*

Commoning, the processes of the production of community through collective management of a commons, is widely practiced in Japan, but commoning, as an analytic, is rarely used by feminist scholars in Japan. It is forecasted that Japan's demographic transition combined with the wave of conservative politics will both threaten existing commoning activities and impose negative commons on large segments of the population. This essay explores the productivity of the analytic of commoning, which derives from postcapitalist community economies and feminist political ecology for our times of socio-ecological crises. Drawing on a case study of older women's entrepreneurial activities in rural Japan, I make connections between commoning and concepts such as gender, intersectionality, economy, community care, agency, and transformation, which are already familiar analytical tools of feminist scholars in Japan. Commoning increases the visibility of productive but often overlooked dimensions. I discuss how reconfiguring the conceptual tools we use to include commoning makes it possible to see new potential paths towards transformations from exploitative, patriarchal and extractive to less exploitative and more just socio-ecological relations in our times of socio-ecological crises.

Keywords: Commoning, feminist political ecology, postcapitalism, community economies, negative commons

I. INTRODUCTION

Over the last decade, commoning, as both a practice and an analytic, has gathered attention from leftist activists and scholars for its transformative potential. While commoning has only gained attention recently, the notion of commons has been well used since the early 1990s. Within Western academic feminist circles, commons have been one focus for those who study the human-environment nexus, examining gendered struggles over commons or, more specifically, common pool resources, informed by Ostrom's institutional approach

(1990). Before current uses of commoning, the processes through which community is produced by collective management of a commons, gained analytical currency in the early 2010s, the term was used in the context of social reproduction (e.g., care work, housework) and that notion of commoning was actively called for during the 1970s' Wages for Housework campaign by Autonomist Marxist Feminists such as Mariarosa Dalla Costa (1988) and Silvia Federici (2012). In the 2010s, the entry of degrowth as a social movement and an academic field saw the current understanding of commoning as affording strategies for transformations towards degrowth.

* Wageningen University

Community economies scholars Gibson-Graham et al. (2016) integrated Peter Linebaugh's (2008) suggestion that we see commons not as an object, a commons, but as activity – commoning – into their postcapitalist project of reading property for difference. The work of Gibson-Graham was introduced to feminist political ecology in the late 2010s in a special issue in the *International Journal of the Commons*.

Commoning as an analytic is not yet widely used by feminist scholars in Japan. This was despite the study of Iriai (入会), collective management of the environment, being of sufficient presence within Japan and interest internationally to hold the IASC conference in Japan in 2013. Around the same time, through contact with a number of feminists who were members of the Japan Association for Feminist Economics, I also learned that feminist political economy scholars in Japan were interested in exploring the human-environment nexus and Marxism. Based on my limited knowledge, neither feminist political ecology (with the exception of Aya Kimura) nor community economies were well-studied in Japan. My own interest in commoning stimulated me to explore the analytical potential of commons and commoning for the reconfiguration of feminist analytical tools from a postcapitalist feminist political ecology perspective in support of transforming patriarchy, capitalism and the human-environment nexus in times of socio-ecological crises.

Drawing on the case studies of women's entrepreneurial activities in rural Japan (Nakamura and Sato 2023; Sato et al. 2025), in this essay I discuss commoning in the context of negative commons, which is an externally or structurally imposed (unwelcome) practice, knowledge or property. For example, the destruction of a commons produced when organic waste

management was commodified (Mies and Benholdt-Thomsen 2001) and the impacts produced by radiation contamination from the 2011 Fukushima nuclear disaster (Kohso 2012, 2020), both of which disrupted previously existing socio-ecological ties that bound, and which affected the formation of a community. Commoning negative commons is an activity by a diverse population coming together to collectively manage negative commons. While negative commons are often seen in environmentally and socially hazardous conditions, the case study backing this essay enables us to see the commoning practices of a rural population negatively affected by a combination of industrialisation, urbanisation, depopulation, aging, state policy, environmental degradation and people's desire, among others. From a perspective that is informed by feminist ethics of care that sees care as "a species activity that includes everything we do to maintain, continue, and repair our 'world' so that we can live in it as well as possible" (Fisher and Tronto 1990, 40) where 'our world' means our bodies, our selves and our environment, this commoning through collective maintenance, continuation and repair of the negative commons is a form of caring. It is forecast that Japan's demographic transition combined with the wave of conservative politics will both threaten existing commoning activities and impose negative commons on large segments of the population. Ways of understanding mutual care that are independent of the desirability of change in circumstances are thus particularly important. In this essay, I use commons, negative commons and commoning in combination with familiar concepts, gender, intersectionality, economy, community, care, agency and transformation, from a postcapitalist feminist political ecology perspective to better situate commons and commoning in relation to

existing analytical tools of feminist scholars in Japan.

Below, I first briefly introduce my postcapitalist feminist political ecology approach to commons and commoning and, from that perspective, I identify six sets of analytical problematics I often encounter in current feminist analytical tools. Drawing examples mainly from a case study from rural Japan, I then explore how reconfiguring the analytical tools we use to include an understanding of commoning that accommodates negative commons may help increase the visibility of productive but often overlooked dimensions. I conclude the essay with a discussion of new potential paths towards transformations from exploitative and patriarchal to less exploitative and more equal and socio-ecologically just relations in times of socio-ecological crises.

II. THE POSTCAPITALIST FEMINIST POLITICAL ECOLOGY APPROACH

The approach to commons and commoning presented in this essay is shaped by two strands of scholarship: community economies and feminist political ecology. While commoning is increasingly discussed by feminists who have examined the human-environment nexus over the last decades, these feminist scholars, including those of feminist political ecology, until recently, have tended to conceptualise commons as common pool resources (Ostrom 1990). Their analyses make visible gendered struggles over common pool resources, which are most often biophysical, such as land, forest or water (e.g., Agarwal 1994). In these analyses, ownership is seen as a critical point for women to struggle over in their efforts to sustain their livelihoods. On the other hand, within the community economies approach, a

commons is defined as a knowledge, a practice or a property that is collectively managed by a community (Gibson-Graham et al. 2013, 2016). This conceptualisation puts an emphasis on the co-constitution of commons and community. It resonates with Federici and Mies, who repeated, “no commons without a community,” that is also to say, no community without a commons. Where a community is produced, a commons that is collectively managed by the community co-exists. A commons is seen as the heart of a community. A community is not pre-given. It is understood as being produced and reproduced through collectively and repetitively nurturing a commons.

To capture the ongoing practices through which a community is produced, such as those articulated by Linebaugh (2008), commons is understood as an activity – commoning. Commoning (Table 1) is the collection of activities that produce and reproduce a community through perpetual practices of collectively negotiating access, use, benefit, care and responsibility (Gibson-Graham et al. 2016, 196) of a commons. When the access, use and benefit of a knowledge, a practice or a property is narrow or unrestricted, commoning is a process of making it more widely accessed and managed, and while its benefits, its care and responsibilities for it are assumed by a few people or even nobody, commoning is making these practices more widely shared. Commoning also occurs when a commons is already collectively managed, a process of maintaining access, use, benefits, care and responsibility. Commoning may occur regardless of types of ownership.

Feminists who pay attention to gendered commoning remind us that commoning is always performed in historically developed power dynamics. Feminist political ecology keeps our attention on situated gendered power dynamics that push and pull commoning, involving the

Table 1 Ways of commoning

	Access	Use	Benefit	Care	Responsibility	Ownership
Commoning enclosed resources	Narrow	Restricted by owner	Private	Performed by owner or employee	Assumed by owner	Private individual Private collective State
Maintaining commons or creating new commons	Shared and wide	Managed by a community	Widely distributed to a community and beyond	Performed by community members	Assumed by a community	Private individual Private collective State Open access
Commoning unmanaged resources	Unrestricted	Open and unregulated	Finders keeper	None	None	Open access State

Gibson-Graham et al. (2016, 197)

human-environment nexus in multiple directions. Theoretically, commoning is compatible with the poststructuralist feminist understanding of gender as process – gendering or doing gender – (Butler 1988) which was introduced to feminist political ecology scholars (Nightingale 2006). Yet, feminist political ecology does not solely focus on gender. A feminist political ecology’s analytical entry point is, at bare minimum, an intersection of gender and a more-than-human lifeworld. Its fundamental ontological assumption is that gender and more-than-human lifeworlds co-constitute each other. Depending on a specific situated context, other social and ecological differences (e.g., age, social status within the households, landholding size, regional climate, to name a few) also join the mix to shape commoning. Just as seeing both gender and commons as process, feminist political ecology’s intersectionality is understood as process, as such, not static, ever-shifting and socio-ecological context-dependent (Kimanthi et al. 2022). That is why intersectionality should be understood as an analytical achievement. It is an analytic through which we may articulate how shifting relations or assemblages shape commoning spatially (across space) and/or temporarily (across time).

A combined community economies and

feminist political ecology approach differs from other feminist approaches that examine the human-environment nexus in its recognition of commons not as collective ownership of means of production (Gibson-Graham et al. 2016; Sato and Soto-Alarcón 2019). It rejects the widely spread assumption that collective ownership is as foundational to commons as private ownership is to capitalism. This rejection comes from community economies’ rejection of capitalist-centred or capitalocentric thinking (Gibson-Graham 1996, 2006). The community economies approach advocates reading economy for difference. It stems from anti-essentialist Marxist thought that sees class as processes of surplus production, appropriation and distribution and recognises diverse class processes (e.g., communal, independent, capitalist, slavery and feudal) intersecting with non-class processes (e.g., gendering, aging, depopulation and climate change) (Gibson-Graham 1996, 2006; Gibson-Graham, Resnick and Wolff 2000; Resnick and Wolff 1987). It recognises the economic landscape as not entirely capitalist or not dominated by capitalism. It, without romanticising, values and makes visible non-capitalism and, in effect, contributions made by those women, minoritized people and other species who perform more-

than-capitalist forms of economies (Miller 2020). It resists capitalocentric thinking by diversifying the category of economy, making visible diverse forms of labour, transactions, enterprises, finance and property (Gibson-Graham, 1996, 2006; Gibson-Graham and Dombroski 2020; Gibson-Graham et al. 2013). Capitalist forms of labour, transactions, enterprises, finance and property become one among many. Diverse economic practices, processes and institutions are seen as being propelled in a myriad of directions to form dynamic economies. This approach sees commoning as possible with privately owned property and with capitalist enterprises (Sato et al., 2025). As such, this approach is postcapitalist. Taking an anti-capitalocentric perspective, it does not see collective ownership as the foundation for a commons. The “post” of postcapitalism within community economies does not indicate “after” capitalism in a temporal sense. It indicates a fundamental refusal to place capitalism at the centre of analysis, as that diminishes the visibility of the diversity of other social and economic processes through which we, our livelihoods and the more-than-human networks of which we are a part are continuously reproduced.

A postcapitalist approach has implications for how we conceptualise commoning by freeing us from fixating on the collectivisation of ownership. Seeing more-than-capitalist economic processes allows us to recognise both desirable and undesirable directions of commoning. In these ever-transforming processes, commoning from a postcapitalist feminist political ecology perspective is an analytical tool to conceive of and enact transformations towards less exploitative, more class, socially and environmentally just outcomes, and these outcomes are independent from the condition of the commons (e.g., degrading or exploitative) around which they occur. In these

processes, a practice, a knowledge or a property that facilitates exploitation or unjust practices can be removed (uncommoned) while a practice, a knowledge or a property that facilitates less exploitation and is considered more just in a situated context can be integrated (commoned).

Thinking about the potential of commoning as an analytic in the context of socio-ecological crises, I combine this understanding of commoning with negative commons and care. Negative commons, as already mentioned, is an unwelcome practice, a knowledge or a property that a population is forced to share. Mies and Benholdt-Thomsen (2001) well illustrate a negative commons with their study of the rural German example of organic waste management, which was transformed from communally managed practice, knowledge and property to an unwanted property when responsibility for waste management was transferred to wage labour organised by the local state. In this example it becomes clear that there is no community without a commons. The multispecies community produced through the collective management of organic waste ceased once the collective practice was stopped. In this case, a negative commons was produced by commodification which, ultimately, put an end to commoning. Something that was collectively managed, a commons, was removed and its community quickly disappeared. In this example, a negative commons means the disappearance of a commons and its co-constitutive community. By way of another example, at a different scale and intensity, Kohso (2012, 2020) identified radiation that was released from the 2011 Fukushima disaster as a negative commons, in reaction to which a diverse population, humans and more-than-humans, exposed to extreme vulnerabilities were forced to come together to manage an unwelcome practice, knowledge and property for their co-

survival. The radiation damaged existing socio-ecological ties and facilitated some uncommoning of those ties while it, at the same time, also forged opportunities for a previously desperate population to engage in commoning as collectively caring – maintaining, continuing and repairing – their lifeworlds. To be sure, not all commoning is caring from a postcapitalist feminist political ecology perspective. For example, commoning can be done to extract natural resources by a collective of actors. From a postcapitalist feminist political ecology perspective, commoning that produces negative effects on the collective survival of the lifeworlds and/or marginalised livelihoods and well-beings would not be considered caring.

Another way that postcapitalist community economies and feminist political ecology are complementary is that the former widens domains of commons, due perhaps to not coming squarely in the scholarly field that focuses on the human-environment nexus. Feminist political ecology, like other feminist strands that examine the human-environment nexus, has historically focused on examining biophysical commons (or common pool resources). The postcapitalist community economies approach (Gibson-Graham et al. 2016) identifies more-than-biophysical commons, such as cultural commons (e.g., language, food culture), knowledge commons (e.g., knowledge about local biodiversity) and social commons (e.g., a cooperative, a feminist association). Diversifying the domains of commons allows us to see the complexity of the socio-ecological ties that constitute commons across domains beyond the biophysical. Commons that are produced by the effects of neoliberal structural adjustment policies, aging and depopulation are best seen as negative commons. This insight leads us to recognise negative commons in the context of socio-ecological crises. This realisation is productive,

particularly for those who study the human-environmental nexus in the hopes of identifying a wider range of strategies to support the formation of community that is commoning.

Postcapitalist feminist political ecology sees commons as necessarily implying commoning and commoning as the production of community. Commons, conceptualised as common pool resources, does not challenge either the ‘us’ (we humans as actors) vs ‘them’ (commons as objects to be acted on, resources) binary or the hierarchy that places some humans over other humans and all humans over nonhuman species that is typical in thinking about commons. Building on this insight, a postcapitalist feminist political ecology perspective has us see commoning negative commons as multispecies collective care efforts to maintain, continue and repair a damaged lifeworld. It, at minimum, has us recognise a more-than-human lifeworld not as objects but as ecological agents (Miller 2020) who would be potential commoners in co-survival.

III. EXPLORING WHAT COMMONING CAN OFFER

I have identified six sets of analytical challenges that I often encounter in feminist work that examines intersections among patriarchy, capitalism and/or environmental degradation. The first set of analytical problematics stems from human-centred perspectives and is made visible by feminist political ecology: the assumption that 1) gender and intersectionality are independent from the environment. The second set of problematics are found in 2) capitalist-centred or class blind perspectives which are made visible when seen through the perspective of community economies: the assumptions that the economy

is singular, that only capitalism is recognised or assumed when class is recognised. Examining these same capitalist-centred perspectives through the combined perspectives of postcapitalist feminist political ecology it becomes possible to see that they take 3) community as pre-existing; that they recognise 4) all care as human care and as social reproduction and agency as human agency; that 5) commoning occurs only in limited domains; and that 6) all transformation is positive. Below I explore how the inclusion of a postcapitalist feminist political ecology perspective on commoning addresses these analytical challenges.

The case which supports exploration of these problematics is that of *Kunma Suisha-no-Sato* (the water-wheel village of *Kunma*) (hereafter *Suisha*), a long-standing women-led food-based local business that responds to a situated negative commons (Nakamura and Sato, 2023; Sato et al. 2025). The negative commons confronting this community was triggered by neoliberal structural reforms imposed by the government that facilitated the merger of municipalities and the loss of social safety nets, destabilising long-standing socio-ecological ties, which produced biodiversity loss, landscape changes (Morimoto 2011; Takeuchi 2010; Takeuchi et al. 2003) and care deficits (Sato et al. 2025). For nearly three decades over twenty women have aimed to meet collective socio-ecological needs: community revitalization and well-being, in particular, elderly care through their engagement with land, natural resources, diverse actors and materialities.

Gender and Intersectionality

When gender is used to analyse humans, political economy and environment, gender is still often analysed in hierarchical binary or fixed ways, such as homogenous men vs homogenous women, having fixed identity (e.g., women as caring).

This essentialization ignores diversity within the categories used and the changes that have happened over history. Insofar as the challenges we face are attributable to these essentialisations, they are unlikely to provide paths to their solution. This insight is well captured in the words of Audre Lorde, a US second-wave black, lesbian feminist, mother and poet, who famously stated, “For the master’s tools will never dismantle the master’s house” (1984, 110). These ‘master’s tools’ are found in the naturalisation of the centrality of the master, of the use of essentialisms, of the prevalence of binaries, of stereotyping and of romanticising. In this case these manifest as gender essentialism, heteronormativity, white supremacy, capitalocentrism, Orientalism, Eurocentrism and anthropocentrism (human-centred thinking). If we conceive of women as oppressed (leaving men out), and once they become entrepreneurs conceive of them as essentially empowered and instrumental for rural revitalisation, a scenario we often see in the state and large agency narratives, we will be unable to see complex dynamics, such as time poverty, physical and emotional toils and the uneven partiality of their ability to meet their needs that are involved in women’s struggles in commoning particularly negative commons. Analysing commoning requires us to pay attention to how commoning, as a set of processes, changes, for example, across time and/or between contexts, in relation to situated dynamics. This same centring of process extends to the understanding of socially given roles such as gender for which Judith Butler’s argument that it should not be seen as a frozen role but as an evolving set of processes (Nightingale 2006) that are constantly performed and part of commoning.

Recognition of commoning as process makes it logical to extend the same lens to gendering. However, lessons learned from second wave

feminists' inability to recognise and appreciate differences between women, which contributed to the dissolution of the movement, have led feminists to consolidate around a relational understanding of gender, seeing gender as intertwined with other differences. The notion of intersectionality, coined by the US black feminist legal scholar Kimberlie Crenshaw (1989), has emerged as one of the foundational analytics used to challenge both essentialism and binary notions of gender within feminist studies. Crenshaw examined how a black woman was discriminated against both for her gender and race, shedding light on intersecting axes of oppressions which challenged the then normal understanding of women as essentially similar. While this more structuralist understanding of intersectionality is productive in some contexts, such as the legal profession that Crenshaw examined, commoning as an analytic requires intersectionality to be understood not as combinations of identities but of intersections of dynamic processes which then support recognition of the evolving heterogeneities that are gender and other differences.

Feminist political ecology has never analysed gender in isolation. By definition, in analysis its gender always intersects with, at bare minimum, environmental elements and the specifics of a socio-ecological setting. That is, its intersectionality is always more-than-human. Feminist political ecology has always involved differences other than the social. Intersectionality in this approach is understood as an assemblage (Purr 2012; Kimanthi et al. 2022) that articulates shifting intersections of gender and other differences, including social and more-than-human elements, across scales, spaces and places, that takes into account the emotions that emerge in the process. For example, feminist political ecology would attend to *Suisha* women's embodied collective

femininity as intersected with their everyday *soba* (buckwheat) commoning practices, rurality, their social status within the households, their aging corporeality, male community authority, private landowners and urban tourists, as well as more-than-human ecological agents, such as *soba*, terraced agricultural fields, fireflies, climatic events and COVID-19. Women, through this lens, are seen to be pushed by state policy, to have strategically negotiated access to and use of the privately owned unused rice fields for their cultivation of *soba* and to have leveraged the authority of the male community members they knew. Even after they stopped their cultivation of *soba*, these women continued their responsibility for caring for *soba* in their commons in other more manageable ways: by offering new activities, such as *soba* farming and cooking workshops for tourists offered by semi-retired members and by continuously sharing its benefits with old and new commoning community members. Former non-business farm women performed a new collective femininity by negotiating access, use, benefits, care and responsibility for their *soba* commons through shifting configurations of human and more-than-human agents. Their femininities changed from those of farm wives and mothers to businesswomen and active change agents, who expressed joy when contributing to community revitalisation, albeit imperfectly, and who lamented when they could not. This lens makes it possible to see how emotions figure in women's agency and by extension their commoning. Seeing more-than-human intersectionality as process, taking into account emotion, has us see intersectionality as a shifting assemblage, not as a given, but as an analytical achievement.

Economy

Where a combined perspective of commoning

and feminist political ecology offers new insights into gender and intersectionality, the combination of commoning and community economies enables us to see economy beyond that framed through capitalocentric thinking (Gibson-Graham 1996) and class blindness (Wolff 2003). When commons and commoning are concerned, feminist scholars such as ecofeminists Vandana Shiva and Maria Mies and autonomist Marxist feminists Silvia Federici and Mariarosella Della Costa had tendencies to discuss commons and commoning in binary opposition to commodification and private property ownership. For them, when something, for example, seeds (common property) or organic waste management practice (Mies and Benholdt-Thomsen 2001), is commodified, that commodified thing is considered uncommoned (or decommonised). What underlies this conceptualisation is recognition of commodified and privately owned practice, knowledge or property as necessarily not part of a commons. This commodification, as Mies pointed out, is “the main pillar of capitalism” (2014, i112). Private or state capitalism facilitates uncommoning.

Capitalists and states, the latter particularly for autonomists, are rarely considered as candidates for membership as commoners. One foundational approach embedded in the community economies approach is reading economy for difference. To open up ontological space for less exploitative, more just economies to emerge and flourish, Gibson-Graham (1996, 2006) proposes that we move away from centring capitalism in our social analyses. One strategy is to see economy in its diversity, diverse forms of labour, transactions, properties, enterprises and finances as already existing (Gibson-Graham et al. 2013).

Looking at the case of *Suisha* from a postcapitalist community economies perspective, we see diverse types of labour, transaction, property, enterprise and finance constituting their commoning (Table 2). *Suisha* is a capitalist but socially and environmentally responsible enterprise, where surplus is appropriated by the board that consists of some *Suisha* women worker representatives and non-*Suisha* members, such as community revitalisation committee members. *Suisha* is recognised as an alternative capitalist

Table 2 Diverse Economy Diagram

LABOUR	TRANSACTION	PROPERTY	ENTERPRISE	FINANCE
Wage	Market	Private	Capitalist	Mainstream market
ALTERNATIVE PAID	ALTERNATIVE MARKET	ALTERNATIVE PRIVATE	ALTERNATIVE CAPITALIST	ALTERNATIVE MARKET
Self-employed	Fair trade	State-managed assets	State-owned	Cooperative bank
Reciprocal labour	Alternative currencies	Customary (clan) lands	Environmentally responsible	Credit Union
In kind	Underground market	Community land trust	Socially responsible	Community-based financial institution
Work for welfare	Barter	Indigenous knowledge (intellectual property)	Non-profit	Microfinance
UNPAID	NON-MARKET	OPEN ACCESS	NON-CAPITALIST	NON-MARKET
Housework	Household sharing	Atmosphere	Worker cooperative	Sweat equity
Volunteer	Gift giving	International waters	Sole proprietorship	Family lending
Self provisioning	Hunting, fishing, gathering	Open-source IP	Community enterprise	Donation
Slave labour	Theft, piracy, poaching	Outer space	Feudal	Interest-free loan
			Slave	

Adapted from Gibson-Graham et al. (2013, 15)

enterprise because of how it distributes part of the surplus for non-profit activities, such as elderly care and landscape restoration. *Suisha* women are paid a wage. Those members, who are not on the board, give consent to the board to distribute the surplus for social – revitalisation – purposes. They sell commodities, such as food commodities as well as packaged guided tours in the formal market while they donate elderly care and local restoration as gifts to the community. *Suisha* owns facilities and equipment, but not the land, which was loaned by the community authority and the agricultural fields to which they gained interest-free access from private landowners in accordance with state policy regarding unused land. Adding one final complexity to further trouble easy classification, *Suisha's* finances are partly supported by donations from the community authority and the state.

When we pay attention to specificities of diverse economic practices without presuming that an enterprise recognisable as capitalist is necessarily exploitative, that private property may not be part of commons and that capitalists or state institutions may not be part of the commoners, we are able to see a greater diversity of practices as constitutive of commoning. A capitalist enterprise and local governments can be part of commoning. Male communal authorities can play a crucial role for women to start their business. This case study cautions us not to romanticise commoning: it stops us from seeing commoning only done outside of or in opposition to states and capitalist enterprises. This perspective makes visible and keeps possibilities open for us to imagine how women negotiate access, use, benefit, care and responsibilities with male communal authorities, capitalist enterprises and the state as potential commoners to make commoning negative commons, a collective project, which would simultaneously transform gender, economy and

environment.

Community

Even after a few decades of concerted criticisms of essentialist understandings of community, such as homogeneity, romanticism and the presumption of its existence in different disciplines, community is still a contested concept. Recognising “no community without commons” and “no commons without community”, community understood from a combined postcapitalist community economies and feminist political ecology perspective cautions us not to presume its existence prior to analysis. Instead, it has us identify a specific commons, a practice, a knowledge or a property collectively managed, and attend to how a community is produced through its collective management. The sort of community *Suisha* takes part in is not about a group of people having some characteristic or interest in common or living in the same geographical area. Even if it does not set itself up to directly challenge capitalism or patriarchy, it continuously engages in diverse commoning practices, ranging from negotiating access and use of resources, being gifted some training, distributing surplus to not-for-profit elderly care, to involving tourists in landscape and biodiversity restoration. These everyday incessant commoning practices produce community. Without these commoning practices, their community ceases to exist. This understanding has us see the co-constitution of commons and community. It makes it difficult, if not impossible, to see a community pre-existing without commons and commoning.

Commoning as an analytical tool has us focus on relationships instead of humans and nonhumans in isolation. It helps us become conscious of the interdependent nature of those relationships. From a postcapitalist feminist political ecology perspective, this community

involves more-than-human lifeworlds. More-than-human intersectionality in combination with commoning as an analytic illuminates interdependent socio-ecological ties between humans and more-than-human lifeworlds. *Suisha*, in its situated in rural context, relies on surrounding more-than-human lifeworlds, such as land, plants, animals, landscape and regional atmosphere for its commodity productions. Both humans and more-than-human lifeworlds comprise the commoning communities of *Suisha*. *Soba*, the raw material for its signature commodity, was collectively managed with microbes in the soil, regional atmosphere, private landlords, communal authority, household members, and consumers, supported by the different governmental and NGO gifts, among others. While human actors, in particular *Suisha* members, consciously engage in commoning, more-than-human lifeworlds might be better understood as taking part in what anthropologist Anna Tsing in *The Mushroom at the End of the World* (2015) identified as latent commons, that is 'entanglements that might be mobilised in common cause' (p. 135). More-than-humans species activities tend to be unevenly (in)visible in the eyes of human actors, yet they are an essential part of the *Suisha* commoning communities to continue, maintain and repair their commons. Their oft-invisible species activities are difficult to institutionalise and domesticate, yet they nest within and bind the more visible commoning practices that humans engage in. This insight encourages us to imagine invisibilised socio-ecological ties that constitute a multispecies commoning community. Commoning negative commons, such as the one facing *Suisha*, requires multispecies efforts. Humans alone are not enough. Once feminists can imagine and recognise more-than-human contributions, it helps us see more-than-human lifeworlds as commoners instead of

invisible objects to exploit in a latent commons.

Care and Agency

As mentioned earlier, within Western feminist scholarship commoning was coupled with care even before commoning gained currency in the last decade. Autonomist Marxist feminists, such as Silvia Federici (2012), among others, called for commoning social reproduction, which includes housework and care work, during the 1970s Wages for Housework campaign. What commoning, conceptualised through a combination of postcapitalist community economies and feminist political ecology, offers is that it illuminates how commoning care is actually done by making elder care more widely accessed and used, while making its benefits, its care and responsibility for it more widely shared with diverse human actors. It is particularly politically productive to make visible the agency of rural older women, who are often marginalised or, in some cases, highly celebrated as change agents in both popular and academic discourses (Iwashima 2020). In the contexts of the negative commons created by neoliberal restructuring, older women, together with diverse actors, in these cases collectively respond to negative commons by setting up a not-for-profit alternative capitalist social enterprise through which they appropriate surplus for collective needs that go beyond their own. This approach makes visible how older women exercise agency through the articulation of and then working towards meeting collective needs in collaboration with diverse actors. It enables us to see rural femininity not as static but as dynamic, transforming from farm wives and mothers to businesswomen to active change agents with bodies that deteriorate over time while partially reproducing their femininity as carers, and as altruistic.

Care is still often seen as a human activity,

particularly in those studies that do not examine the human-environmental nexus. In those studies, those who give care and those who receive care are both humans. Effects of the negative commons created by neoliberal restructuring produce care deficits concerning not only human care but also socio-ecological care in aging and depopulating rural contexts. Stewards, who used to care for forests, landscapes, agricultural fields and, by extension, habitats for animals, insects and other species, largely men in the case study area, out-migrated or left farming in search of alternative livelihoods or were no longer physically able to work due to aging. *Suisha* women learned to perform care for their negative commons by collectively negotiating for the use of abandoned privately owned rice fields, deciding to replant *soba*, and consciously restoring firefly habitats, *Satoyama* landscape and biodiversity to extend the benefits to non-locals via eco-tourism beyond their immediate community. What women care – maintain, repair and continue – for is the lifeworlds that sustain their livelihoods and well-being. In these commoning practices, human commoners are not only caregivers but also care receivers, and so are more-than-human species. Their livelihoods and their well-being are dependent on those of more-than-humans. Combining commoning and more-than-human care forces us to look at how and with whom human and more-than-human species care for their lifeworlds within their respective species' capacities and temporalities in shifting assemblages in specific socio-ecological settings. These insights have us see varying expressions of women's, other humans' and more-than-humans' agencies that are often rendered invisible. Feminist scholars have persistently argued for shedding light on the forms of context-specific agency enacted by minoritized women (Mohanty 2003). This understanding

enables us to extend this call so that we may see the agency of those species that are often invisible in the production of community (Miller 2020).

Diverse domains

When we think of a community, what it signifies for some might not be its biophysical elements. But, when commons are analysed, particularly in the studies that examine the human-environment nexus, including feminist political ecology, biophysical elements are most often identified as commons. A postcapitalist community economies approach sees beyond a biophysical domain to at least three other domains that may support commoning: knowledge, culture and social domains (Gibson-Graham et al. 2016). For *Suisha*, the production of community is done via commoning *soba* by women gaining access to the private no-longer-used rice fields with state support and local men's support, making rules about how to use the fields, making benefits more widely shared, for example, with urban tourists, taking care of the process by actively seeking support from public officers, male family members and community authorities while some members assume more responsibilities than others. This biophysical commoning is supported by commoning knowledge about farming (*soba* and other new crops, such as blueberries), food culture (e.g., recipes for *soba* noodles and cooking workshops with urban consumers) and social reproduction, such as elderly care that involves providing lunch service and monthly social gatherings.

Thinking of commoning in multiple domains and the co-constitution of commons and community helps us reconfigure feminist analytical tools to see commons and a community in multidimensional ways, and it encourages us to look for commons in diverse domains and to find

negative commons in contexts of socio-ecological crises. This realisation is productive, particularly for those who study the human-environmental nexus, as it helps us to see complex ways in which a community is produced (e.g., what is managed, how, with whom and where) and how it is gendered, and this ability to see community provides a foundation from which it is possible to see a wider range of concrete, of locally relevant, strategies that may strengthen community.

Turning now to implications, the sensitivity to diversity that is woven into this strategy encourages sensitivity to the possibility of yet more dimensions. For example, even though the corporeal dimensions, such as tastes and emotions, are not theoretically taken into account in the analysis of four domains, feminist scholars, including those of feminist food studies (Hayes-Conroy and Hayes-Conroy 2008) and feminist political ecology (Nightingale 2011) have examined the effects of tastes and emotions on the food production and consumption and the collective management of commons respectively. Their studies show the importance of investigating corporeal dimensions that disrupt our attempts to enrol rational minds in the management of, for example, food consumption or biophysical commons. They indicate this productivity in exploring the corporeal and investigating other domains so that we may make visible complex ties that shape commoning but which are not detected in current studies.

Directions for transformations

As a poststructuralist Marxist and feminist who is trained to see processes in contradiction, I am uneasy when commons are conceptualised as something positive and commoning as necessarily moving in positive directions. A postcapitalist community economies perspective

that advocates reading economy for difference makes it possible to see commons within capitalist or other exploitative and hierarchical structures. For example, within a capitalist class structure, the board of directors, when it exists, collectively manages the appropriation and distribution of the surplus (a commons). This commoning is exploitative from a Marxist perspective (Resnick and Wolff 1988). Yet, this sort of analysis is often too quick to make judgments about such capitalist commoning. Commoning is a practice of creating access, use, benefit, care and responsibility that are more widely shared. One way to see commoning engaged by an enterprise, capitalist or otherwise, is to track how the surplus is distributed. For example, when the extractivist mining capitalist enterprise, pushed by local civil society pressure, distributed its surplus to the residents where its operation was located, Gibson-Graham and Ruccio (2001) identified this choice to distribute surplus locally as class transformation. Seeing this from a commoning perspective, this new practice of distribution of surplus is now integral to the new socio-ecological ties created by that decision between the capitalist enterprise, the residents and the local environment.

Suisha is a capitalist enterprise where non-direct producers of surplus participate in the appropriation of surplus. It is, therefore, exploitative when seen from a Marxist perspective. However, it is commoning as well as class transformation when the board of directors of *Suisha* responds to the needs of local residents and distributes a portion of the surplus to a communal cause, such as elderly care or landscape restoration. Although the surplus is appropriated by a combination of direct and non-direct labourers, the surplus is partly distributed in a manner that responds to the needs of those whose labour created the surplus. Class, understood as processes

of production, appropriation and distribution of surplus, changed when *Suisha* changed its distribution, thus, a class transformation occurred. *Suisha* attempted to maintain this practice of distributing their surplus for jointly recognised good even when their profit dropped during COVID times and with declining physical capacity due to members' aging. While it is easy to dismiss the enterprise's practice as greenwashing or cause branding (Murray 2013), the perspective requires us to pay critical attention to how distributed surplus is used, and we must pay attention to the other practices of this capitalist enterprise. Yet, a postcapitalist perspective has us see the changing distribution of surplus for a common cause as class transformation that can facilitate commoning for a common cause. The simply defined class structure of an enterprise or initiative is not adequate to determine what counts as commons and commoning. When we take an anti-capitalocentric perspective, which commoning as an analytic helps us see, capitalist enterprises can engage in commoning, and they can also be commoners.

Commoning enables us to see (dis) continuous, non-linear and oft-contradictory transformations over the course of collectively managing (negative) commons: how a certain practice, knowledge or property is uncommoned, re-commoned or newly commoned with diverse actors over historical time and in different socio-ecological settings. *Suisha* women commoned abandoned rice fields together with private landowners, state officers, male family members, and more-than-human species via *soba* farming. However, the physical and emotional damage caused by typhoons forced them to stop self-cultivating *soba* and let go of some parts of *soba* commoning (e.g., the relationship with private landowners). While struggling to cope with their aging bodies they re-commoned and engaged

in new commoning via the development of *soba* farming and cooking workshops with semi-retired *Suisha* members and new people, including urban consumers. Commoning from a postcapitalist feminist political ecology perspective helps us make visible shifting diverse assemblages of humans and more-than-human actors, elements and practices in the course of surviving well together in place.

Commoning as an analytic, which enables us to see transformations of a community, is productive only when accompanied with feminist and other allied politics. Without feminist politics, we will not be able to identify which direction commoning should go or assess a commoning practice as desired or undesired in the contexts of socio-ecological crises. It requires that we cultivate feminist, Marxist, and environmentalist political interests that provide the normative grounds required to recognise the need for and then to emancipate ourselves from gender, class, environmental and other injustices. *Suisha* women earned support by working strategically with male community members, which brought them access to and use of private and communal property and financial resources. However, commons are not shared by all. Some species, such as birds, deer and boar that damage their agricultural inputs, for example, are unwelcome in a specific space (e.g., agricultural field) and temporality (e.g., before harvest). It is the normative ends we endorse that inform decisions about whether what we observe is a desired or undesired in our commoning. The application of commoning within postcapitalist feminist political ecology is never politically neutral. It, without romanticizing commoning, allows us to see more desirable directions by making ties with certain things, actors and places and disassociating ourselves from certain things, actors and places depending on the situated

politics. In these ever-transforming processes, commoning framed within the politics that is informed by postcapitalist feminist political ecology together with diverse situated stakeholders becomes a productive analytical tool to help us strategise transformations towards less exploitative, more class, socially and environmentally just directions fitted to their situated contexts.

IV. CONCLUSION

Today, we observe the spread of fascism and of climate change. Together they are likely to accelerate socio-ecological crises that disproportionately harm the already vulnerable. Corresponding to this, negative commons that disrupt existing necessary socio-ecological ties, are expected to increase. Feminist scholars in Japan must develop politics and analytical strategies relevant to these times of intersecting social and ecological crises for our survival together with the diversity of lifeworlds on which we are interdependent. Instead of relying on ecomodernist approaches that rely on technology which, at the core, ignore and perpetuate the social, economic and environmental injustices that contributed to our current dire straits, I have found it more productive to use commoning to learn about the context-specific strategies humans and more-than-human lifeworlds create in working together to deal with negative commons in our situated contexts. In this essay I explored how commoning from a postcapitalist feminist political ecology perspective as an analytical tool helps feminist researchers reconfigure familiar feminist analytical tools, such as gender, intersectionality, economy, community, care and agency as well as commoning specific tools, different domains and its direction for transformation, drawing mainly on

the case study in Japan that responded to negative commons.

Commoning from postcapitalist feminist political ecology perspectives illuminates how a community is maintaining, continuing and attempting to repair even negative commons together with diverse actors including those of lifeworlds in place. Together with intersectionality, this analytic helps us to study complex and contradictory more-than-capitalist and more-than-human constantly shifting processes through which communities attempt survival. As a feminist analytical tool, it has us pay attention to gender, class and other social dynamics as they are transformed. The poststructuralist epistemology and ontology found in the approach goes along with commoning as process to encourage us continuously to work against binary thinking. It helps us relax our fixations on patriarchy, capitalism and humans in which binaries, such as men over women, capitalism over noncapitalism, and humans over nonhumans thrive. This release enables us to pay attention to diverse femininities and masculinities, diverse economies and our nesting relationships with more-than-human lifeworlds. It opens up our imaginaries to rethink how diverse actors, including men, capitalist enterprises and more-than-human earth others, as (potential) commoners in the efforts to collectively survive well together. This helps us think about how to potentially move away from exploitative socio-ecological relationships. We can strategically think of which relationships to let go of or avoid and with whom to continue or forge a community. With these tools, we are better able to imagine nonhuman species as allies or kins (Haraway 2016).

Commoning as an analytic may help us reconfigure familiar feminist tools. They facilitate explorations of new paths towards transitions from

exploitative, patriarchal and human-centred to less exploitative and more equal socio-ecologically just relations in times of socio-ecological crises. However, commoning is not a magic analytic. Our feminist theoretical explorations require us to be reflexive and commoning requires norms. In the process of producing a community together, the voices and needs of minoritized people and species should not get left out since commoning (community making) can be done in ways that reinforce hierarchy and exclusion. Commoning may force some humans and species to do others harm. Feminist politics should support those forms of commoning that produce a more equal, less exploitative, less hierarchical and more convivial relationship among commoners. Our analyses should point out negative effects and contradictions in commoning in order not to romanticise postcapitalist multispecies commoning and agency.

Privileges blind us from seeing the negative commons experienced by the less privileged including more-than-human lifeworlds. In addition to the quickly spreading fascism and climate change, Kohso (2012, 2020) also reminds us of radiation as slow violence, pointing out how it affects much larger lifeworlds outside of the immediate one through, for example, air and ocean water diffusions and food consumption, in a similar way to the plastic as slow violence discussed by Liboiron (2021). Conservative politics, aging, depopulation, climate change, radiation, and plastic are part of our everyday life. Dealing with negative commons requires a community that collectively manages negative commons. Even though commoning is one among many valuable analytics, I suggest exploring its analytic and political productivity by using it to examine how we and those we study are embedded in and constituted through communities. I hope the

exercise has us taste the (potential) productivity of the analytics and will motivate us to actively engage in respective community building to make concrete transformations in our times of socio-ecological crises.

Acknowledgement

This essay is derived from the talk given at the IGS International Symposium on Feminism and Commoning: Feminist Intervention toward Post-Capitalism held at Ochanomizu University in July 2024. My special thanks go to Fumie Ohashi, who organised the symposium and also acted as a commentator. Without her invitation, this paper would not have been written. My gratitude also goes to staff members at the IGS office, two other commentators, Rin Odawara and Fumi Iwashima, and editorial assistance from Hisako Motoyama and Peter Tamas. I am also grateful for Wendy Harcourt's caring mentorship.

References

- Agarwal, Bina. 1994. *A Field of One's Own: Gender and Land Rights in South Asia*. Cambridge University Press.
- Butler, Judith. 1988. "Performative Acts and Gender Constitution: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory." *Theatre Journal*, 40(4): 519-531.
- Costa, Mariarosa Dalla. 1988. "Domestic Labour and the Feminist Movement in Italy since the 1970s." *International Sociology* 3(1): 23-34.
- Costa, Mariarosa Dalla. 2007. "Food as Common and Community." *Commoner* 12 (Summer): 129-137.
- Crenshaw, Kimberle. 1989. "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics." *The University of Chicago Legal Forum*, 1989: 139-167.
- Elmhirst, Rebecca. 2011. Introducing New Feminist Political Ecologies. *Geoforum* 42(2):129-132. <https://doi.org/10.1016/j.geoforum.2011.01.006>
- Federici, Sylvia. 2012. *Revolution at Point Zero: Housework, Reproduction and Feminist Struggle*. PM Press.

- Fisher, Bernice, and Joan C. Tronto. 1990. "Toward a Feminist Theory of Caring." in Emily Abel and Margaret K. Nelson, eds. *Circles of Care*. SUNY Press: 36-54
- Gibson-Graham, J. K. 1996. *The End of Capitalism (As We Knew It): A Feminist Critique of Political Economy*. Oxford.
- . 2006. *Postcapitalist Politics*. University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham, J. K., Jenny Cameron, and Stephen Healy. 2013. *Take Back the Economy: An Ethical Guide for Transforming Our Communities*. University of Minnesota Press.
- . 2016. "Commoning as a Postcapitalist Politics." in Ash Amin, and Philip Howell, eds. *Releasing the Commons: Rethinking the Future of the Commons*. Routledge: 192–212.
- Gibson-Graham, J. K., Stephen A. Resnick, and Richard D. Wolff, eds. 2000. *Class and its Others*. University of Minnesota Press.
- . 2001. *Re/presenting Class: Essays in Postmodern Marxism*. Durham, NC: Duke University Press. <https://doi.org/10.1515/9780822383093>
- Gibson-Graham, J. K., and Phillip O'Neil. 2001. "Exploring a New Class Politics of the Enterprise." In J. K. Gibson-Graham, Stephen A. Resnick, and Richard D. Wolff, eds. *Re/Presenting Class*. Duke University Press: 56–80. <https://doi.org/10.1515/9780822383093-004>
- Gibson-Graham, J. K., and David Ruccio. 2001. 'After' Development: Re-imagining Economy and Class. In J. K. Gibson-Graham, Stephen A. Resnick, and Richard D. Wolff, eds. *Re/Presenting Class*. Duke University Press: 158–81. <https://doi.org/10.1515/9780822383093-008>
- Gibson-Graham, J. K., and Kelly Dombroski, eds. 2020. *The Handbook of Diverse Economies*. Edward Elgar Publishing. <https://doi.org/10.4337/9781788119962>
- Harcourt, Wendy, Ana Agostino, Rebecca Elmhirst, Marlene Gómez, and Panagiota Kotsila, eds. 2023. *Contours of Feminist Political Ecology*. Springer International Publishing. <https://doi.org/10.1007/978-3-031-20928-4>
- Hayes-Conroy, Allison, and Jessica Hayes-Conroy. 2008. "Taking Back Taste: Feminism, Food and Visceral Politics." *Gender, Place and Culture* 15(5): 461-473. <https://doi.org/10.1080/09663690802300803>
- Iwashima, Fumi. 2020. Tsukurareru <Nôson Josei> : Sengo Nihon no Nôson Josei Seisaku to Enpawâmento no Monogatari. Yûshisha.
- Kimanthi, Hellen, Paul Hebinck, and Chizu Sato. 2022. "Exploring Gender and Intersectionality from an Assemblage Perspective in Food Crop Cultivation: A Case of the Millennium Villages Project Implementation Site in Western Kenya." *World Development* 159(2022), 106052. <https://doi.org/10.1016/j.worlddev.2022.106052>
- Kohso, Sabu. 2012. Radiation and Revolution. *Borderlands* 11(2): 1-17. <https://www.jstor.org/stable/48782459>
- Kohso, Sabu. 2020. *Radiation and Revolution*. Duke University Press. <https://doi.org/10.1215/9781478012535>
- Linebaugh, Peter. 2009. *The Magna Carta Manifesto: Liberties and Commons for All*. University of California Press. <https://doi.org/10.1525/9780520932708>
- Kuroda, Yoshimi. 2016. *Rice Production Structure and Policy Effects in Japan*. Palgrave Macmillan. <https://doi.org/10.1007/978-1-137-57315-5>
- Liboiron, Max. 2021. *Pollution is Colonialism*. Duke University Press. <https://doi.org/10.1215/9781478021445>
- Lorde, Audre. 1984. *Sister Outsider: Essays and Speeches*. Crossing Press.
- Murray, Dara Persis. 2013. "Branding 'real' social change in Dove's Campaign for Real Beauty." *Feminist Media Studies* 13(1): 83-101. <https://doi.org/10.1080/14680777.2011.647963>
- Mies, Maria. 2014. No Commons Without Community. *Community Development Journal* 49(suppl_1): i106-i117. <https://doi.org/10.1093/cdj/bsu007>
- Mies, Maria, and Veronika Benholdt-Thomsen. 2001. "Defending, Reclaiming and Reinventing the Commons." *Canadian Journal of Development Studies/Revue canadienne d'études du développement*, 22(4): 997-1023. <https://doi.org/10.1080/02255189.2001.9669952>
- Miller, Ethan. 2020. "More-than-human Agency: From the Human Economy to Ecological Livelihoods." in J. K. Gibson-Graham and Kelly Dombroski, eds. *The Handbook of Diverse Economies*. Edward Elgar: 402-410. <https://doi.org/10.4337/9781788119962.00057>

- Ministry of Agriculture Forestry and Fisheries. 2020. *FY2019 Summary of the Annual Report on Food, Agriculture and Rural Areas in Japan*. Retrieved from https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/r1/attach/pdf/zenbun-3.pdf (last accessed 30 May 2024)
- Mohanty, Chandra Talpade. 2003. *Feminism without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*. Duke University Press. <https://doi.org/10.1215/9780822384649>
- Morimoto, Yukihiro. 2011. "What is Satoyama? Points for discussion on its Future Direction." *Landscape and Ecological Engineering*, 7(2): 163–171. <https://doi.org/10.1007/s11355-010-0120-5>
- Nakamura, Nanako and Chizu Sato. 2023. More-than-Human Commoning through Women's *Kokorozashi* Business for Collective Well-being: A Case from Aging and Depopulating Rural Japan. *International Journal of the Commons*, 17(1), pp. 125–140. <https://doi.org/10.5334/ijc.1215>
- Nightingale, Andrea. 2006. The Nature of Gender: Work, Gender and Environment. *Environment and Planning D: Society and Space* 24(2):165–185. <https://doi.org/10.1068/d01k>
- . 2011. Beyond Design Principles: Subjectivity, Emotion, and the (Ir)Rational Commons. *Society & Natural Resources* 24(2):119–132. <https://doi.org/10.1080/08941920903278160>
- Ostrom, Elinor. 1990. An Institutional Approach to the Study of Self-organization and Self-governance in CPR Situations. In Elinor Ostrom, ed. *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*. Cambridge University Press: 29–57. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511807763.004>
- Puar, Jasbir K. 2012. "I Would Rather be a Cyborg Than a Goddess": Becoming-Intersectional in Assemblage Theory." *PhiloSOPHIA*, 2(1): 49–66. <https://doi.org/10.1353/phi.2012.a486621>
- Resnick, Stephen A. and Richard D. Wolff. 1989. *Knowledge and Class: A Marxian Critique of Political Economy*. University of Chicago Press.
- Sato, Chizu and Jozelin Maria Soto Alarcón. 2019. Toward a Postcapitalist Feminist Political Ecology' Approach to the Commons and Commoning. *International Journal of the Commons*, 13(1), 36–61. <https://doi.org/10.18352/ijc.933>
- Sato, Chizu, Nanako Nakamura, and Jozelin Maria Soto Alarcón. 2025. Rural Women's Business-led Commoning in Mexico and Japan: A Transnational Feminist Analysis. In Nick Gallent, Menelaos Gkartzios, Mark Scott and Andrew Purves, eds. *Postcapitalist Countrysides*. UCL press: 191–211. <https://doi.org/10.14324/111.9781800087675>
- Takeuchi, Kazuhiko. 2010. Rebuilding the Relationship between People and Nature: The Satoyama Initiative. *Ecological Research*, 25(5): 891–897. <https://doi.org/10.1007/s11284-010-0745-8>
- Takeuchi, Kazuhiko, Robert D. Brown, Izumi Washitani, Atsushi Tsunekawa, and Makoto Yokohari, eds. 2003. *Satoyama: The Traditional Rural Landscape of Japan*. Springer Tokyo. <https://doi.org/10.1007/978-4-431-67861-8>
- Tsing, Anna Lowenhaupt. 2015. *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*. Princeton University Press. <https://doi.org/10.1515/9781400873548>
- Wolff, Richard. 2003. "World Bank/Class Blindness." In Amitava Kumar, ed. *World Bank Literature*. University of Minnesota Press: 172–83.

掲載決定日：2025年5月13日

日本の農山村における洗濯機のコモニング

岩島 史*

本稿は、1950年代から60年代にかけて日本の農山村でしばしば見られた、電気洗濯機の共同利用を、フェミニスト・ポリティカル・エコロジーのコモニングの視角から分析する。長野県の旧戸倉町千本柳の北生活改善実行グループでは、1957年9月から28世帯で2つの電気洗濯機を購入し、共同洗濯を行っている。洗濯労働を担う“嫁”たちが忙しすぎることから、電気洗濯機の導入を希望したが、(1) 資金、(2) 夫や“姑”らの反対や無理解、(3) 洗濯機を設置する土地の主に3つの障壁があった。これらを生活改善グループの“嫁”たちが生活時間調査を実施して説得すること、“主人”たちの協力と新農村建設計画による補助金などによって克服することで電気洗濯機の共同導入が可能になった。しかし、洗濯機のコモニングは一時的なものに終わった。本稿の事例は、コモニングがめざすべき新たな共同性は、決して過去の共同体の懐古主義ではないことを示している。

キーワード：コモニング、フェミニスト・ポリティカル・エコロジー、農村女性、洗濯機、戦後日本

I. はじめに

本稿では、1950年代から60年代の日本の農山村で見られた洗濯機の共同利用および洗濯の共同化をとりあげ、コモニングの視角から検討する。近年、激しく進行するネオリベラリズムと個人化へのオルタナティブとして、コモンズ／コモニングが再注目されている(Clement et al. 2019, Nightingale 2019ほか)。コモニングとは、これまでコモンズと称されてきた共有地や共有資源を、そこへのアクセスや利用、世話をし、責任を受け入れ、利益を分配するルールや規定の設立と作り直しに関わる動的なプロセスととらえようとするフェミニスト・ポリティカル・エコロジー(FPE)の視点である(Gibson-Graham et al. 2016: 195, Clement et al. 2019: 2)。コモニングは単なる資産ではないため、それを管理し、使用し、ケアし、利益を得る「コミュニティ」の存在と不可分である(Gibson-Graham et al. 2016: 196)。このコミュニティには、人間だけでなく、生物や土壌、空気、田畑といった「自然環境」も含まれ、人間と人間以

上(more-than-human)も含めた「コミュニティ」全体のウェルビーイングを考慮することがめざされる。ここでの「人間以上のもの」には、生物や自然環境だけでなく、本稿で扱うようなテクノロジーも含まれている(Nightingale 2019: 22-3)。

FPEが共通して重視する基本的な枠組みは、人間以上(more-than-human)の存在も考慮に含めたウェルビーイングとケア、「科学知識」の相対化である。人間以上のウェルビーイングとは、単に「人間」が「自然環境」を「守る」という一般的な環境保護の考え方とは異なる。人間が自然資源を搾取する論理と、「人以下のもの(less-than-human)」と不当に認識されている人間が搾取される構造は連なっているという考え方に基づいている(Mollett et al. 2020: 280)。FPEの視角からは、現在の気候変動や飢餓などの危機も、自然環境を搾取して当然の「資源」とみなし、搾取しても良い人種と位置づけられた人々による安価な「労働力」を、グローバル・サウスの国々から調達することを前提とする欧米や日本などグローバル・

* 京都大学大学院経済学研究科講師

ノースの国々の経済成長の結果とみなされる(岩島 2025c)。このような西欧の知識生産に根ざしている文化と自然の二項対立を批判し、植民地主義的な関係から脱するために人間中心主義からの脱却、そして経済成長ではなくウェルビーイングをめざすことがFPEでは謳われている(Mollett et al. 2020: 274)。

しかし、人以上のものを含むウェルビーイングを志向することが、そのまま、コモニングを担うコミュニティが非搾取的で、非家長的で公正なものであることを保証するものではないだろう。FPEの視角からのコモニング研究は、資源へのアクセスとコントロールの差異や不平等をひきおこす構造的な権力の形態を問うものでもある。そして、その権力が人々にどのように経験されるかは、ジェンダーとその他のインターセクショナルな社会関係によって異なっていることも重視されている(Clement et al. 2019: 3-4)。ここでの権力は、ミシェル・フーコー(Foucault 2000)やジュディス・バトラー(Butler 1990)が強調するように、垂直的に強制的・威圧的なものだけでなく、同時に人々の行為可能性を提供するものでもある(Nightingale 2019: 21)。人々は、位置づけられた権力関係の中で身体を抛り所に自らを社会的文脈に位置づけながら、行為主体として主観性(subjectivity)を行使する(Clement et al. 2019: 3-9)。本稿では、共同洗濯をめぐる生成するコミュニティにおいて、人々はどうのような権力関係の中に位置づけられていたのか、その中でいかに行為主体性(agency)を発揮し得たのかを明らかにすることをめざす。

電気洗濯機は、一般にコモنز／コモニング研究の対象とされてきた自然環境や生産のための資源ではないが、下記の点からコモニングの議論に位置づけることが可能であると考え。まず、電気洗濯機は農家世帯の再生産労働の中でも最も重労働だといわれる洗濯労働の一部を女性とともに担い、女性たちのウェルビーイングの向上をめざすものであること。次に、その電気洗濯機へのアクセス、利用、電気洗濯機が壊れず水の利用や排

水がコミュニティにダメージを与えないためのケアの責任を共有する人々のコミュニティが生成していることである。電気洗濯機のような再生産労働に関わるテクノロジーをコモニングの視点から論じた研究は、管見の限りまだ無いが、農業に関する技術の普及をFPEの視点から論じた先行研究はいくつかある。例えば、イングリッド・L.ネルソンらは、新たな農業技術が導入される際の、位置づけられた知識(situated knowledge)、ジェンダー化された労働、情緒的かつインターセクショナルで種間(inter species)の関係に焦点をあてる農業技術のフェミニスト・ポリティカル・エコロジー研究という視角を提出している(Nelson et al. 2024)。農地のリモートセンシング、農業アドバイスパリ、自動乳搾り機の事例から、農業テクノロジーが既存のジェンダー分業を再強化すること、自動乳搾り機の場合には、身体化された動物との関係性が変化し、農業者としての主観性の変化にもつながることを論じている。また、ステファニー・ブーシュラーらは、ソーラーテクノロジーの普及において、女性のコミュニティリーダーが主に女性に対する新たな知識の普及に重要な役割を果たす一方、高齢のシングル女性は収入が少ないことなどから、ソーラーテクノロジーへのアクセスから排除されがちであることを指摘した(Buechler et al. 2020)。

本稿は、社会的再生産のコモニング(Federich 2012, Sato and Soto Alarcon 2019)とも位置づけ得る1950-60年代の洗濯(機)の共同化が位置づけられていた構造的な権力とジェンダーを分析することを通して、コモニングがめざすべき新たな共同性は、決して過去の共同体の懐古主義ではないこと、「昔がよかったわけではない女性には、懐かしむべき過去は存在しない」(伊田 2024: 120)ことを示す。

II. 日本の農山村と洗濯機

「三種の神器」の一つである電気洗濯機は、日本の都市においては、1950年代後半から普及し始

表1 電気洗濯機の農家世帯普及率 (%)

都市	農村	北海道	山形	宮城	茨城	千葉	長野	新潟	富山	愛知	兵庫	島根	岡山	愛媛	福岡	鹿児島
33	6.8	2.0	1.6	6.3	4.1	2.4	5.6	5.2	7.1	12.8	12.2	3.6	13.2	14.3	3.8	3.3

出典：経済企画庁 1959: 72より作成。原資料は経済企画庁「消費者動向予測調査」昭和34年2月調査。

めた。近代的で豊かなアメリカ式生活様式の象徴であり、消費の責任者としての「主婦」がその管理・運営を担うものと論じられてきた(吉見 2004; Partner 1999)。経済企画庁がまとめた『国民生活の地域別分析』によると、1959年時点での電気洗濯機の世帯普及率は、都市の全国平均で33%、農家では全国平均で6.8%である(経済企画庁調整局民生雇用課編 1959: 72)。表1に示す通り、都道府県別では、農家世帯への電気洗濯機の普及率が最も高いのは愛媛県の14.3%であり、最も低いのは山形県の1.6%である。他方で『国民生活白書 昭和42年度』の数値によると、1968(昭和43)年2月時点での電気洗濯機の普及率は全世帯平均84.8%(経済企画庁 1968: 26)、農家で83.9%(同: 135)であり、1960年代の間に農家世帯においても電気洗濯機の普及が進んだことがわかる。

日本における最初の電気洗濯機は、1913年、米国のウェスタン・エレクトリック社から、日本電気と三井物産が輸入したものだといわれている(伊藤 2017)。1930年代頃から国産が可能になるが、太平洋戦争下での製造中止を経て、戦後は1947年5月頃から、他の家電製品と同様に占領軍家族向けに製造が再開された。しかし日本人メイドのほうが電気洗濯機よりも早く安く洗濯ができるという理由から(山田・森 1983: 45)、1948年7月には占領軍向けの発注が打ち切れ、他の家電に先駆けて国内世帯向けの販売が開始された(林原 2006: 119-21)。ただし、1949年に東芝が攪拌式洗濯機の販売を開始した時点では1台が54,000円と、当時の「サラリーマン」の月給の10倍以上という高額な製品だった(天野・桜井 2003: 177)。

1953年、サンヨーは日本で最初の噴流式洗濯機を開発し、28,500円で販売を開始した。噴流式は、それまで主流だった攪拌式のように米国由来のテクノロジーではなく、英国のフーバー社の技術を参照したもので、四角い形とよりコンパクトなサイズ、攪拌式と比較して安価であったことから、電気洗濯機の普及を加速させた。それまで労力を削減することは「怠惰」とであると忌避されてきたが、電気洗濯機の普及が、労力の削減はめざすべき合理性であり文化的な生活の条件であると認識の変化を促した。噴流式が開発された1953(昭和28)年は電化元年とも呼ばれる(ダイヤモンド社編 1966)。

農山村においては、洗濯機は「明るい生活」や「生活の合理化」に資するものとして、過重労働の軽減とそれによる農家世帯の“嫁不足”の解消、「家」の存続が農家世帯の側でも電機企業の側でも強調されていた(岩島 2022)。戦後の農家世帯に最も普及していた農家向け家庭誌である『家の光』が、最初に電気洗濯機の広告を掲載したのは1955年6月号である(岩島 2022: 362)。農家世帯が戦前から、肥料など生産資材の共同購買のために利用している全国購買農業協同組合連合会(全購連)も、1958年7月から、電気洗濯機の取り扱いを開始している。全購連が家庭用電化製品の取り扱いを開始した理由は、「農家の主婦の労働過重をふせぐとともに、農家が使用する電気器具の価格の適正化をはかるため」であり、電気洗濯機とホームポンプの取り扱いが家電では初の取り扱い商品となった(岩島 2025a)。農家世帯においては、衣類を石鹸で洗う「洗濯」という営み自体が1910

年時点ではほとんど普及していなかったとされ、農村部での洗濯石鹸の販売を重視することによって業界内での生き残りをねらったライオン油脂が全購連と共同で洗濯講習会を開催するなどして、石鹸利用および洗濯の普及・啓蒙活動を戦前から行っていた(岩島 2025a)。1953年から1957年にかけては、全購連の生活資材購買事業の赤字立て直しを図って、「クミアイマーク全戸愛用運動」を開始し、農業協同組合婦人部がその主要な担い手となった(全国農協婦人組織協議会 1972: 114-5)。クミアイマーク全戸愛用運動の期間(1953-57)を通じてクミアイマーク石鹸の取扱量は増加を続け、その後の合成洗剤を農家の女性たちが「受け入れ」る基盤をつくったとされている(岩島 2025a)。電気洗濯機の稼働に必要な電気については、1958年9月時点で「余程の山村僻地を除いて全国あまねくゆきわたつて」いた(経済企画庁調整局民生雇用課編 1959: 90)とされるが、水道の農山村の普及率は、1956年時点では1割に満たないほどであった(労働省婦人少年局編 1961: 174)。

電気洗濯機をはじめとする家庭用電化製品(家電)は、個人の所有物として各世帯で購入されることが想定されているが¹、特に電気洗濯機の普及初期の農山村において、洗濯機が共同で利用されることは珍しくなかった²(天野・桜井 2003)。電気洗濯機に限らず、当時の農山村では家事労働と主にそれを担う女性(“嫁”)の過重労働の軽減のため、再生産労働を共同化する試みが多く見られた。1948年に占領政策の一環として、農家世帯の女性の地位と生活水準の向上をめざして農林省によって開始された生活改善普及事業や農業協同組合が、女性の過重労働の軽減の方途として、家事労働の共同化を図っていた。農林省農政局生活改善課の調査では、1968年時点で共同炊事、集団給食、食品共同加工、共同洗濯、共同縫製、共同保育、生活資材の共同購入、自家用農産物の共同栽培、共同浴場などの取り組みが見られた。全国的に最もよく見られたのは、農繁期の共同炊事である(岩島 2025b)。共同洗濯については、後述するように同時代の事例報告はいくつか見られるもの

の、ほとんど研究対象とされてこなかった。しかし、洗濯は農家の再生産労働の中でも最も時間とエネルギーを要する労働であり、それらが共同化されること、電化されることは、農家の人々に大きな影響を与えたと考えられる。

III. 事例と方法

農村における電気洗濯機の共同利用、および洗濯の共同化について、農林省の生活改善課『生活改善実行グループのあゆみ』1953年度から1972年度、および雑誌『家の光』1950年から1972年³を通覧した他、国立国会図書館サーチを用いて、「洗濯機 共同」「共同 洗たく」などで資料検索した結果、表2に示す9つの事例が確認できた。最も早いケースで1951年から見られる。洗濯機の共同利用／洗濯の共同化に関する事例報告は1950年代を中心に1960年代にかけて見られるが、1970年代以降の事例は見つかっていない。

9つの事例のうち、共同洗濯のあり方には4つのタイプが見られる。まず事例1のタイプで、1台の電気洗濯機を共同で購入し、自宅で使用、使用後にグループメンバーの自宅まで洗濯機を運ぶという方法である。それに対して、事例2の場合は、一人のメンバーの自宅に電気洗濯機を設置し、非農家の女性が農家世帯の洗濯をするために雇用されている。最も多く見られたタイプは、集落の中に共同洗濯場を設置するものである。その中で、事例9のように当番が交代で全員分の洗濯を行う例もあったが、最も多かったのは、各世帯から共同洗濯場に出向き、各世帯分の洗濯を共同洗濯機(もしくは共同の洗濯槽)を用いて行うというものである。事例5、6は、電気洗濯機ではなく、動力利用のコンクリート製簡易洗濯機を共同利用している。電気洗濯機の普及以前には、さまざまな農家向け簡易洗濯機の工夫が見られ、農業用モーターや水車を動力として用いたもの、小川の流れにタルを掛けたものなどがあった⁴。農山村のほとんどの世帯にまだ水道が普及していない状況で洗濯機を導入するためには、給水と排水が可能な場

表2 共同洗濯／共同洗濯機の事例一覧

番号	開始年	事例の地域	共同利用の概要	資料・出所
1	1951年 7月	三重県名張町安部 田部落	生活改善実行グループやよい会13戸で1台の電気洗濯機を共有。1951年には県の生活改善実践部落として指定、県助成の1万円とみんなで出し合った5,000円で中古電気洗濯機1台を購入、戸毎に平均2日間(晴れの日)使って次の家へ回す。	増淵玉江(1953) 水谷鈞治(1953)
2	1953年 農繁期	千葉県船橋市	非農家の婦人の協力によって、ある農家の庭に備えた1台の電気洗濯機に、農家は名前を縫い付けた洗濯物をもってきて頼む。汚れたものは出されず、冬物が多かった。	増淵玉江(1953)
3	1957年	大分県宇佐郡安心 院町字崩ヶ迫崩ヶ 迫	7戸のグループで共同洗濯所。1956年から、子牛1匹を売った収益56,000円と改良資金に当てようとつみたてていたお金で、広い土間に便所、風呂場、台所などを改善。共同洗濯の他に簡易水道や共同パン焼き窯、農業機械の共同利用も行う。今後共同洗たくを当番制にしていきたい。	江藤圀子(1960)
4	1956年	宮崎県都都郡農協 婦人部	28人の主婦のグループ「長園部落第一グループ」で井戸ポンプ購入のための養豚の子豚を買う資金を農協で貸付をうける。豚の共同飼育5年目に貸付金を返還し、電気井戸ポンプを購入。共同洗濯場の設置(湧き水利用、手洗い)を設置。電気洗濯機は1959年以降、5台を(個人で)購入。茶摘み、除草、みかん育苗も共同で行う。	大久保キミ子 (1962)
5	1956年	岡山県勝田郡勝央 町植月	生活改善クラブ33戸で共同水車の横に手製のコンクリート洗濯機を製作。セメント代、パルセーター、ベルト、ブーリーと合わせて3,000円あまりの経費。水車の動力を利用し、米つきと洗濯ができる。水車までの距離は遠くて徒歩10分程度。本洗を洗濯機で洗い、すすぎは下の川ですませ、脱水は洗濯機のそばの脱水機で行う。	記名なし(1959) 『婦人倶楽部』40(3) 記名なし(1956) 『農村文化』35(8)
6	不明	岡山県西大寺市金 田西宮生活改善ク ラブ	14戸の金田西生活改善クラブで共同購入の利益からモーター利用の簡易洗濯機を共同で製作、電力料金もそこから支出。部落の中央で、余っているモーターのある元村長の家の作業場に設置、経費は4,500円ほど。班別で使用。	記名なし(1956) 『農村文化』35(8)
7	1957年 9月	長野県埴科郡戸倉 町千木柳北組合	電気洗濯機2台、動力脱水機1台、動力揚水ポンプ1台他を28世帯で共有。	宮坂光江(1959) 竹内むつ子(1959) 田中ちた子(1959) 記名なし(1962) 『経営実務』17(10) 本誌記者(1960) 『農業世界』55(6)
8	1957年	青森県小沢農協	農業協同組合が共同浴場と共同洗濯場(攪拌式電気洗濯機2台、小型噴流式電気洗濯機1台)を設置。共同洗濯場の建設には20万円、共同浴場の建設には40万円がかかった。2人が共同浴場と洗濯場の運営のために専任で雇われている。利用対象世帯は組合員461戸、計2,862人。1時間40円で洗濯機を使用可能。	小館平苗(1957)
9	1964年	豊橋市柱地区	25戸の生活改善グループによる集団洗たく。共同浴場と同メンバー。洗濯機、脱水機、プレス機各1台とアイロン台2台を設置。農林省の「テストケース」であり、建設に要した64万円のうち、国と県から20万円ずつの補助金、市から10万円の補助金が支出された。共同浴場の収益から14万円を地元負担。2人のグループメンバーが当番でグループ全員の洗濯を行う。	全国農業協同組合中央会(1968) 農林省農政局生活改善課(1968) 伊藤なみ(1966) 柴田エミ子(1966)

出典：資料調査より筆者作成。

所に共同で洗濯機を導入することが最も合理的であったと考えられる。本稿では、洗濯機の共同化の典型例であり成功例でもある事例7をとりあげて詳細に検討することを通して、洗濯（機）の共同化をめぐるコミュニティがどのような権力関係の中に位置づけられていたのか、その中で人々はいかに行為主体性を発揮し得たのかを明らかにすることをめざす。

IV. 洗濯機のコモニング

1. 長野県埴科郡戸倉町千本柳北組合の事例の概要

長野県埴科郡戸倉町（現千曲市）千本柳の北生活改善実行グループでは、1957年9月から28世帯で2つの電気洗濯機を購入し、共同洗濯を行っている。同地区では、1953年に農業委員会の援助により、五加農協管内の全戸数230戸を7つのグループに分け、生活改善グループ活動がスタートした。北生活改善実行グループは、28戸の「主婦」たちが、毎月1回集まり、活動が続けてきている⁵。ただし、1959年に同グループの生活改良普及員が農林省の生活改善普及事業体験発表会文集である『生活改善実行グループのあゆみ』に発表した報告によると、同グループのメンバーは20代4人、30代10人、40代3人、50代1人の18人である（宮坂 1959: 90）。同文集では電気洗濯機は「30戸」で利用されていると記載されている（竹内 1959: 87）ことから、洗濯機の共同利用をする世帯の中にも「北グループ」での活動をしていない世帯があると推測される。

共同洗濯場はブロック建築で約10㎡（3坪）、2個のすずぎ用コンクリート水槽、汲み上げ式ポンプ、2台の電気洗濯機を備えている⁶。共同洗濯所は集落の中心に位置し、最も遠い家で100mほどである（宮坂 1959: 96）。同グループのメンバーが『生活改善実行グループのあゆみ』に発表した体験記録によると、当時の同地区は、田畑合わせて平均約0.48ヘクタールという狭小な二毛作地であり（作目は米、麦、蔬菜、りんご、杏、養蚕な

ど⁷）、兼業農家が多いため、家畜の世話、田畑の仕事、養蚕などほとんどの仕事が老人と女性の負担となっていたという（竹内 1959: 87）。忙しい生活の中、「洗濯物など家の隅に山のようにつまれて着るものがなくなってしまうし子供は汚れたままで遊ばせておくというような状態」であった。この忙しさを解決するための話し合いの中で、子供やおばあちゃん（「姑」）に手伝ってもらえそうな炊事、掃除は手伝ってもらうが、「一番たいへんな洗濯のことをどうするかが問題にな」ったという（同上）。

電気洗濯機のことでもその中で話題にはあがったが、何万円もする電気洗濯機を個人で購入することは「夢のような希望でしか」なかった。しかし夫たちが耕運機の共同利用をしていることから、洗濯機の共同利用を思いつき、洗濯機を借りて体験してみた結果、洗濯機導入の機運が高まったという（同上、岩島 2022: 371-3）。

洗濯場の建設と2台の電気洗濯機購入などには総額21万円を要した。そのうち国庫補助が88,000円、残り12万円を農協から借受け、グループ員1人当たり4,000円を責任額とし、土地改良の労賃や米、麦が取れたときの現物で農協に納め、1959年12月までに完済した⁸。洗濯場の運営は、生活改善グループ員が1人ずつ交代で当番をつとめ、当番が鍵を開けることになっている。使用時間は1日平均6～10時間である⁹。当番は、注意することや思ったことがあれば日誌に記録すること、また運営上で問題が起きたときは、そなえつけの黒板に書いて連絡することとなっている。日誌を書くことは、「一寸面倒なこと」であると同時に、「ユーモアなことを書いたりして笑いの種子になったりこれは皆の和と心のつながりを育てた」コミュニケーションの場でもあった（竹内 1958: 89）。1ヶ月で必要な電気料金は、1人当たり約4円だが、毎月1人当たり5円を徴収することで、電気料金の支払いと運営資金にあてている。また、個別に米麦の収穫期に洗濯機の購入費として米5升（約500円相当）を貯金しているという¹⁰。

2. 集落内および世帯内での権力関係と行為主体性

(1) 導入過程

電気洗濯機の導入を望んだのは、洗濯を担当していた“嫁”たちであった。生活改善グループができて数年たった頃、グループでの講習会が終わったあと、世間話の中で、毎日の忙しさの中で洗濯も満足にできない悩みを隣の人に打ち明けたところ、皆が同じような悩みを持っていたことがわかり、「とにかく忙しすぎる」生活の、どこがどのように忙しいのか、生活、労働時間を調べるようになったという。その結果、畑仕事の合間に片付けているつもり洗濯が、意外に大きな時間を占め、疲労の原因になっていることがわかった¹¹。洗濯の疲労を軽減するため、空き箱を重ねて立って洗濯ができるようにしたり、水の運搬を楽にするため、ホースを使用し、疲れ方の違いを実験するなど、お金のかからない工夫を重ねたが、疲労はあまり軽減しなかった。電気洗濯機がほしいと思う気持ちはあったが、「万」というお金を、めだたない主婦の洗たくのためなどに出してくれる家はまあないし、水道や排水の設備がないとダメだというわけで、遠い夢のようなもの」だった（同上: 234-5）。

同グループが電気洗濯機を共同で導入するにあたって、障壁となったのは、(1) 洗濯機導入のための資金、(2) 夫や“姑”ら世帯員の反対や無理解、(3) 洗濯機を設置する土地の主に3つであった。

まず資金について、同グループを構成する世帯にとって、電気洗濯機は大変高価であり、しかもそれを「めだたない主婦の洗たくのためなど」に支出することは考えられないことだった。1956年の雑誌『家の光』広告によると、ナショナル電気洗濯機は27,500円、サンヨー洗濯機のSW-55型噴流式が28,000円、SW-56型うずまき式が33,000円、日立電気洗濯機の移動渦巻き式は27,900円であった（岩島 2020: 362-3）。一般に、農家世帯が洗濯機の購入を見送る理由には、上下水道の整備が進んでいないために、洗濯機を購入しても水くみの必要があり（Partner 2001: 512）、すすぎ、脱水

などの労働が電気洗濯機を用いても残ることから労働が大きくは軽減されないことが指摘されている（岩島 2025a）。また、山口県で1964年に行われた541世帯を対象とする調査では、電気洗濯機をすでに購入した219世帯では、その決断の55.2%を「主婦」が行っていたのに対し、洗濯機を導入していない322世帯の決断は、その57.2%を「主人」が行っていた¹²。また、洗濯機を導入していない世帯でも75.5%がすでにテレビを保有していた（山口県農林部、山口県農村電化推進協議会、中国家庭電気普及会山口県支部、中国電力株式会社山口支店 1964）。

また、“姑”たちは、「今の“嫁”は楽をしたがる」「共同洗濯機が井戸端会議の場になる」という理由から、共同洗濯機の導入に反対した（岩島 2022）。農家世帯における消費の意思決定から“嫁”が排除されていたこと、洗濯機の導入が“嫁”の利益にしかならないこと、“嫁”の世帯内での地位および洗濯労働の地位が低いことなどから電気洗濯機の購入のための支出が優先されなかったことがわかる。同グループのメンバーは生活改良普及員とともにこれまで洗濯にかかっていた時間を調査し¹³、可視化することを通して“姑”たちを説得したという（岩島 2022: 373）。

3番目の共同洗濯機を設置する土地については、給排水の便利が良く、皆の家のなるべく中央に置きたいと考えたが、土地取得は難航していた。同グループメンバーの生活改善体験発表文によると、「この頃、主人達からそんなに一生懸命なのだったら協力しようといわれてやっと道が開けてきたように思いました。今まで私たちだけではむづかしかった土地の選定のこと、賃金のことなどみんな解決して洗濯機2台、すすぎ場など備えた近代的な設備が3ヶ月ほどで出来上がってしまいました」という（竹内 1959: 88）。雑誌『農業世界』の記者によると、土地は有志の好意によって貸してもらえなくなったという¹⁴。どのような人からどのような土地を借りることになったのか、詳細は不明だが、女性で“嫁”であるグループメンバーの力では土地を借りることが困難であ

り、「主人」たちの協力を得てはじめて、彼女たちの力の及ばないところで事態が進んでいったことが見て取れる。同グループの普及員の記述でも「主人が協力を申し出てくれ、困難だった土地、建物、施設、資金は農協からと着々と進め…」(宮坂 1960: 94)とあり、農協から資金を借りる手続きも「主人の協力」を得てはじめて可能だったと考えられる。他方で、洗濯場の建設にあたっては、近くの部落の個人経営の洗濯所を見学にいたり、普及員の意見を聞いたりしながら、グループメンバーが設計図を作ったという¹⁵。電気洗濯機は最初2台設備したのち、生活改善グループ発表会で発表後に東芝から1台の寄贈¹⁶を受け更新し、1962年時点では4台¹⁷が使用されていた¹⁸。

これらの3つがどのような順で解決したのかは、資料によってややばらつきがあり、正確なところはわからないが、現在入手できている資料の記述を総合的に判断すると、最終的に共同洗濯機の実現に至ったのは、1957年に新農村建設計画のモデル地区に指定され、補助金を得たことが大きなきっかけになったと考えられる¹⁹。新農村建設計画は、農地改革を経た1950年代農村で見られた社会的な分断の是正をめざす農村再編政策であり、1956年から5か年計画で実施された²⁰。それまで農村社会の政治・経済の中心を占めた地主層ではなく、自作農の子である青年層を担い手と位置づけ、農業協同組合を中心とする体制の構築をめざしたものであった(森 2006)。他地域でも、共同で電気洗濯機を導入するための資金捻出方法として、「新農山漁村建設補助金が農林省から4割もらえる」ことを理由に生産組合を組織し、生活改善のための共同洗濯場であるという名目を作った例もある²¹。

(2) 導入後の洗濯労働

共同洗濯以前には、洗濯は他の世帯員が昼寝しているときや夜寝たあとに「嫁」がするものとされていた(岩島 2022: 372-373)。このグループでは、電気洗濯機導入前には、井戸水、風呂水、川の水を利用して洗濯を行っており、グループ員18

人のうち排水が不便だと感じている人は半数であった。1回の洗濯にかかる時間は6人家族で約2時間であった(宮坂 1959: 986)。

共同洗濯所を利用するようになり、洗濯労働はどのように変化したのだろうか。生活改善グループの体験発表文集によると、洗濯の頻度は3日に1回から4日に1回に減少した。電気洗濯機の導入後の効果として、「洗濯が楽しくなって疲れない」「子供や家族がさっぱりした着物を身につけていられる」こと、そして「今まで新聞をよむことなどできなかったがこの頃ゆっくり読める」「子供と楽しむ時間が持てる」「炊事や掃除などにも手が回る」「会合に出られるようになった」ことが挙げられている(竹内 1959: 88-9)。

田中ちた子(1959)の報告によると、共同洗濯の「実際」は下記の通りである。

竹内さんが洗濯の実際をやってみせて下さることになりました。片手のバケツには洗濯物と粉石鹼²²、片手には家で沸した湯を運んでこられます。そしてまず洗濯機の中に簡易水道から出てくる水を入れて予洗し、次にバケツの湯を入れてぬるま湯にし、大匙で計った粉石鹼を入れて泡立て、五分間のスイッチに合せて洗濯機を廻しはじめます。汚れが落ちると次はローラー脱水機で絞って、これを、その洗濯の間にためておいた洗濯槽の中に入れて濯ぎはじめます。〈中略〉ここで水をかけて三回濯いでローラーで絞った上、両手でパン、と叩いて皺を伸ばしバケツに入れて家へ持って帰るという段取です。〈中略〉

竹内さんは共同洗濯所から洗濯物の入ったバケツを下げて自分の家の庭先にもどって、それを干すことになりました。何しろこのお宅は十人家族ですから竿なども二本や三本で足りるわけがありません。それを解決するためでしょう、五十メートルほどの庭先の端から端までに針金がピンと一本張り渡してあります。これにかけることが一つ。

次は別棟の隠居所でもありましようか、そ

の軒先に竿が二本かけられてあり、また二階の広い蚕室の軒下には長い見事な太さの竿をかけてあり、その竿には麻紐で輪をつくって幾つも通しその輪の先にプラスチックの洗濯ばさみがとめてあります。〈後略〉

(田中 1959: 193-4)

共同洗濯所まで、最も遠い家でも 100m ほどではあるが、徒歩で 10 人分の洗濯物と湯を入れたバケツを運び、電気洗濯機があるとはいえ、洗濯機からすすぎ槽への移動、3 回のすすぎ、ローラーを用いた脱水、水分を含んだ洗濯物を家まで下げて帰り、3ヶ所に分散した干場の竿に洗濯物をかけて干すという労働が引き続き必要であることには留意が必要である。

電気洗濯機を導入したことのみによるものではなく、それを共同化したことの成果と思われるのは、洗濯機導入の過程で、労働時間調査や戸別訪問、賛否両論を含めた多くの議論が集落内や世帯内で行われた結果、「洗濯が仕事の一つとして堂々と認められるように」なり、世帯員の昼寝中や夜中ではなく午前中に洗濯を行うことができるようになったことである²³。このグループを支援した生活改良普及員によると、農繁期でも 56%、農閑期であれば 70% のグループ員が午前中に洗濯を行うことができるようになり、夜に行うメンバーは農繁期で 19%、農閑期で 9% と少数派になった(宮坂 1959: 100)。他の世帯員にとってこれまで「嫁のホマチ仕事」だった洗濯が、日中に行うに値する「家事労働」に変化したことは大きな効果であったといえる(Iwashima 2022)。また『農業世界』の記者によると、「洗たくが主婦だけのものではなく、子どもも喜んで洗たく所に現れ、休日には洗たくもののかかえた主人の顔も見られるようになった」という(本誌記者 1960: 237)。

1958 年の決算によると、共同洗濯所のなかった年に比べて、電気料金が一戸あたり約 360 円新しく必要になっているが、石鹸代は一戸あたり 1,010 円 (12.8kg) から 656 円 (7.36kg) に減少し、洗濯時間は年間 24.3 日から 10.2 日に減少してい

る²⁴。他事例でも共通して、共同洗濯の「成果」として報告されるのは、時間と労力の節約であり、浮いた時間と労力は収入増加につながる労働にまわすことができるとされた。この事例では、1 年間に 1 戸あたり 2,900 円近く節約できたと計算している。この時間は畑仕事のほか、「子どもの世話や家の整とん」に使われているという(同上)。

同グループでは、収入が上昇したとしても、1 軒に 1 台ずつ洗濯機を導入することにはこの時点では否定的だった。その理由は何の家からも洗濯所が近いこと、洗濯機が 4 台に増えたため、洗濯所が満員になることはめったになく、たいていは 1 人で 2、3 台使い、一度にすすぎもできること、家に洗濯機を備えても水道と排水設備がないことなどであるという²⁵。このことは、共同洗濯場の設置が、洗濯という労働をともに行うことにはつながらず、各自がそれぞれ、洗濯機の空いている時間に個別に洗濯を行っていたことも示唆している。

北生活改善実行グループの共同洗濯所はその後、1966 年に解散し、取り払われた。電気洗濯機が各世帯に普及し、共同洗濯所の利用者が減少していたところ、共同洗濯所前の道路拡張・舗装を機に、8 年間の共同洗濯が終わりを迎えたという(竹内 1995: 7)。本事例に限らず、多くの共同洗濯は、電気洗濯機がより普及し、上下水道が整備されるに従って、消滅していったと推測できる。農林省は、1964 年以来、全国の 6ヶ所で多額の補助金を注ぎ込んだ「集団洗濯」を実験的に実施している²⁶。しかし 1968 年の全国農業協同組合中央会の調査によると、「この施設が新聞、テレビ、雑誌その他で報じられるにつれて毎年全国各地より多数の見学者が訪れ、その成果を認めて帰っているにもかかわらず、この種の施設は増えていない」(全国農業協同組合中央会 1968: 261)。また、6ヶ所の実験施設のうち、豊橋市の 1 つの事例を除き、思わしい結果が出ていないため打ち切る方針であるとされている(同上)。

これらの共同洗濯が芳しい成果を収められなかった要因には、設備投資にかかる金額の大きさ

に加え、洗濯を共同で行うことそのものにとまなう「気兼ね」の問題もあったと考えられる。事例9では、集団洗濯開始後1965年夏の会合で、洗濯物の出される量が不十分であることが問題になった(岩島 2025b)。このグループを支援した生活改良普及員によると、一日平均16.3kgの洗濯物が出されているが、「まだ洗たくする能力のある設備を無駄に使用していること、しかも衣服は清(ママ)にならないというこの現状の不合理」があったという(柴田 1966: 193)。洗濯物の量が少ない理由は、「誰もが当番の日は早く終わりたい」と願っているのに、「大きなふとんカバーやしきふは出しにくい」ためであることが反省会で明らかになった。そのため、布団カバー類は「各自が当番の日に必ず洗う」ことが申し合わされた(伊藤 1966)。つまり、洗濯を共同化するコミュニティのメンバー全員(他者)のウェルビーイングを考慮することが、共同洗濯ではなく各自での洗濯、もしくは洗濯をしない(布団カバーは洗わない)という行動につながっているといえる。生産と生活が密接に結びつきながら歴史的に形成されてきたコミュニティの内部に新たな洗濯のコモニング・コミュニティを生成させることは、すでにあるコミュニティメンバーへの配慮(ケア)なしには成立し得ないし、その後の生活をつつがなく継続するためには、すでにあるコミュニティへの配慮(ケア)のほうこそが優先されるのである。

また、「洗たく開始当時は奇麗な(ママ)新しい衣類ばかりであったものが、最近では随分いたんだものも出されるようになったことも指摘されていた(柴田 1966: 193)。福井県三国町加戸の集団洗濯においても、当番制であるために「洗たく物のすべてを持参するということは、いささか抵抗があるようで、一部は家庭内で処理することになる」という(農林省農政局生活改善課 1968: 247)。汚れた衣類を「きれい」にすることが洗濯の目的であるにもかかわらず、生活をともにするコミュニティのメンバーに傷んだ衣類を見られたくないという気兼ねは、自宅での洗濯労働を維持することにつながり、労力や時間の節約効果を減

じるだけでなく、洗濯を共同化するという営み自体の限界を示唆していると考えられる。

V. おわりに

本稿で検討した共同洗濯の事例では、農家世帯において発言権が最も弱い“嫁”の立場の女性たちが、洗濯労働を担っていた。電気洗濯機を共同化するという試みは、各世帯に給排水設備が整備されていない農山村の周縁化された環境と“嫁”の仕事である洗濯のための支出(各世帯での購入)をしぶる農家世帯の意思決定、そして生産・再生産を問わず「共同事業」を推進しようとする農業・農村政策を契機としていた。農家世帯への家電導入が進まない理由が、経済的制約ではなく、女性たちが労力を惜しむべきではないとする規範であったことはすでに指摘されているが(Partner 1999)、本稿の事例の場合でも、各世帯が電気洗濯機を導入しない理由は、経済的なものだけではなかった。1950年代後半という時期における電気洗濯機の共同利用は、以上のような各世帯での導入を阻む構造的権力と、共同化を推進しようとする国家権力の枠の中で可能になったといえる。同時に、生活改善グループの“嫁”たちが生活時間調査を実施し、戸別訪問を行いながら、世帯内および集落内での合意を形成するために積極的に活動を行ったことも、共同洗濯機の導入を可能にするために大きな役割を果たしたといえよう。

しかし、洗濯機のコモニングは一時的なものに終わった。電気洗濯機の価格低下と上下水道の整備によって各世帯での設置が可能になったことがその背景と考えられるが、経済的に余裕ができたとしても共同洗濯所のほうが良いと生活改善実行グループ員らが一時期は述べていたことを考えると、理由はそれだけではないと考えられる。かつては“嫁”として洗濯という重労働を経験した“姑”たちが、身体的経験を共有するものとしての共同性を築くのではなく、“嫁”たちの共同性(井戸端会議)を快く思っていなかったこと、そのため共同洗濯機が身体的な洗濯労働の経験を共有する

場にはならなかったこと、そしてすでにある集落の共同性の中で、洗濯機の共同利用はしても汚い洗濯物は共有したくないという感情もその要因であったといえよう。本稿の事例は、再生産労働の共同化のもつ可能性と限界を示唆している。

注

- 1 イギリスの労働者世帯では1960年頃まで、公営の共同洗濯場が一般的に利用されていたが、洗濯機の各世帯への導入に伴い、家事労働は個別化したと指摘されている(グラックスマン2014)。
- 2 当時の農村地域で最も普及していた雑誌である『家の光』1962年10月号にも、農家の軒先と見られる場所で、“姑”世代の中高年の女性5人が電気洗濯機を囲む写真とともに、「いちどにドッサリ…ふつうより5割も余分に洗えるの」「家族が多いからピッタリね…」と語り合うセリフが描かれたシャープの広告が掲載されている(岩島2022)。
- 3 うち、1969年～1971年にかけては資料へのアクセスの都合上、通覧できていない。
- 4 増渕 1956a「農家でできる簡易洗濯機の工夫」『農村文化』35(9): 6-8、増渕 1956b「自分たちで洗濯機をつくって洗濯の共同化をすすめる村」『農村文化』(農山漁村文化協会)35(8): 52-3
- 5 記名なし 1962「便利な共同洗濯場」『農業協同組合経営実務』17(10): 112
- 6 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 236
- 7 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 233
- 8 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 236
- 9 記名なし 1962「便利な共同洗濯場」『農業協同組合経営実務』17(10)
- 10 記名なし 1962「便利な共同洗濯場」『農業協同組合経営実務』17(10)
- 11 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 233-234
- 12 なお、購入しない決断の37.3%が「主婦」、購入した決断の35.6%が「主人」によるものである(山口県農林部、山口県農村電化推進協議会、中国家庭電気普及会山口県支部、中国電力株式会社

社山口支店 1964: 35, 43)。

- 13 メンバーらの調査によると、1回の洗濯量は子供のオムツを除いても10～20枚、4～5kgであり、1時間半から2時間の洗濯労働を要していた(竹内 1959: 88)。
- 14 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 235
- 15 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 236
- 16 田中ちた子 1959「共同洗濯所を訪ねて」『婦人世界』の「係」による「付記」には、「洗濯機と脱水機を兼ねたもの一台を是非増設したいという話を聞いて、東芝商事株式会社より脱水機付電気洗濯機一台御寄贈に預かりましたので、早速現地へお送りいたしました」と記されている。
- 17 4台目は、映画『日本の農業』のために岩波映画の撮影取材を受け入れた際に寄贈されたという(竹内正一 1995: 65)。
- 18 記名なし 1962「便利な共同洗濯場」『農業協同組合経営実務』17(10)
- 19 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6)および記名なし 1962「便利な共同洗濯場」『農業協同組合経営実務』17(10)
- 20 その後、1962年度まで続いたという(福田 1984: 4)。
- 21 記名なし 1959「山の中の共同洗たく場 富山県福光町の御峰地区」『農業日本』14(11)
- 22 1955年頃から、農村でも粉石鹼の普及が進み、「粉石鹼時代」の到来とされた(ライオン油脂 1979: 165-9)。
- 23 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 237、および岩島 2022: 373
- 24 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 236
- 25 本誌記者 1960「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 237
- 26 豊橋市柱地区(事例9)では、明治以来続く共同浴場に国と県から20万円ずつ、市からの補助金10万円に加えて、地元負担金が14万円をかけて新たに共同洗濯所を併設した(全国農業協同組合中央会 1968: 260)。

引用文献

天野正子・桜井厚, 2003, 『モノと女』の戦後史——

- 身体性・家庭性・社会性を軸に』平凡社.
- Buechler, Stephanie, Verónica Vázquez-García, Karina Guadalupe Martínez-Molina, and Dulce María Sosa-Capistrán. 2020. "Patriarchy and (Electric) Power?: A Feminist Political Ecology of Solar Energy Use in Mexico and the United States". *Energy Research and Social Science* 70: 1-10.
- Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge.
- Canning, Kathleen. 2006. *Gender History in Practice: Historical Perspectives on Bodies, Class, and Citizenship*. Cornell University Press.
- Clement, Harcourt, Joshi and Sato. 2019. "Feminist Political Ecologies of the Commons and Commoning." *International Journal of the Commons* Vol. 13 no.1: 1-15.
- コーワン, ルース・シュウォーツ, 高橋雄造訳, 2010, 『お母さんは忙しくなるばかり——家事労働とテクノロジーの社会史』法政大学出版会.
- ダイヤモンド社編, 1966, 『歴史をつくる人々 24 ゼロから出発する——三洋電機社長井植歳男』ダイヤモンド社.
- De Grazia, Victoria. 2005. *Irresistible Empire: America's Advance through Twentieth-Century Europe*, Harvard University Press.
- 江藤園子, 1960, 「共同化の喜びと私たちの生活変化」『農業富民』32(11): 49-52.
- Foucault, Michel. 2000. "Governmentality," Faubion, J. D. ed. *Power: Essential Works of Foucault, 1954-1984*. The New Press: 201-22.
- 福田稔, 1984, 「地域開発と農業・農村——歴史と展望」『農林業問題研究』20(2): 49-56.
- グラックスマン, ミリアム, 木本喜美子監訳, 2014, 『「労働」の社会分析——時間・空間・ジェンダー』法政大学出版局.
- Harcourt, Wendy. et al. ed. 2023. *Contours of Feminist Political Ecology*, Palgrave macmillan.
- 林原泰子, 2006, 『日本における家庭用電気洗濯機の成立に関する研究』九州大学博士論文.
- 本誌記者, 1960, 「明るくなった共同洗濯所の主婦たち」『農業世界』55(6): 233-7.
- 伊田久美子, 2024, 「資本主義批判としてのフェミニズム——マルクス主義フェミニズムを振り返る」上野千鶴子・江原由美子編『挑戦するフェミニズム——ネオリベリズムとグローバリゼーションを超えて』有斐閣.
- 板垣邦子, 1992, 『昭和戦前・戦中期の農村生活——雑誌『家の光』にみる』三嶺書房.
- 伊藤潤, 2017, 「戦前の日本における家庭用洗濯機とその製品色——20世紀の日本における主要工業製品色の変遷(2)」『芸術工学会誌』75:128-35.
- 伊藤なみ, 1966, 「集団せんたくを実施して」農林省振興局普及部編『生活改善実行グループのあゆみ』農林省: 183-8.
- 岩島史, 2022, 「農村における生活の改善と家電の導入——女性らしさの変容に着目して」足立芳宏編『農業開発の現代史——冷戦下のテクノロジー・辺境地・ジェンダー』京都大学学術出版会: 347-80.
- . 2025a, 「戦後農村における家庭電化という経験——電気洗濯機と洗濯石鹸に注目して」『農業史研究』59: 17-28.
- . 2025b, 「戦後日本農村における家事労働共同化の可能性と限界」国際共同研究加速基金(代表: 堀口正)「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」報告書.
- . 2025c, 「フェミニスト・ポリティカル・エコロジーの視点から考える日本の農と食——ケアから食農システムの危機を乗り越えるアプローチ」岩島史、鶴理恵子、森真里、安里和晃 責任編集『季刊 農業と経済 特集 農と食の「ジェンダー」を考える——多様性と交差性の視点から』英明企画編集.
- Iwashima, Fumi. 2022. "Making and Unmaking of Housework in Rural Japan". *The Japanese Political Economy* 48(2-4): 107-128.
- J.K. Gibson-Graham, Jenny Cameron, and Stephen Healy. 2016. "Commoning as a Postcapitalist Politics" in Amin, A. and Howell, P. eds. *Releasing the Commons: Rethinking the Future of the Commons*: 192-212. New York: Routledge.
- 記名なし, 1959, 「山の中の共同洗たく場 富山県福光町の御峰地区」『農業日本』(中部日本新聞社) 14(11): 138-9.
- 記名なし, 1962, 「便利な共同洗濯場」『農業協同組合経営実務』17(10).
- 記名なし, 1959, 「水車で共同洗濯の村」『婦人倶楽部』(講談社) 40(3): 24-5.
- 経済企画庁調整局民生雇用課編, 1959, 『国民生活の地域別分析——生活水準の地域差と人口流動』, 大蔵省印刷局.
- 経済企画庁, 1965, 『国民生活白書 昭和39年度』, 経済

- 企画庁.
- . 1968,『国民生活白書 昭和42年度』経済企画庁.
- 小館平苗, 1957,「農協浴場・洗濯場経営の実際——青森県小沢農協の場合」『農業協同組合経営実務』12(11): 60-3.
- ライオン油脂株式会社社史編纂委員会編, 1979,『ライオン油脂六十年史』.
- 増淵玉江, 1953,「共同で電気洗濯機を使う婦人達」『農村文化』(農山漁村文化協会)32(11): 80-3.
- . 1956a,「農家でできる簡易洗濯機の工夫」『農村文化』(農山漁村文化協会)35(9): 6-8.
- . 1956b,「自分たちで洗濯機をつくって洗濯の共同化をすすめる村」『農村文化』(農山漁村文化協会)35(8): 52-3.
- 宮坂光江, 1959, タイトルなし 農林省振興局普及部生活改善課編『生活改善実行グループのあゆみ——農家生活改善発表大会 第7回』農林省: 89-100.
- 水谷劔治, 1953,「洗濯からの解放——三重県名張町安部田の生活改善クラブ」『富民——農業の技術と経営』(富民協会、富民社、毎日新聞社)』25(7): 66-9.
- 森武磨, 2006,「両大戦と日本農村社会の再編」『歴史と経済』48(3): 31-40.
- Mollett, Sharlene, Laura Vaz-Jones and Lydia Delicado-Moratalla. 2020. "Feminist Political Ecologies" *Routledge Handbook of Gender and Feminist Geographies*.
- Nelson, Ingrid. L., Hilary Oliva Faxon, and Melf-Hinrich Ehlers. 2024. "Feminist Political Ecologies of Agrarian Technologies: Knowing the Digital Differently". *The Journal of Peasant Studies*, 51(6): 1303-30.
- Nightingale, Andrea J. 2019. "Commoning for inclusion? commons, exclusion, property and socio-natural becomings" *International Journal of the Commons* 13(1): 16-35.
- 農林省農政局生活改善課, 1968,『家族労働条件適正化対策樹立のための調査研究総括報告書——農家家族労働設計に関する指導指針試案』.
- 大久保キミ子, 1962,「お母さんに自由な時間と金と空間を」中田正一他編『農村婦人の生産活動——その実際と進め方』文教書院: 99-116.
- Partner, Simon. 1999. *Assembled in Japan: Electrical Goods and the Making of the Japanese Consumer*. University of California Press.
- Partner, Simon. 2001. "Taming the Wilderness The Lifestyle Improvement Movement in Rural Japan, 1925-1965", *MONUMENTA NIPPONICA*. 56(4): 487-520.
- 労働省婦人少年局編, 1961,『生活時間白書: 婦人のレジャー・タイムについての研究』大蔵省印刷局.
- 柴田エミ子, 1966,「当該グループの幼きの時間的経過とグループをとりまく環境について」農林省振興局普及部編『生活改善実行グループのあゆみ』農林省: 188-93.
- 竹内正一, 1995,『千本柳の来し方記』竹内正一.
- 竹内むつ子, 1959,「みんなで力を合せて洗濯所を設置して」農林省振興局普及部生活改善課編『生活改善実行グループのあゆみ——農家生活改善発表大会 第7回』農林省: 87-9.
- 田中ちた子, 1959,「共同洗濯所を訪ねて」『婦人生活』13(6): 192-3.
- 山口県農林部、山口県農村電化推進協議会、中国家庭電気普及会山口県支部、中国電力株式会社山口支店, 1964,『山口県農村家庭における電気洗濯機導入についての世論調査』.
- 山田正吾・森彰英, 1983,『家電今昔物語』三省堂.
- 吉見俊哉, 2004,「リビングルームのなかの「和風」——戦後日本と家電／家具のミクロ政治学」『住宅総合研究財団研究論文集』31: 33-53.
- 全国農業協同組合中央会, 1968,『農山漁村生活共同施設調査研究結果報告書』.
- 全国農協婦人組織協議会, 1972, 全農婦協二十年史——農村婦人と農協婦人部の歩み』.

掲載決定日: 2025年5月13日

Abstract

Commoning Electric Washing Machines in Rural Japan

Fumi Iwashima*

This paper sheds light on communal laundry as an attempt towards commoning reproductive labour from a feminist political ecology perspective. It focuses on the Senbon-Yanagi communal laundry case, in which 28 farm women bought two electric laundry machines together. These young wives were responsible for their family's laundry in addition to their productive work. As they were too busy, they wanted to get washing machines, but their family members refused, and they did not have sufficient funds to purchase them. Eventually, they persuaded their families through conducting a time-use survey. After their village was subsidised by the National Policy for New Rural Village Construction, they were able to implement communal laundry, but this practice was short-lived. This paper shows that efforts to create a commoning community do not represent mere nostalgia for the “good old days”.

Keywords: commoning, feminist political ecology, rural women, electric washing machines, post-war Japan

* Senior Lecturer, Graduate School of Economics, Kyoto University

沖縄における共有地の軍事化と女性

——接收された総有の軍用地から

桐山 節子*

本稿は、地域から浮き彫りにした戦後沖縄の再構成である。沖縄県国頭郡金武町には広大な米軍海兵隊演習場があり、地権者には日本政府から軍用地料という賃貸料が支払われている。そのような中、2002年12月、金武町金武区の女性たちは、コミュニティ内の男性世帯主だけに軍用地料が配分される仕組みの不平等性を訴えて裁判を起こした（金武杣山訴訟）。

本稿は近現代沖縄の歴史をふまえ、米軍基地・ジェンダー・入会地などをめぐって複雑な利害関係を抱え込まれた地域社会が、高額な軍用地料によって再編されてきたことを実証的に明らかにするだけでなく、女性を差別する家父長制、他出自出身者と地域コミュニティとの関係を捉え直す。それは、地域の社会構造と政治的傾向の解明によって差別の内実を明らかにしようとするものである。

キーワード：沖縄、基地、軍用地料、地域コミュニティ、女性運動

1. はじめに

1. 問題設定

本稿は、米軍海兵隊演習場が存する沖縄県国頭郡金武町を例に、戦後、基地の町となった地域社会を捉えるものである。町では、1990年代から2000年代始めに軍用地料（基地賃貸料）の配分をめぐる女性運動が起こり、2002年から金武杣山訴訟がたたかわれた。それは、コミュニティ内の男性世帯主のみに軍用地料が配分されている不当性を訴えたもので、利益構造から疎外されてきた女性たちが、入会団体（私的団体）を提訴したのである。

本稿では、裁判で被告となった入会団体の変容、提訴した女性グループと戦後転入してきた他出自出身者との関係を裁判に関わる資料とフィールドワーク等を基に考察する。この女性運動に着目することで、地域の社会構造と政治的傾向を解明し、差別の内実を検討する。

問題の背景には、沖縄の近現代史と戦後約80

年間広大な米軍基地が集中し¹、金武町にも総有の入会地が軍事基地とされていることがある。地域社会は軍事基地の出現によって複雑な利害関係を抱え込まれ、町には、軍用地料と性暴力被害について語らないという暗黙の了解がある。

さらに戦後、再編された共同体が、女性差別的であることに加え戦前には見られなかったよそ者に排他的な論理を持っていることを明らかにする。よそ者とされたのは、基地キャンプ・ハンセン門前の新開地と呼ばれる歓楽街で働く人々であった。同地で働く女性たちは、米軍専用の歓楽街において日常的に横行する暴力を、曖昧にする役割を果たしていた。だが、経済不況に入った1995年の沖縄米兵少女暴行事件で²、性暴力による人権侵害が問われた後、沖縄の女性たちは生活の場から基地被害、性暴力被害を問い直すことが際立つ。

このような状況から沖縄は、伝統的に家父長制的な社会であり、男尊女卑の慣習が根深く残る地域といわれてきた。だが、本稿では2つの論点を

* 同志社大学人文科学研究所嘱託研究員（社外）

重視することで、異なるアプローチから沖縄の軍用地の問題を捉えたい(桐山2019: 8-11・17)。1つは、家父長制が必ずしも固定的で普遍的な「伝統」ではなく、社会経済的秩序の転換において再構成されるという点である。イギリス支配下のインドの例を指摘するC・T・モーハンティー(Chandra Talpade Mohanty)の研究は、家父長制は自然的・確定的に存在するのではなく、経済的利益の変動に応じて変容しつつ、人々の社会関係を規定すると論じた(Mohanty 2003=2012: 90-1)。

さらに、1990年代における慣習をめぐるインドの複雑な状況は、経済のグローバル化だけでなくイギリスの植民地支配を抜きにして理解できないという栗屋利江によるインド近現代史の分析を参照すると、同時代の沖縄においても、米軍基地を維持しようとする日米両政府の政策と沖縄側からの抵抗の運動が「相互に作用した結果としてとらえなおすべき」ものと思われる(栗屋1998: 1-3)。本稿は、こうしたグローバルな論点を含む沖縄の地域社会の問題を国家的な枠組みでなく女性運動の視点から、軍用地料と政治的傾向に関わる運動が地域の生活に根ざした問いであることを考察する。

2つ目は、岡本恵徳が沖縄の共同体の価値観や思考のあり方を思想的なレベルで論じた議論である。共同体には、「自分たちを自分たちで支えない限り、生き抜くことをえない…ともに生きのびなければならないという意識」を含み、住民のあり方を規定するある種の規範が存していると論じる(岡本1970: 144-92)。その規範は、人間の日常的な意識と行動を規制する可変的なものであり、地域を主導する人々によって統制される。住民は暗黙のうちに従うことを強いられ、特にそれは女性差別が強い地域で、より強く女性にのしかかるのである。

2. 金武町と字金武の軍用地料問題

対象となる金武町は沖縄島のほぼ中央部に位置する(図1)。2020年当時、金武町の人口は10,806人、世帯数は4,657戸である。産業別就業者数をみ

ると、第1次産業が9.1%、第2次産業が17.7%、第3次産業が73.0%となっていた(『令和4年度版 第9号 統計きん』2022年)。1人当たりの市町村民所得は、沖縄県の111%であった(『令和4年度沖縄県市町村民経済計算(沖縄県市町村民所得)』令和7年4月公表、2022年)。金武町は、軍用地を含む金武、並里、伊芸、屋嘉と含まない中川の5行政区で³、町の軍用地は、米軍と自衛隊を合わせて55.6%に達し、軍用地料収入は町役場予算の24.7%である(『沖縄の米軍基地 令和6年5月』2024年)。キャンプ・ハンセンの駐留米軍人は6000-6500人で推移し、2007年から陸上自衛隊の共同使用となっている。本稿では1946年以前を旧金武村、1946年から1980年までを金武村とし、町制移行後は金武町と称する。

軍用地料をめぐる女性運動は、他出自男性と婚姻し世帯主ではない並里区と金武区の一部^{おんなしそん}女子孫が、入会団体に会員資格の改正を求めたものである。並里区では、1990年代に入会団体の協議



図1 金武町位置図

出典：「令和4年度版 第9号 統計きん」2022年
(2024年11月25日取得)

で目的が達成されたが、金武区では1998年に署名行動に失敗した後、既述したように裁判がたたかれた(桐山 2019: 186-7)。

提訴に際し「人権を考えるウナイの会」(略称: ウナイの会、裁判後解散)が結成された⁴。ウナイの会は軍用地料をめぐる女性差別解消を目的とし、金武区に居住する女子孫約70名で結成された個人参加のグループである(訴訟の原告26人のうち、聞き取りできたのは15人。彼女らを原告グループと称する)。両区で中心となったのは、地域活動の役員経験者の3名で、自明のこととされている男女平等を生活の中で実現しようと行動した(桐山 2019: 7-8)。本稿は、区の境界が曖昧でありながら先に女性差別を解消した並里区を参照しつつ、金武区の女性運動を字金武の軍用地料問題と称して検討する。戦後の字金武は、金武区と並里区、並里区から分区した中川区を含むが、ここでは軍用地がある金武・並里区を字金武として扱う。

本稿は次のように構成される。Ⅱで先行研究の論点を整理し、Ⅲで基地の町と地域の概要を考察する。Ⅳでは歓楽街の変容を記述し、Ⅴでは入会団体と慣習を分析する。Ⅵでは再編され続ける地域と女性の立場を整理し今後の課題を記述する。

なお、聞き取りはすべて金武町で行ったもので、応答の記載は個人情報への配慮から氏名をイニシャルにした。

Ⅱ. 先行研究の検討

沖縄における米軍基地とジェンダー、軍用地料に関わる先行研究の多くは、総じて研究者の専門分野ごとに問題を切り分ける傾向があり、基地の町における10数年の女性運動として捉えられていないことを念頭に検討していく。

第1は、裁判の争点となった地域の慣習と女性の関係である。弁護士の前田史緒は「慣習が女性差別の温床である」とし、司法のジェンダー・バイアスを指摘する(前田 2009: 82-6)。民俗学研究者の波平エリ子は、「元来、金武区の杣山慣行では女子孫排除の規定は伝統的になかったが、戦後の

会則改変の過程で、トートーメー継承の慣行が住民を納得させるものとして会員規則に取り込まれ……現在、その見直しが模索される段階」と論じる(波平 2016: 539)。これらは原告の主張を肯定的に捉えるものであるが、地域社会が軍用地料という権益を堅持するために慣習を使い、他出自出身者への排他性を強めながら地域を再構成してきた側面に言及していない。問題の全容を明らかにするには不十分と思われる。

第2はジェンダーと安全保障の視点である。秋林こずえは、沖縄の米軍人による性暴力を「軍隊に内在する暴力が形となって表れたもの」と捉え、背景には軍事主義や経済格差などの問題があると述べる。1995年以降も被害者が沈黙を選ぶのは、女性を抑圧する家父長的な価値観や日米安保体制への影響を懸念する支配者層の対応により、被害者が沈黙を強いられていると論じる。他方で彼女は、日米地位協定の改定を求める県民の声は強まっているが、実効性のある見直しには至っておらず、住民の人権が尊重される安全保障に向けて疑義を提示する(秋林 2015: 149-164)。

第3は公共政策と財政の視点である。川瀬光義は、基地が所在する自治体における行政区(任意団体)の軍用地料収入は、『ミニ役場』的な機能になって……軍用地料は地域社会に浸透しているが、……地料は一種の‘掴み金’的なもの」で財政需要に応じての配分ではないため、財政力の向上に繋がらないと実態を憂慮する(川瀬 2013: 89-90)。

また、来間泰男は軍用地料が沖縄に与える影響を批判的に論じ、地料が「勤労に基づかない、棚ボタのカネ……このカネはひたすら軍事基地を維持したいという『積極意思』を育てている」と、入会団体が基地維持の利益構造を形成していることに苦言を呈する(来間 2012: 88-9; 桐山 2019: 14-15)。

上記、3分野の研究は、戦後に基地の町となった地域が軍用地料によって女性差別を再編・強化したことに触れず、地域社会の再構成を分析する視点も持たない。さらにウナイの会が、地料の獲

得と入会団体への参画を求めつつ、他方で町の基地被害抗議行動に参加していたことにも触れていない。

そこで第4の視点として、筆者は軍用地料を軸に基地とジェンダー、地域を論じた。これまで沖縄の基地と軍用地料の問題は、復帰頃から基地を容認し地料を欲する基地肯定派とその受取りを拒否し基地撤去を主張する反戦地主の二分法で議論され、軍用地料がはらむ利益構造の問題点は放置されてきた。ジェンダー研究では、反基地運動が男性主体であったことも影響し⁵、軍用地料をめぐる女性差別が既知であるにも関わらず問われてこなかった。それに対して筆者の研究は、家父長的に維持されている入会団体の変容を捉え直すことから、軍用地料が高額になるにつれ、再編されてきた地域の伝統といわれる慣習を明らかにし、地域社会の力関係を念頭に政治的論理を議論する道筋をつけた(桐山 2019: 285-8)。

本稿は、近年の入会団体の変容から基地の町の重層的な差別の動向を考察し、女性たちが地域の矛盾を問いつけていることを浮き彫りにする。軍用地料の配分のあり方を問う運動を、地域社会の歴史的変遷や女性運動との観点から論じた研究はこれまでにないもので、そこに本稿の独自性がある。

III. 基地の町と軍用地

1. 問題となった軍用地と権利

明治政府は近代税制度の確立に際し、民法に「各地方の慣習に従う」規定を盛り込んだ入会権を制定し、近代法と異質な集団所有(総有)の存在を認めた⁶(中尾英俊 2009: 14-6)。

沖縄県では、地租改正に当たる土地整理事業(1899-1903)の施行後、紆余曲折を経て、国有林となった杣山を県全体で約56%減らし、1906年に有償払い下げを実施した。支払完了後の1937年に杣山は旧金武村に編入された(金武町誌編纂委員会編 1983: 85)⁷。このような経緯で旧金武村の入会地は現在、軍用地料収入を得る財産となっ

ている。

復帰後、金武町は1982に「旧慣による金武町公有財産の管理等に関する条例」を制定した(以下、旧慣条例と称する)。主旨は、1906年当時、杣山の使用権を有し、国への支払いに参加した旧金武村部落民に対して、旧慣による使用権を認めるもので(以下、旧慣使用権と称する)、軍用地料の管理のため軍用地を有する4区に旧金武村民による部落民会の設立を義務づけた。

2. 土地接収と軍用地

金武町の軍用地は、沖縄戦の最中に接収されたことにはじまる。海兵隊の基地建設計画は朝鮮戦争後に通告を受け、戦争体験を経て地域の立て直しに尽力した村会議員、地主らを中心に議論され、「苦渋にみちた選択」の後、1961年に村面積の54%が基地キャンプ・ハンセンとなった(沖縄県金武町企画開発課編 1991: 23-33・153)。

背景には、アジア太平洋戦争で沖縄が捨て石とされ、対日講和条約締結後も米軍占領が継続されたことによる日本政府への不信感がある一方、米国の財政力に魅了された側面も窺われる(桐山 2019: 50・52-60)。そして島ぐるみ闘争の最中に、米軍は琉球政府を介さず、久志村辺野古と直接交渉し基地受入れとなったことから(NHK取材班 2011: 44-47)、金武村にも自力で復興を目指さざるをえない意識が存し、米国民政府の恫喝と懐柔に「強いられた協力を選択するほかない現実」に直面した諦め感も推測される(鳥山 2013: 196)。こうして、海兵隊演習場の受入れは誰もが支持する事実となっていく(図2)。なお、沖縄の米軍占領には、天皇メッセージが関係していたことが復帰後に明らかになった⁸。

3. 復帰と1995年の沖縄米兵少女暴行事件

沖縄はベトナム戦争と復帰運動を経て、1972年に施政権を返還されるに至った。だがこれは、米国のドル防衛とグローバルな米軍再編の一環といわれ、「沖縄の軍事基地を利用してアメリカが自由に行動できる」ことは何ら変わらなかった。そ

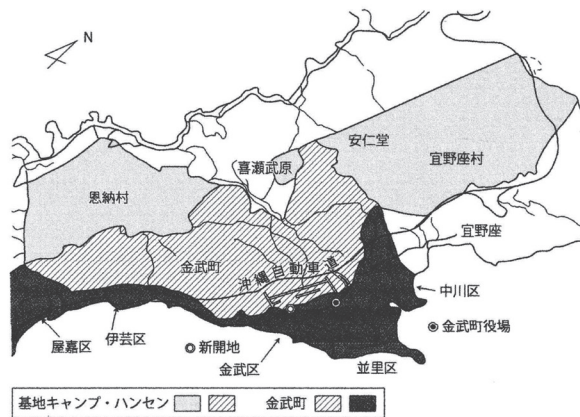


図2 金武町周辺と基地キャンプ・ハンセン

出典：拙著、2019『沖縄の基地と軍用地料問題——地域を問う女性たち』有志舎：53の図3による。キャンプ・ハンセンを示す地帯は『沖縄の米軍基地 令和6年5月』2024年（2024年11月23日取得）を参照した。

の上1970年代前半に本土から沖縄へ米軍基地の集中が進み、在日米軍専用施設面積は1972年に58.6%となっていたが、1975年に73.3%と拡大した（野添 2020: 202）。本土と沖縄における基地面積比率は、桐山（2019: 5）を参照されたい。

東アジアにおける米国のプレゼンスは、冷戦終結後も基本的に変化せず、米軍再編の度に「役割を再定義し、また日本政府もその駐留を求めて」資本のグローバル支配や軍事主義的政策が強化された（野添 2020: 201）。そして1995年の県民大会では、日米地位協定の早急な見直しが決議され、基地の一部返還の動きとなり、北部金武町などの軍用地料は他地域よりも増額された。だが、町では不況と長期のオフ・リミッツにより⁹、町民1人当たりの平均所得が1995年には101.5%と県平均を超えていたが、1996年には90.9%と低下し、平均以下の水準は2011年まで続き、軍用地料の受領有無が注目されていく（『令和4年度沖縄県市町村経済計算（沖縄県市町村所得）』令和7年4月公表、2022年）。

4. 軍用地料と基地維持

米国は1952年から軍用地料の支払いを開始し、

後に大幅な値上げが3回実施された。このように日本の米軍基地維持政策は、反基地運動の高まりの中で軍用地料を値上げしてきた『沖縄の米軍基地 令和6年5月』2024年）。政府は基地反対派に対して強権を行使せず、実質的な補償を上乗せし、反対感情を和らげる施策をとっており、地料の金額決定には政治的要因が含まれる（詳細は、桐山 2019: 60-70を参照）。

ケント・E・カルダー（Kent E. Calder）は、基地維持に高額な財政支出をする日本政府の対応を補償型政治と特徴付け、「補償とともに補償を正当化する手続きが必要」と論じた（Calder 2007=2008: 200）。それを担う沖縄防衛局は、旧防衛施設庁の流れを汲み、政府の最上層部に直結する機関として日米地位協定の下、米軍・自衛隊の「あらゆる問題に迅速に……対応できる独特な権限」を有し地域との調整役を担う（同上: 204-12）。基地維持に関わる代表的な民間団体は、沖縄県軍用地等地主会連合会（略称：土地連）である。土地連は軍用地主の代弁者的役割をもち、軍用地を抱える市町村と軍用地主会などと緊密なネットワークを形成する（桐山 2019: 71）。沖縄防衛局は微妙な調整役として民間団体と連携し、物心両面で地域社会が同意できる地元の権益を導き出すという。

ここで、ウナイの会会員らも参加した伊芸区の基地被害抗議をみてみよう。戦後、たびたび演習場からの流弾被害を受けてきた伊芸区民は、2003年に米軍の対テロ用「都市型」戦闘訓練施設が住宅街から300mの地区に建設されることに反対し、約3年に及ぶ抗議運動を展開した。伊芸区行政委員会は建設反対表明の後、基地キャンプ・ハンセン第1ゲート前で486日間の無言の早朝集会を継続し、金武町では県民集会も開催され、県知事、沖縄防衛局、在日米軍沖縄地域調整官などへ抗議と要請を実施した。

当時は米軍ヘリ墜落事故や辺野古問題があり、県は積極的な対応をせず、県民集会にこぎ着けても、県議会与党は「反基地的世論の盛り上がりを防ぐガス抜きの意図をもつ」(新崎 2005: 224)と地元新聞に公言していた。伊芸区は紆余曲折を経て、訓練施設を居住地域から奥に建設することで合意した。それは区長・区民の切実な諦めない行動が、政府・県の物心両面の現実的な対応を引き出させた結果といえる。

この運動で中心的な役割を担った区長経験者のIM②は「危険な事件・事故が断続的に起きている演習場をなくしてほしいのだ、基地の即時返還ではない」と述べた(IM②からの聞き取り 2018年1月16日)。つまり、運動は基地の有無ではなく、総じていかに安全で経済的に安定した生活を手に入れるかを問い、甚大な基地被害を予測し、日米両政府の方針変更を求めたのである。

また、町民は軍用地料の受領故に、基地に関わる国の方針をすべて受け入れるのではなく、問題によっては抗議運動を組織する。こうした状況には軍用地料の増額だけでなく、抗議の正当性を評価し、その上で交渉を進める対応が必須だ。これこそが補償型政治には欠かせない要素と思われる。

ところで、反基地運動の根には、米軍基地が沖縄に集中していることから生じる不公平感があり、1995年以来日米地位協定の見直しを求めている。さらに、県内の基地被害抗議集会では、軍用地料を得ているならば抗議を自重すべきという声

がたびたび聞かれるが、金武町でも同様だ(桐山 2019: 243-244)。その声は復帰時に、「土地連が基地容認に転じてからの傾向という(『都市型訓練危険性を訴え』『琉球新報』2005年7月23日)。

5. 地域の拠点——区と入会団体

各区の部落民会は後に名称変更し、現在、金武入会権者会・並里財産管理会・伊芸財産保全会・屋嘉財産管理会となっている(すべて私的団体)。毎年、町役場は4団体に軍用地料を2分の1配分し(表1)、その後、入会団体は区と予算協議し、補助金を区に拠出する(以下、各入会団体名は区名に入会団体をつけて表記する)。

金武町の行政区はすべて任意団体で、区の議決機関は行政委員会である。業務は区によって異なる部分もあるが、役場から委託を受けた一部の行政サービス、自治会、祭祀・伝統的な芸能、区内の問題解決などで区費と自治会費を徴収しない。金武・伊芸・屋嘉区の財源は、独自の財産収入、入会団体からの補助金と町役場からの事務委託費であり、区予算に占める補助金額は団体によって異なる(桐山 2019: 136-43)。ただし、並里区は区有地からの軍用地料を基に運営され、入会団体からの財政補助を受けない。補助金をめぐる入会団体と区をみると、両者の力関係は財源を持つ方にあり、区の運営は、ときに入会団体の対応に左右される場合も考えられる。そして、町役場はその関係に関与できない。

基地被害抗議では、既述した伊芸区のように、区行政委員会・区議会や金武町議会が区民からの意見を集約する場となり、行動の諸経費は区予算と町民カンパなどで賄い、地区の拠点を担う。区は行政サービスを補完する「ミニ役場的」な面だけではないのである。

このように、軍用地料は町役場、区と入会団体が地区に密着した地域づくりを可能にする重要な財源である。区と入会団体はこの独自財源を背景に、ときに地区の規範を規定する社会的な権力を有する。

表1 「旧慣による金武町公有財産の管理等に関する条例」に関わる分収金配分の推移(1985年～2020年)

年/区分	金武町軍用地地主会への分担金	分収金 (町役場分)	金武 入会権者会	並里 財産管理会	伊芸 財産保全会	屋嘉 財産管理会	負担金、補助金 及び交付金合計
町役場からの 配分率	8/100	1/2	1/2				
1985	3,176	397,485	150,960	104,873	106,415	35,235	798,144
1990	1,884	491,017	186,062	129,686	131,247	44,022	983,918
1995	3,764	633,599	238,885	166,938	168,808	58,968	1,270,962
2000	4,594	782,625	295,667	205,637	208,934	72,387	1,569,844
2005	5,305	862,958	329,524	221,078	233,315	79,041	1,731,221
2010	6,892	903,254	345,000	230,995	244,223	83,036	1,813,400
2015	7,030	971,718	371,809	247,500	261,848	90,561	1,950,466
2020	7,446	1,018,551	392,694	258,828	274,257	92,772	2,037,102

出典:金武町一般会計当初予算:総務費から抜粋(金武町役場総務課と企画課から、2018年1月16日から2025年1月28日)。(単位 千円)

IV. 基地と歓楽街

1. 歓楽街の変容

沖縄では本土同様1946年に公娼制が廃止された。米軍人用歓楽街は、1950年に沖縄民政府が、米兵に提供する特殊慰安施設の設置を米国民政府に要請した頃からである。後に、米国民政府は新Aサイン制度を施行し(1963)、歓楽街は中部地区を中心に米軍人専用の休養回復の場所としてドル稼ぎの主要産業となった。

金武村では、基地が完成した頃、第1ゲート前に米軍人用の新開地が区画され、農村地帯がネオン街に変貌した(桐山 2019:102-3)。移民経験や新開地での営業経験を持つGS(1936年生)は、新開地が米軍専用の遊興地区として政府と地主らによって計画され、地区に暴力事件が多かったこと、なかでも離島から出稼ぎに来た女性従業者への性暴力は「公表されているのは氷山の一角で、当事者や地域の人々は隠し通すことに懸命だった」と事件の多さを語った(GSからの聞き取り 2015年2月10日)。

新開地の自営業者は村役場の協力を得ながら、米軍と友好的な関係を維持し、多くの成功者を輩出した。彼らと女性従業者は基地労働者らと同

様、占領下における様々な差別と抑圧の下、基地維持に関係する軍人・労働者らの消費に依存してきた人々でもある。米軍はオフ・リミッツの発令と解除、コンディショングリーンを巧みに使い分け、性病感染の蔓延防止だけでなく、Aサイン業者の営業や地域経済を牽引する役割と住民の反米感情・行動を抑圧する施策を実施した(注9参照)。

この地区の最盛期はベトナム戦争の頃で、復帰後に不景気となったが、1980年代には低賃金の外国籍女性が多数就業したことで持ち直した。1995年の沖縄米兵少女暴行事件以後は廃業・休業が増加し、政府と県・町役場は観光スポット育成に向け新開地振興計画に予算措置したが、他地域との競争が激しい。

2. 女性従業者の立場

新開地は、地域のドル稼ぎの拠点であると同時に¹⁰、米兵たちの傍若無人な性行動をある意味で容認されていた地区である。秋林こずえは、歓楽街を「軍隊に性暴力はつきものという考えから地域社会が対策として基地周辺に性産業を設置し……性暴力を受ける女性たちと性暴力からは守られるべき女性たちという女性間の分断」を表象する場と論じた(秋林 2014: 61)。新開地の女性従業

者は前者である。彼女らは主に離島から呼び寄せで基地周辺に集住し、レイプやDV被害を受けた人々も吸収され、クラブ・キャバレーなどで就業したが、仕事は皿洗いはじめ何でもこなしたという。だが、後に自営業に転じた女性たちでさえ地元民からは、「寄留民のくせに」と見下されながら送金・貯蓄に励んだ（GK①からの聞き取り 2015年10月14日）。復帰の前に琉球政府が実施した管理売春の実態調査によると、金武町の数は一上位にあったが、実数はそれよりも多いとみられる（琉球政府法務局調査 1978: 775・786）。

次に復帰後における性産業分野をみると、金武町の女性従業者はより高賃金的那覇や本土へ移動し、1970年代後半にその後を埋めたのは、ブローカーの斡旋を受けて就業する外国籍女性であった。ここでは彼女らと地元民がどのような関係にあったかをみてみよう。

まず、新開地の就業時間は午後から夜中までであり、両者の交流は困難だ。外国籍女性を含む女性従業者は、生活上の買い物を新開地区内の個人商店を利用し、なかでも外国籍の女性はより安価で英語表記の商品を求める傾向から米軍基地内での購入を優先し、結局、地元商店街の利用は皆無だ。地域活動も彼女らの参加はなく、原告グループとは生活圏が異なる。彼女らはグローバルに展開する軍事基地と性観光業を結びつける「売春斡旋業者の国際化」に組み込まれた人々といえよう（Mies 1986=1997: 208）。

そして、多くの地元民は米軍人専用の歓楽街のことを語らない傾向がある。彼女らは観光ビザだけでなく労働ビザでも入国していたが、頻繁に転出入を繰り返し、経済的な階層分けによる差別的な対応の中で就業していたという。マリア・ミース（Maria Mies）は「東南アジアの女性が大々的な規模で最初に売春婦にされたのは、ベトナム戦争と太平洋地域にアメリカの空海軍基地が設置された状況においてであった」と論じるが（Mies 1986=1997: 210）、沖縄はその市場となっていたのだ。

ブローカーを通じて外国籍女性を雇用した自営

業者は、「手続き費用などを1人分一括払いするとすべてやってくれて面倒なことはなく、英語で接客もでき都合が良かった」と述べた（KNからの聞き取り 2015年1月13日・15日）。だが、1983年の火災事件で、彼女らのアパートが屋外から施錠されていた生活実態が明らかになり、復帰後も管理売春的な状況が続いていたことが判明した（「比国女性2人死ぬ」『琉球新報』1983年11月12日）。彼女らの相談事業を定期的に行っていたシスターによると、その後も居住環境は変わらなかったという（桐山 2019: 120）。そして1995年以後、彼女らは急速に撤退していった。

3. ウナイの会と女性従業者

裁判がはじまった頃は、新開地の女性従業者がいなくなった時期と重なる。ウナイの会と彼女らの関係をみると、女性従業者らは地元民と異なる生活圏にあり、米軍人から多くの性暴力を受けたが、そうした被害は地元女性も受け、町ではそのすべてに口をつぐんできた。女性従業者らが、地域から楯とされ露骨に差別される存在でありながら、彼女らの被害はひたすら隠されたが故に、同じ被害を受けた経験を地元女性たちも語ることが難しかったと思われる。

また、復帰後も米軍には占領意識が残っており、その上日本政府にも米国に対して顧慮する対応がみられ、性暴力被害を告発することが難しかったのではないかと。町の性暴力被害をめぐる女性たちからは、平井和子が論じる「女性たちは分断されているが故に、自分たちが軍事化を支えさせられてきた共通経験に気がつかない」側面が浮かび上がる（平井 2014: 222）。

他方、区内には基地維持によって増加した他出自男性への差別も潜在しており、軍用地料が高額になるにつれ、旧金武区民女性を介して彼らに入会団体の軍用地料が渡らぬようにする傾向が強まったと考えられる。だが、1995年以後に女性従業者がいなくなったことから、働く他出自出身世帯主が、金武区世帯の約7割にまで増加した（表2）。こうした区内の男性間、女性間の重層的な差

表 2 金武町：入会団体の会則改正による変容

事項／入会団体	金武入会権者会	並里財産管理会	屋嘉財産管理会	伊芸財産保全会
設立年	1956	1982	1989	1986
当初の会員比率	約54	73.0	66.5	86.4
当初の会則 ①居住開始要件 ②会員資格	① 1906年 杣山払い下げ当時の部落民で住所を有した者 ② 男子孫の世帯主	① 1946年時点で並里区に本籍を有した者 ② 子孫の世帯主	① 1906年 杣山払い下げ当時本籍又は居住し、杣山の使用権を有していた者 ② 男子孫の世帯主	① 1937年 杣山払い下げ代金完納時の部落民 ② 子孫の世帯全員
③ ④の会則改正前年の会員比率	30.8 (2005)	82.3 (1990)	45.9 (2005)	71.1 (2000)
④女子孫の処遇改善に関する変更点とその年	子孫の世帯主に2006	世帯主に関係なくすべての子孫が会員に1991	男子孫を年齢満20歳以上の世帯主に2007	子孫の世帯主に2001
すべての女子孫が会員資格を得た変更点とその年	世帯主の解釈2022	変更なし	世帯主の解釈2023	世帯主を削除→世帯の代表者2024
2023年の会員比率	50.7	73.9	35.4	75.0
区事務所への補助金	あり	なし	あり	あり
団体役員の女性数(2024年5月)	2/12	1/8	0/5	0/8

注：会員比率とは、会員数／区世帯数から算出した（％）。
出典：①区事務所への補助金と入会団体の会員世帯数は聞き取り（2017年7月25日から2025年1月30日）②区人口と世帯数は「令和4年度版 第9号 統計さん」2022年（2024年11月25日取得）。①と②により作成。

別構造の中で、新開地の女性従業者への差別意識を持っていた原告グループへの抑圧を成立させるには、働くよそ者、特に女性従業者が存在し続ける必要があったと推測される。

とはいえ、原告グループの幾人かは、1995年の沖縄米兵少女暴行事件の被害者をかばい通した人々と思われ、新開地女性に関する問いを含め性暴力被害に曖昧な表情で口をつぐむ。女性自営業者KNや旧金武区民男性GSらは、みんなよく働き互いにかばい合ってきたという。こうしたことから、町には性暴力被害を告発という点では一致できる複雑なつながりがあるように見える。

V. 女性を抑圧する慣習と地域

1. 金武入会団体会則の変容と裁判
(桐山 2019: 201-7)

金武入会団体の軍用地は、所有形態別でみると字有地と町有地である。両者の軍用地料は当初区

で管理していたが、字有地部分は1956年に区から分離し、金武共有権者会が設立され、後に金武入会権者会と名称変更し2000年まで続く。会則は明治民法下の1956年に作成され、会員資格は1957年の新民法以後も一貫して旧慣使用権を有する男子孫の世帯主であり、女子孫が会員資格を代行する場合は位牌継承が含まれた（金武入会権者会議事録 1986：1-9と2013年2月5・6日にNM①からの資料提供）。そして居住開始時期は曖昧であった。

町有地部分は、旧慣条例に則り金武部落民会が設立され、会員資格は1906年に旧慣使用権を有する子孫の世帯主とされていたが、実際の運用は男子孫の世帯主となっていた。金武入会権者会と金武部落民会は2000年11月に合併し、名称は金武部落民会を採用した。会員資格は旧慣使用権を持ち、現に金武区に居住する男子孫の世帯主で、居住開始時期を1906年とした。居住範囲は、当初金武区と並里区となっていたが、狭められ金武区

と記載され、女子孫と位牌継承の関係は継続された(金武入会団体からの資料 2013年2月5日)。合併の理由は「体質が全く同じ」であり、事務経費の節減のためともいう「金武部落民会会長の談話」『沖縄タイムス』2003年12月18日)。

居住開始時期を1906年に遡ったことは、「他出自出身者に入会団体の財産が渡らぬようにするためだったろう」とNM⑤は述べる(50代後半のNM⑤の聞き取り 2013年2月6日)。戦後金武町へ転入した人々は1906年の設定を不公平だと指摘する。

金武白山訴訟は、入会権で扱う財産権が慣習として世帯主である男子孫に限られるとする金武入会団体(被告)と、旧慣使用権を持つ世帯主ではない女子孫にも、同等な資格があると主張するウナイの会(原告)の争いとなった。加えて、ウナイの会は正会員資格を取得し、団体の運営に参画することを求めた。

判決は1審で男子孫が違法とされ、原告が勝訴し、2審の福岡高裁では世帯主を合法とし、入会権は「地方の慣習に根ざした権利であるから、そのような慣習が……なお存続している時はこれを最大限尊重すべき」とされ入会団体(被告)が勝訴した。2006年3月の最高裁判決も同様であった(福岡高裁2004年9月7日判決言渡:29)。

勝訴した金武入会団体は1審の敗訴を受け、2006年5月の総会で会員資格を男子孫から子孫の世帯主へ改正した。それは理事長NS③の奔走によるもので、居住区域は並里区も含むことに戻された。ウナイの会は敗訴し、女性差別は根本的には解消されなかった。

2. 軍用地料から女性を除外する構図

入会団体は、父系嫡男相続制など「慣習をかたくなに守ってきた」と記したが(「金武部落民会会長の談話」2003年12月18日)、沖縄のそうした慣習は17世紀頃から徐々に拡大し、明治民法(1898)に基づく制度が、門中制と「摩擦を起こさない形」で入り1903年以後広がった(桐山 2019: 29)。

ところが占領下の沖縄では、財産を「『女性が相続すると祟りがおこる』とする言説がより影響力をもつ」という、家父長制の再編がなされた(澤田 2016: 506)。背景には、1952年に明治民法下で軍用地料が地主等に支払われ、戦傷病者戦没者遺族等援護法により戦争未亡人など女性に遺族年金が支給されるようになったことを基にした新民法の施行がある。新民法は祭祀継承と財産相続を分けたが、沖縄では家督と財産が付随する祭祀継承を長男優先で男子が継承する慣習が地域の中で途切れなかった。「法規範が沖縄の慣習の前では無力だったことが原因」と論じられるが(波平 2016: 536)、言い換えればそれは、女性の経済力向上を阻み、地域や生活の中で男性優位に固執する力が強かったといえよう。軍用地料をめぐる女子孫差別はこのことに大きく関わる。

3. ウナイの会と自己決定

金武区で旧慣使用権を持つ女子孫は(当時、金武区全世帯の6%)、2000年の会則改正を契機に、男子孫の軍用地料配分が短期間で増額されたことから、2002年夏にウナイの会を設立し12月に提訴した。会は町外の政党や諸団体らの援助を受けず、裁判の結果に関わらず、この地で生きることを決意した女性たちである(桐山 2019: 218)。

とはいえ提訴後、県内外の弁護士や女性史研究者らが名乗り出て支援者となった。女性たちの要求は慣習の見直しを迫るもので、「女性の権利は黙っていては掴めない」と婦人会など地区組織では出来ない運動を個人主体のグループで行った(婦人会会長経験者KSからの聞き取り 2014年8月9日)。

彼女らは、働き続ける中で得た自信を基に、区内の村八分的な状況など忍耐を強いられる中、1995年の沖縄米兵少女暴行事件を経て高まった、地域運営を男性だけに任せておけないという気運を行動に移した。さらに原告らの多くが高齢期にさしかかり、退職したり配偶者が死亡したりするほか、共働きを続けてもおゆとりのない生活であったことがある(桐山 2019: 229)。

4. 慣習を見直す入会団体

金武町の金武・屋嘉・伊芸入会団体は、2022年4月から2024年1月までに、会員資格のうち世帯主の解釈を変更した(表2)。これにより、旧慣使用权を持つ旧金武・屋嘉・伊芸区民の子孫である男性と女性は、世帯主であるかどうかに関わらず、各入会団体の会員資格が得られることになった。その理由の共通項は、裁判係争中は「金目の問題」といわれたが、現在はジェンダー問題と認識されつつあるという。では、なぜこの時期に女性の権利に敏感になったのかについて、課題の整理をしたい。

金武入会団体は、2022年に規則を改正し、「その家の家族の意向で決定した代表者を世帯主と認める」とした。会員申請年齢は満20歳から25歳に引き上げられたが、これは財政上の負担軽減策と思われる。団体は、「裁判で勝訴したので、このままでも良いのだが、時代とともに社会環境が変化していることを踏まえ……慣習を見直し……先祖から受け継いだ財産を未来永劫守っていかなければならない。集中的に議論したのはこの2年位」という(金武入会団体からの資料提供と聞き取り 2022年11月9日)。

その後、2024年に設立以来はじめて女性理事2名が誕生した。選出方法は立候補制ではなく、推薦を得て総会で決定する。原告グループは、裁判後の総会で、時折女子孫差別の撤廃について発言していたが(桐山 2019: 229)、ウナイの会を応援していた女性によると、運動を継承し女子孫差別をなくそうとしたグループがあったという(GKからの聞き取り 2022年11月10日)。つまり、「諦めずに声を上げ続けた女性や、改革の必要性を訴えた男性がいたから見直されたのだ」(「権利求めた言葉の重さ」『沖縄タイムス』2022年10月21日)。

改正に関して町内には、金武入会団体が再び提訴されたら対応できる組織体力があるのだろうかという声がある。規則の見直しは入会団体の結束を強める要素があり、高齢化が進み組織強化の難しさがある中で、女性理事の誕生は体制強化の力

として期待されるだろう。変化した要因は他にもあると推測され、今後も調査を続ける。

屋嘉入会団体では、2007年に会員資格の男子孫を「年齢満20歳以上」と改正されたが、世帯主ではない女子孫は一代限りとされた。それが2023年の見直しで、性別と世帯主かどうかを問わず、すべての子孫が会員となった。また、屋嘉区と金武区では、死亡した会員の配偶者が一代限りの会員となり、軍用地料受領の資格が認められた。改正に至った背景には、「入会権は相続と違い、居住条件があるので必ずしも子どもに繋がっていかない……他出自の転入者が多くなる傾向が続いている」ことがあり、会則は「時代の流れ、空気に沿っていく」という(屋嘉財産管理会の聞き取り 2024年8月28日)。

また、会の運営に影響を及ぼす会長の強い勧めから、女性理事が誕生したことも重要だ(理事は5名で立候補制)。それは団体設立以来はじめてのことで、彼女は2019年に女子孫の権利獲得を求める明確な目的を持ち、2023年の改正後に理事を降した。その理由は団体の目的が「地域のため」というより、軍用地料の管理・運営であることから、地料の用途に特段異議がないからだという。女性役員は、並里区と伊芸区で時折選出されるが、金武や屋嘉では前例がなかった。

伊芸入会団体の会員資格は1937年から本籍を有し生活する者の子孫である。会員は他団体と異なり、1998年まで阻害賠償金(軍用地料のこと)の算定は、年齢・性別に関係なく旧区民全員の世帯に対する定額部分の均等割(世帯別)と家族の人数分が加算される人頭割(家族割)から構成されていた¹⁾。1998年以降の会員資格は世帯主となり、阻害賠償金は定額制のみとなった。2001年には総会などの議論を経て、会員資格は子孫の世帯主と改正された。この動きは字金武の軍用地料問題に呼応するものと思われ、当時、伊芸区では女子孫が世帯主となる傾向が生じはじめたという。その後も改正を繰り返し、2024年に会員資格における世帯主の字句は「会員家族を代表する者」と見直され消えた。

背景には、「会員の半分は女性で、子どもの数は増加中」であること、「評議員は立候補制でずっとやってきているが、近年は8名のうち2名が女性という時期もあった。女性をないがしろにできない」と女性からの提案を受け入れたとする（伊芸財産保全会からの聞き取りと資料提供、2024年3月6日・9月26日）。このように伊芸区にも世帯主の規定に違和感を持つ女性たちが存した。なお、町内の地域婦人会は、金武・伊芸・中川区は現在も活動中で、屋嘉・並里区は休止中であるが、近年、女性の金武町議会議員は1名から2名となった。

以上から、金武仙山訴訟の運動は裁判後も町内で継承されてきたことがわかった。そして、2点の課題が提示された。まず金武町のこうした女性の人権拡大傾向は、さらなる家父長制の変容を促すか、それは新開地の変化と関係するか。次に女性の政治的参画が、基地被害抗議や米軍人による性暴力被害への対応を変えるかである。

VI. おわりに ——生活問題を問う女性たち

金武町が海兵隊基地を受け入れた状況は複雑である。地域を主導する人々は諦め感を持ちつつも、一面積極的に動き、新開地を造成し、地域経済の立て直しと軍用地料の利益構造を形成してきた。その維持には、町役場、区と入会団体を構成する地域有力者らが、区を拠点に地域秩序をコントロールしつつ変化させ、戦前にはみられなかった他出自出身者への排他的な対応と家父長制による女性差別を再編・強化してきた側面がみられる。

それは、軍用地料を介して日米両政府による基地維持政策を支持する従属的な立場にみえるが、一括りにできない多様な立場がある。ウナイの会が地域を問うた訴訟、その後の入会団体の変化の様相は、こうした複雑な関係性を反映している。

またウナイの会は、軍用地料獲得という反基地運動と一見共存しないような立場の運動をたたかいつつ、町の基地被害抗議行動にも参加していた。それ故に、地域内の利害を超えて安全で安心

な生活の追求を発言できたのだろう。

この論点こそが、1995年以降にあらわれ軍用地料をめぐる運動が、女性史の中で引き継いだ課題と位置づけられる。それは金武町における政治的傾向の一つである、基地維持により軍用地料の権益を手放さず、基地被害に対して異議申し立てする姿勢に似ている。だが、その立場は演習場がある限り被害に抗議し続けねばならない。

そして、金武区的女子孫が1990年代末に軍用地料の獲得に立ち上がった背景には、1995年の沖縄米兵少女暴行事件や不況から地域経済が落ち込み、彼女たちも差別意識を持っていた外国籍の女性従業員がいなくなったという地域社会の変化もあるだろう。

以上のように、金武町の軍用地料をめぐる家父長制の強まりは、沖縄の後進性のあらわれとはいえず、基地維持政策と1990年代から本格化した経済のグローバル化という大きな社会変動が、相互に作用し、再編され続ける問題だ。

本稿は、軍用地料問題が基地を抱える地域の問題であることを導き出した。今後の課題は、近年変化してきた入会団体と地域社会が、生活に根ざした家父長的な女性差別の解消に向けてさらに変容するかを問い、性暴力被害は女性への人権侵害という立場から、出自や職業を問わず抗議の連帯が進むかを検討することである。それは再構成され続ける地域の知見を得ることにつながるだろう。

注

- 1 本稿で使用する沖縄とは、主として現在の沖縄県を指す。
- 2 沖縄米兵少女暴行事件は、1995年9月4日に北部地域で発生したキャンプ・ハンセンに駐留する米兵3名による拉致・強姦事件。被害者は12歳の少女である。この事件は、沖縄で復帰以後蓄積していた米軍人による性暴力被害への抗議や反基地感情を一気に激化させた。その結果、日米安保体制への影響を懸念した政府・メディア等からのバッシングに、沖縄が曝され続ける起点ともなった。

- 3 本稿は軍用地を持たない中川区に言及しない。
- 4 ウナイは^{ウチナーグチ}沖縄口で女姉妹。女・男子孫は1906年4月に旧金武村に居住していた男子孫の子孫。
- 5 沖縄の反基地運動は、アジア太平洋戦争末期以降の在沖米軍基地をめぐる諸問題に抗議する運動を指し、特に基地被害は民有地内に多くの米軍基地が存することから基地反対運動の大きな原因になっている(前田哲男ほか 2013: 66)。
- 6 入会権の主な性質は、①各地方の慣習に従う ②一定の部落に住むものがもつ権利 ③世帯がもつ権利 ④相続されない ⑤他人にゆずることができないである(中尾 2009: 14-6・34-36)。
- 7 琉球王府期に杣山と称された入会地は、王府の需要に応じて木材などを納めるが、日常の管理は地元任せられ、利用は無償であった。
- 8 天皇メッセージとは、「天皇は米国が沖縄、その他の琉球諸島に対する軍事占領を継続するよう希望しています」と、宮内庁御用掛寺崎英成を通じて、昭和天皇がGHQに沖縄の切り捨て容認の意向を伝えたことである(山極晃ほか 1990: 579-80)。
- 9 オフ・リミッツは、米軍当局が軍人・軍属・家族に対し、一定の民間施設の立入を禁止(制限)すること。コンディショングリーンとは「高等弁務官名で、米軍人・軍属らに外出禁止令を命じた特別警戒警戒」。主に、治安や衛生上の理由から発令される(以上は、沖縄市企画部平和文化振興課 1999: 282・284)。米軍は、1953年頃米軍人・軍属の健康のため厳しい風俗営業施設許可基準を設け、その基準に合格したバー・キャバレー・クラブ・飲食店・原料店に営業の許可を与え、米軍、軍属の出入りを許した。Aサインとはこの「許可」(approve)の頭文字Aを取ったもの(那覇市総務部女性室編 2001: 287)。
- 10 1980年代における金武町の収益は「軍用地料が18億円、社交業組合関係の収入が30-40億円。町の予算が40-50億円」となっていた(喜久村準ほか 1989: 105)。
- 11 沖縄の人頭税は、琉球王府が17世紀初めに課した税制度で1903年に廃止された。伊芸入会団体の人頭税廃止には、世帯人数による配分金額の差が目立ち不公平感が指摘されたという。

参考文献

- Calder, E. Kent. 2007. *Embattled Garrisons Comparative Base Politics and American Globalism*, Princeton University Press (武井楊一訳, 2008, 『米軍再編の政治学——駐留米軍と海外基地のゆくえ』日本経済新聞出版社)。
- Mies, Maria. 1986. *Patriarchy and Accumulation on a World Scale*, Zed Books Ltd. (奥田暁子訳, 1997, 『国際分業と女性——進行する主婦化』日本経済評論社)。
- Mohanty, Talpade Chandra. 2003. *Feminism Without Borders*, Duke University Press. (堀田碧監訳／菊池恵子・吉原令子・我妻もえ子訳, 2012, 『境界なきフェミニズム』法政大学出版局)。
- 秋林こずえ, 2014, 「ジェンダーの視点と脱植民地の視点から考える安全保障——軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」『平和研究』(日本平和学会)第43号: 51-68。
- . 2015, 「法による暴力と人権の侵害」島袋純・阿部浩己編『沖縄が問う日本の安全保障』岩波書店。
- 新崎盛暉, 2005, 『沖縄現代史 新版』岩波書店〈岩波新書〉。
- 栗屋利江, 1998, 『世界史リブレット038 ——イギリス支配とインド社会』山川出版社。
- NHK取材班, 2011, 『基地はなぜ沖縄に集中しているのか』NHK出版。
- 岡本恵徳, 1970, 「水平軸の発想」谷川健一編『沖縄の思想 叢書わが沖縄第6巻』木耳社。
- 沖縄県金武町企画開発課編, 1991, 『金武町と基地』沖縄県金武町。
- 沖縄市企画部平和文化振興課, 1999, 『米国が見たコザ暴動』沖縄市役所 ゆい出版。
- 『沖縄の米軍基地 令和6年5月』2024年(2024年11月23日取得), <https://www.pref.okinawa.jp/heiwaki-chi/kichi/1017273/1017274/1025057/1029383.html> 「権利求めた言葉の重さ」『沖縄タイムス』日刊25面, 2022年10月21日。
- 川瀬光義, 2013, 『基地維持政策と財政』日本経済評論社。
- 喜久村準ほか, 1989, 『どこへ行く、基地・沖縄』高文研。
- 桐山節子, 2019, 『沖縄の基地と軍用地料問題——地域を問う女性たち』有志舎。
- 金武入会権者会議事録, 1984, 「金武共有権者会沿革誌」。
- 金武町誌編纂委員会編, 1983, 『金武町誌』金武町役場。
- 「金武部落民会会長の談話」『沖縄タイムス』朝刊5

- 面, 2003年12月18日.
- 来間泰男, 2012, 『沖縄の米軍基地と軍用地料』榕樹書林.
- 澤田佳世, 2016, 「『家族計画』と女たち」沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編8 女性史』沖縄県教育委員会.
- 「都市型訓練危険性を訴え」『琉球新報』朝刊 31面, 2005年7月23日.
- 鳥山淳, 2013, 『沖縄/基地社会の起源と相克——1945-1956』勁草書房.
- 中尾英俊, 2009, 『入会権——その本質と現代的課題』勁草書房.
- 那覇市総務部女性室編, 2001, 『なは・女のあしあと——那覇女性史(戦後編)』琉球新報社事業局出版部.
- 波平エリ子, 2016, 「トートメー継承と女性」沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編8 女性史』沖縄県教育委員会.
- 野添文彬, 2020, 『沖縄米軍基地全史』吉川弘文館.
- 原田史緒, 2009, 「沖縄・金武入会権訴訟」第二東京弁護士会 両性の平等に関する委員会 司法におけるジェンダー問題諮問会議編『事例で学ぶ——司法におけるジェンダー・バイアス【改訂版】』明石書店.
- 「比国女性2人死ぬ」『琉球新報』夕刊 5面, 1983年11月12日.
- 平井和子, 2014, 『日本占領とジェンダー——米軍・売買春と日本女性たち』有志舎.
- 福岡高裁, 平成16年(ホ)第16号 地位確認請求控訴事件(原審・那覇地方裁判所平成14(ワ)第1195号), 平成16年9月7日判決言渡.
- 山極晃ほか, 1990, 沖縄公文書館「USCAR文書 天皇メッセージ」資料コード0000017550, 「資料203 駐日政治顧問部 W・J・シーボルトから国務長官あて」『資料日本占領1 天皇制』大月書店.
- 『令和4年度沖縄県市町村民経済計算(沖縄県市町村民所得)』令和7年4月公表、2022年(2025年6月2日取得), https://www.pref.okinawa.jp/toukeika/long-term/longterm_index.html#8
- 「令和4年度版 第9号 統計きん」2022年(2024年11月25日取得), <https://www.town.kin.okinawa.jp/material/files/group/3/toukeir4.pdf>
- 琉球政府法務局調査, 1978, 「沖縄における売春の実態調査」市川房枝編『日本婦人問題資料集成 第1巻 人権』ドメス出版.

掲載決定日：2025年5月13日

Abstract

Women and the Militarization of Common Land in Okinawa: From the Requisition of Collectively-Owned Land for Military Use

Setsuko Kiriya*

This paper examines issues concerning Camp Hansen lease payments and military bases in Okinawa since 1945 from the perspective of the local women's movement. It aims to understand the political and economic problems of women who live in the military town of Kin-cho, the focus of this case-study, and how their human rights are impacted. In particular, this paper examines the role military base land lease payments have played in restructuring the area. This reconfiguration is closely interrelated with Japan-US relations, income from military leases, and the regional movement. This is, therefore, also the history of the women rooted in the area.

Keywords: Okinawa, military bases, the rental income for the military land use, local community, women's movement

* Joint Researcher, Institute for Study of Humanities and Social Sciences, Doshisha University

男にとって化粧はどのような意味を持つのか

——ある男性の語りと実践を通じた基礎的考察

小口 藍子*

現代日本で男性の化粧実践（本稿ではメイクアップを指す）は稀有な出来事ではなく、拡大と定着の気配を見せている。既存の男性／男性性研究の枠組みは、男性や男性性を論じる際に構造やイデオロギーを早急に指定し、一人ひとりが男性として生きようとする実践を十分に捉えてこなかった。本稿は一人の化粧する男性に実施したインタビューと参与観察から、彼にとっての化粧実践の意味を明らかにし、男性として生きようとする実践の様相を探る。彼はジェンダー問題に関心を寄せながら化粧を始めたことで、それまで馴染んでいた男性同士の集団に居心地悪さを覚えるようになった。しかし同時に彼は男性の友人たちに化粧を施したり、同じく化粧する他の男性と交流したりしながら、化粧を通して男性たちとの新しいつながり方を模索する機会にも開かれる。彼にとって化粧実践は、これまでと異なる形で他の男性たちとつながり直す機会を彼にもたらすものである。

キーワード：現代日本、男性、化粧、インタビュー、つながり

1. はじめに

ジェンダー研究分野のひとつである男性／男性性研究 (men and masculinity studies) は、男性や男性性についての人々の認識がいかに社会的に構築されているかを明らかにしてきた。しかしながら既存の男性性理論の枠組みは、男性や男性性について検討する際、具体的な実践や出来事に先んじてイデオロギーや構造を足早に想定してしまうという問題を抱えてきた (小口 2024)。これを克服するためには、一人ひとりが男性としてどのように生きているのかを、当事者の生に深く根差しながら明らかにする研究が必要である。

これを行うにあたって本稿が着目するのは、現代日本の男性の化粧実践 (本稿ではファンデーションや口紅等を使って顔に彩色を施す、メイクアップの行為を指す) である。現代日本の男性の化粧実践は、その歴史社会的文脈ゆえに、男性ジェンダーの個別具体的な生を検討するうえで有効な題材である。

近代化から総力戦までの日本では、男性は兵士や労働者としての役割を果たすため、化粧を含む華美な装飾行為から遠ざかる傾向があった。しかし戦後になると、男性も着飾る行為に開かれる。男性化粧も1980年代頃から徐々に顕在化するが、近年までは安定した市場が形成されるほどではなかった。

しかし2010年代終わり頃から男性用メイクアップ製品の市場は大きな伸びを見せ (株式会社インテージ 2023)、男性の化粧実践は今や拡大と定着の気配を見せている。これは近代化以降「男は化粧しない」という通念が根強かったなかで、化粧と男性ジェンダーとの意味づけが変容しつつあることを意味するだろう。ゆえに男性の化粧実践には、男性として生きることをめぐる豊かな実践や語りがあることが予想される。

現代日本の男性化粧の研究では、製品開発にかかわる技術的な分析 (竹原・奥野・柴入 2021) も着手されるが、大きな関心を集めるのは、男性化粧

* お茶の水女子大学大学院

が既存のジェンダー関係にもたらす影響である。現代日本で外見を気にかける男性たちやそれを受容する女性たちを「男性中心的／ヘゲモニックな経済の攪乱にも再生産にもなり得る」とする飯田由美子 (Iida Yumiko) (2005: 71) の考察は、男性化粧をめぐる学術的な関心を端的に表す。

この問題関心にこたえる先行研究の見解からは、男性化粧が現行のジェンダー関係を大きく攪乱するというより、それを維持し得る形で普及する様が見取れる。ローラ・ミラー (Laura Miller) (2006) のメディア分析や平松隆円 (2009) の統計調査からは、男性の化粧実践が既存の男性性の様態と矛盾しない形で展開されることが指摘される。西岡敦子 (2013) はオンライン言説の分析を通して、ジェンダー規範から男性化粧を否定する意見も見られるものの、男性化粧を受け入れる土壌が形成されつつあると結論づける。しかし近年の実験調査では、男女平等意識の高さが必ずしも男性化粧の受容に繋がるとはいえない側面が指摘される (川野・徳迫・沢辺・日比野 2021)。山本梨華子 (2018) は化粧する男性3名に単発的なインタビュー調査を行い、彼らが化粧という装飾行為に開かれつつも、「男らしさ」の通念から装飾的な化粧を躊躇っていることを明らかにした。

しかしながらこれらの知見は、一人ひとりの男性の個別具体的な化粧実践や、それを取り巻く生の状況に深く根差して導き出されたわけではないことには注意が必要である。当事者のミクロな生活世界を検討することなしに男性化粧とジェンダー関係の結論を急げば、出来事に先立って構造を措定するこれまでの男性性理論 (小口 2024) と

同じ轍を踏むだろう。そこで本稿は、化粧する男性として生きる一人のひとの語りと実践から、彼にとっての化粧実践がどのような意味を持つのか明らかにすることを目的とし、男性として生きようとする個別具体的な実践を検討する。

II. 研究方法

1. 調査の概要

本稿の分析対象は、化粧する男性として生きるリョウタさんに実施した計3回の半構造化インタビュー、および筆者がリョウタさんに別のインフォーマント・ワタルさんを引き合わせた懇親会での参与観察である¹ (表1)。なお表1には記していないが、補足的に、筆者がワタルさんに実施したインタビューのデータも一部引用している。

ここではリョウタさんと筆者との関係、それに伴う筆者の位置性についても確認したい。筆者は知人の紹介を経てリョウタさんと知り合った。調査実施にあたって筆者はリョウタさんに、自身がジェンダー研究を専攻し、男性の化粧実践をジェンダーの観点から分析したいと考えていることを開示している。III.以降で論じるように、リョウタさんもジェンダー問題やフェミニズムに関心を持っている。つまりリョウタさんの語りは、筆者とジェンダー問題やフェミニズムへの関心を共有するなかで形成されている。

さらに本稿は「語り手とインタビューアーとの相互行為」 (桜井 2002: 28) を検討するのみならず、インタビューアである筆者を、語り手・リョウタさんの実践に関与するアクターとしても分析す

表1 分析対象

日時	実施内容	実施方法	記録方法
2022年11月30日	リョウタさんインタビュー	対面	ICレコーダー
2023年5月24日	リョウタさんインタビュー	オンライン	ICレコーダー
2024年3月13日	リョウタさん・ワタルさんの懇親会	対面	終了後、フィールドノートに記録
2024年3月22日	リョウタさんインタビュー	オンライン	ICレコーダー

る。先述のように筆者はリョウタさんに別のインフォーマントを引き合わせる積極的な関与をしており、そのことを本稿の分析対象にするためである。

2. リョウタさんについて

リョウタさんの語りと実践の分析に入る前に、彼のライフストーリーを概観する。

リョウタさんは1989年、5人きょうだいの長子として四国地方で生まれた。両親は共働きだったため、年の離れたきょうだいたちが小さかった頃は、おむつを替えたりお迎えに行ったりしていた。

リョウタさんは小学生のときにアメリカ同時多発テロ事件をテレビで見たことをきっかけに、戦争や外交に関心を持った。お笑いも好きで、中学校の学園祭では仲のいい男性の友人たちと集団コントを披露した。高校時代もクラスで気の合う男性の友人たちとにぎやかに過ごしていた。

高校卒業後は地元を離れ、関東地方の大学に進学した。キャンパス内の男子寮に住み、仲良くなった寮のメンバーたちと多くの時間を共に過ごした。国際関係への関心のもと、中南米への留学も経験した。その後は都内の大学院を修了したのち、現在は非営利法人の職員として働いている。

リョウタさんは大学院に在籍していた2019年頃から、日常的に化粧するようになった。彼が化粧に興味を持ったきっかけには、当時のパートナーの女性との関係がかかわっている。

ある日リョウタさんは動画サイトで、夫が妻の化粧にまったく気づかないという内容の動画を見て、彼がパートナーの化粧に気づかなければ、パートナーが彼の前で化粧する意欲を失うのではないかと考えた。それからリョウタさんは化粧品に意識を向け始め、自身でもスキンケアや化粧を始めた。

彼はふだん化粧するとき、化粧下地、ファンデーション、コンシーラーで肌の色味を整え、ペンシルを使って眉と髭の薄い部分を描く。肌の色を補整すると唇の色が薄く感じられるため、時

折、赤みを足すリップバームも使う。ここから想像できるように、リョウタさんの化粧は一見してすぐにわかるというより、よく見るとわかるようなものである。実際に筆者が初めてリョウタさんに会ったとき、筆者は彼が化粧しているかすぐに判断できず、その後の会話を経て彼が化粧しているとわかった。

III. 調査結果 (1)

——化粧で「ホモソ」とつながり直す

1. 「ホモソ」で育ってきたということ

III.では2022年から2023年にかけて実施した2回のインタビューから、リョウタさんが化粧を通して経験したことを明らかにしていく。1回目のインタビューで彼が繰り返し語ったのは、男性同士の関係性についての悩みであった。

インタビューの序盤では、リョウタさんがジェンダー問題やフェミニズムを知り、同時期に化粧を始めたことで、パートナーや友人の女性たちとのトラブルが減り、「すごい話しやすくなった」ことが語られた。それと対比されるのが、男性の友人たちとの関係である。

リョウタさんは男性の友人とほとんど化粧の話をしていない。さらに彼は、男性の友人と会うときには化粧を「敢えてして[行]かない」こともあるという。なぜなら男性の友人たちはリョウタさんの化粧にまったく言及しないいうに、その場で彼らの「男が化粧するなんて」という意識が「可視化されたら嫌」だからだ。

そのため彼は化粧を始めてから、「男性規範バリバリ内面化してる男性コミュニティ」に「居づらくなってる」と語る。II.2.のライフストーリーからも窺えるように、化粧を始める前のリョウタさんは男性規範を強く内面化した「ホモソサイエティ的なところ」に「ずっぱり」所属し、「すごい楽しいな」と違和感なく過ごしていたという。しかし今の彼は「ホモソサイエティ的なところ」に「男が化粧するなんて」という規範意識を感じ、居心地悪さを覚える。

以降、リョウタさんは男性同士の関係性について積極的に語り始める。「化粧するようになって変わったこと」という質問の答えのひとつにリョウタさんが挙げたのは、「男性同士のコミュニケーションの取り方」に対する価値観の変化であった。

リョウタさんによれば、「男性同士のコミュニケーション」では褒め合うことがなく、マウントや皮肉の応酬をし、「ボケて突っ込んで」「おもろい話」をすることが優先されるという。マウントや皮肉、「ボケて突っ込んで」というやり取りは、いずれも互いの中で優劣関係をつくりあげる作用を持つといえる。

伊藤公雄(1993: 167)は男性たちの「〈男らしさ〉へのこだわり」を、他者に優越したいという「優越志向」、自分の意志を他者におしつけたいという「権力志向」、できるだけ多くのモノを所有し、所有したものを自分のモノとして確保したいという「所有志向」の3つの志向性として説明する。男たちのこれらの志向性は、女との関係でより強力に作用するが、男同士においても作用する(伊藤1993: 168)。リョウタさんのいう「男性同士のコミュニケーション」は、このうち「優越志向」を行為遂行的につくりあげるものだといえよう。このようなコミュニケーションを楽しみながら「ホモソの中で育って」きたリョウタさんは、「ホモソ」の外でのコミュニケーションに困難を感じている。

リョウタ：僕、はやっぱりつい最近までは結構ホモソの中で育ってきてて、そういうのが全然なくて、やっぱ女性の友達が増える反面、そういうコミュニケーションの取り方が、すごいぎこちない。なんかこう、相手を褒めて、こっちも褒めてもらってとか、うーん、お互いをケアし合うような言葉とか、なんていうか、心遣いとか、雰囲気とか……自分に全然備わってないなっていうのが、すごい葛藤、葛藤っていうか、悩みというか。

「ホモソの中で育ってき」という語りは、先に引用した「男性規範バリバリ内面化してる男性コミュニティ」である「ホモソサイエティ的なところ」に「ずっぱり」入っていたという語りと重なる。リョウタさんは「ホモソサイエティ的なところ」を「ホモソ」という表現に移行させながら、「ホモソ」を、これまで育ってきた場所と位置付ける²。

リョウタさんの語りにおいて「ホモソ」のコミュニケーションは、女性たちのコミュニケーションと対照的に位置づけられる。ジェンダー問題への関心と共に化粧を始めたリョウタさんには女性の友達が増えたが、彼と女性たちとのコミュニケーションは「すごいぎこちない」。彼には「お互いをケアし合う」ような言葉や心遣い、雰囲気は「全然備わっていない」からであり、彼はそのことに葛藤や悩みを抱えていると語る。

III.2.では、リョウタさんの化粧実践と「ホモソ」との具体的な関係を明らかにしていく。

2. 突き放しと愛着のはざまで

インタビューでリョウタさんが「ホモソ」の例として語るのは、大学院時代に住んでいた寮の男性コミュニティだ。本来その寮では、会議のなかで寮の方針を話し合う決まりだった。しかし実際には、リョウタさんを含む執行部の男性たちが「ずっと朝まで煙草吸いながら話してる」なかで、寮の方針を全部決めていたという。

この状況に異議を申し立てたのは、寮に住む女性たちであった。リョウタさんは、寮で「妙に女性の意見が通ってなかったり」、女性が「ご飯用意したり」していることに女性たちが「文句」を言っているのを耳にした。その頃から彼は学内のジェンダーの勉強会にも出始めた。はじめは心理的な抵抗もあったが、徐々にジェンダー問題に関心を向けるようになったという。

それを経てリョウタさんは、寮執行部の男性たちの在り方を「なんかちょっと違ったな」と感じるようになった。リョウタさんはこのことを、寮の思い出を振り返りながら下記のように語る。

リョウタ：めちゃめちゃ男性コミュニティが仕切ってるみたいときは、ずっと煙草吸いながら、一箱二箱空けながら、朝まで議論(笑)みたいな。

*：アハハ(笑)。

リョウタ：それが、民主主義のあり方なんだみたいな(笑)。けどなんか、全然健康というか、自分の健康とかを敢えて気づかないとか、やっぱそういうのが皆ある、なんとなく内面化されてる。っていうのが、構造なんだなってわかると(中略)セルフケアが大事だと、お互いのケアとか、みたいなのところにも目が行って、とかそういう感じですね。だからまあ、そこと「化粧やスキンケアを始めたことが」リンクしてるところはかなりある。

リョウタさんは、彼を含めた執行部の男性たちが「ずっと煙草吸いながら」朝まで議論し、それを「民主主義のあり方なんだ」と思っていたことを笑う。彼は笑うことで「ホモソ」を突き放し、以前の自分や男性コミュニティをおかしなものとして筆者に提示する。筆者も一緒にこれを笑い、彼の突き放しの語りは強化される。

彼は続けて「ホモソ」の男性たちが自分の健康に「敢えて気づかない」よう「内面化」していることを、「構造なんだな」と理解できたと語る。さらにケアの大切さに目が向くようになったことは、リョウタさんが化粧やスキンケアを始めたことと「リンクしてるところはかなりある」という。リョウタさんは「ホモソ」の規範を「構造」の問題とすることで「ホモソ」を突き放し、自らの化粧実践を肯定する。

同時にこの語りからは、リョウタさんの「ホモソ」への愛着も読み取ることができる。彼は「ホモソ」の「構造」を笑って突き放すものの、彼の笑いからは「ホモソ」へのある種のあたたかなまなざしまでも窺える。

リョウタさんの経験と現代日本でタトゥーを介したネットワークを形成する若者たちの研究(山越 2022)とを比較すると、彼の「ホモソ」への突

き放しと愛着との混ざり合いが、化粧の特性に支えられていることがわかる。山越の調査によれば、若者たちにとってタトゥーを入れることは、タトゥーを入れれば加入できるコミュニティとタトゥーに否定的なコミュニティの「どちらかのアイデンティティを選びとらなければならない状態」(山越 2022: 297)をもたらす。

現代日本で男性化粧は少数派であるものの、タトゥーほど社会的逸脱とはみなされない。さらに重要なのは、化粧は「敢えてして[行]かない」ことで隠すことができることだ。II.2.で述べたように、一見わからないようなりョウタさんの化粧であれば、一時的にやめて隠すのもより容易い。リョウタさんは化粧を隠すことによって、化粧に否定的と予想される「ホモソ」に、居づらさを感じながらも出入りし続けられている。だからこそリョウタさんは「ホモソ」をめぐる、突き放しと愛着のはざまで葛藤する。

このような葛藤や悩みを語りながらもリョウタさんは、この状況を打破するために、他ならぬ化粧実践が有効ではないかという語りを紡ぎ始める。そのきっかけになったのは、彼が男性の友人に化粧を施したという経験の語りである。

3.「ドキドキ」する経験

III.1.やIII.2.で語られた「ホモソ」への葛藤について、筆者はリョウタさんに、周囲に同様の思いを抱える人がいるか尋ねた。彼はこれに「多分いないんじゃないかな」と答える。しかし直後に彼は「けど例えば」と言葉を繋ぎ、男性の友人に化粧を施した経験を語った。

あるときリョウタさんは彼を含む男性2人と、当時のパートナーを含む女性5人とで集まり、化粧やネイルを互いに施し合って遊んだ。そのなかで彼はその場にいたもう一人の男性にコンシーラーを施した。それは、男性の友人の顔に触れるという「肌の接触を伴う」経験であった。

彼はこの経験を、これまでの男性の友人との間では「全然なかった」ものだと振り返る。リョウタさんがこの経験を、彼の「ホモソ」への葛藤に何ら

かの形でアプローチし得るものとして筆者に提示していることが読み取れる。この語りを興味深いと感じた筆者は、リョウタさんにさらに詳しい感想を尋ねた。

リョウタ：あーすごいなんか、新鮮だったし、なんか……なんだろうな、ちょっとドキドキもしました(笑)けどね、やったことないっていうのもあって。けどすごい良かったな、とは思ったんですよ。(中略)[化粧を施したら]「ええ!?!」「こんな違うの!?!」みたいな(笑)。

*：アハハ(笑)。

リョウタ：めっちゃめっちゃ若くなったね、って皆で驚いて。だからすごい楽しかったっていう印象があって。

リョウタさんはこの経験を「新鮮」で「ちょっとドキドキ」するものでもあったと語る。さらにその場にいた女性たち「皆」の反応についても、臨場感あふれる語りで筆者に提示する。筆者も笑いを交えながらリョウタさんの語りに反応する。

この語りが両者に感情的な盛り上がりをもたらししたことには、日本では男性同士の身体接触が特に少ないという文化的背景があると考えられる。曹美庚(Cho Mikyung)(2016)は、日韓の大学生男女が家族や親しい友人と身体の中の部位をどれくらいの頻度で接触させているかを調査し、その結果と米国の結果(Jourard 1966)とを比較分析した。それによれば、日本の男子大学生が同性の友人から顔に触れられる頻度は、米国や韓国の男子大学生の結果より少なく、さらに日本女性の友人同士の結果と比べても少ない(曹 2016: 269)。

ただしリョウタさんと筆者は、男性同士の顔への接触行為の珍しさを単に面白がっているわけではない。リョウタさんと筆者は、この「新鮮」で「ドキドキ」する出来事に「ホモソ」を変え得るような可能性を感じ取り、感情的な盛り上がりを通してそれを共有している。

III.1.で述べたように、リョウタさんは「ホモ

ソ」で化粧習慣を隠しており、そこに居心地悪さを覚えている。だからこそ、男性の友人に化粧を施したエピソードは、「ホモソ」でのコミュニケーションとはどこか異なる「すごい楽しかった」ものとして語られる。このやり取りを踏まえ、インタビューの最後にリョウタさんは、週末に予定している男性の友人たちとの会合に化粧道具を持参して、化粧を勧めてみようと思うと語った。

後日筆者はリョウタさんから、その会合で男性の友人に化粧を施したという連絡を、その様子を映した写真付きで受け取った。2回目のインタビューでは、筆者はこの出来事の詳細を尋ねた。

4.「ホモソ」に化粧を持ち込む

リョウタさんは、その日の友人たちのことを下記のように説明する。

リョウタ：僕の大学[学部生]のときの学生寮の友達で、あのときの友達は。まあ男子寮だったんで、結構ホモソ感、というのがまあまああるところではあって。

彼らとは学部生時代の男子寮の友人であり、そこは「ホモソ感」が「まあまあある」コミュニティであった。つまりこの友人たちは、リョウタさんが育ってきた「ホモソ」を構成する男性たちだといえる。リョウタさんにとってこの試みは、化粧実践で「ホモソ」の居心地悪さに初めて挑戦するものであった。

この日リョウタさんは化粧して行き、会の途中で「最近メイクとかやってるんだよね」と切り出したという。さらに彼は化粧するのとしなないとでは「全然違うから」と続け、うち一人にファンデーションとコンシーラーを施した。「リアクションどうなるかわかんなかった」という彼の不安に反し、友人たちは「うわ、全然違うじゃん」、「いいねいいね」と肯定的な反応を見せた。会合の後、使った化粧品の詳細を尋ねる連絡を受け取ったともいう。

ここでは、リョウタさんが化粧を通して「ホモ

ソ」にはたらきかけるにあたって、単に化粧して現れて化粧習慣を打ち明けるだけではなく、日々実際に使っている化粧品を「ホモソ」に持ち込み、「ホモソ」のメンバーに化粧を施したことに着目したい。

このことは、化粧が他者と比較的共有しやすい行為であるために可能になっている。たとえばタトゥーや美容整形を誰かに打ち明け、それが肯定的に受け止められたとしても、その場でその人に同じ身体加工を施すのは難しい。求められる技能や設備の問題に加え、半永久的な身体加工であるほど、施すかどうかをその場で決断しづらいだろう。しかし化粧の場合、化粧品さえ持ち込めば、巧拙はあれどその場で化粧を施することができる。化粧はすぐに落とせるため、施される側の心理的な障壁も比較的低いだろう。

このような化粧の特性ゆえに、「ホモソ」の男性たちは、あたかも化粧していないかのように見えていたリョウタさんから前触れなく化粧習慣を打ち明けられ、さらにその場で化粧を施されるという経験に晒される。リョウタさんの一連の実践は彼ひとりのパフォーマンスではなく、「ホモソ」のメンバーの身体を巻き込みながら展開される。

「ホモソ」の男性たちはこの経験を「すごいいいリアクション」と共に受け入れ、リョウタさんもそれを「よかった」と語る。とはいえリョウタさんの「ホモソ」への葛藤は決して解消されたわけではない。

リョウタさんはその理由を、彼が一方向的に化粧したという構図にあると説明する。彼は自身が「そういう趣味の人(笑)、みたいな」状態だったと笑う。この語りからは、リョウタさんが「ホモソ」に化粧を持ち込んだことで、「ホモソ」の内部にいながらもどこか外部者としてまなざされるようになったことが読み取れる。

III.では、ジェンダー問題に関心を持ちながら化粧を始めたことで「ホモソ」への居心地悪さを深めたりリョウタさんが、「ホモソ」で化粧を打ち明けたり友人に化粧を施したりして「ホモソ」とつながり直そうとし始めたことが明らかになった。

続くIV.では、リョウタさんが同じく化粧する男性として生きるワタルさんと接したときのことを題材に、リョウタさんの実践をさらに具体的に明らかにしていく。

IV. 調査結果 (2)

——化粧する男性とつながる

1. 化粧する男性たちをつなげる

2024年3月、筆者はリョウタさんと、筆者の別のインフォーマント・ワタルさんとを引き合わせる懇親会を開催した。ここではまずその経緯を、特に筆者の意図に着目して確認したい。懇親会でのリョウタさんの実践を分析する際には、この会を設定してリョウタさんをワタルさんにつなげた、筆者の意図を踏まえる必要があるためだ。

III.でのインタビューを終えた筆者は、リョウタさんがどのように他の男性とかかわっているのか、語りだけではなく具体的な実践からも検討したいと感じていた。化粧実践で「ホモソ」が抱える問題に挑戦しようとするリョウタさんの語りを、筆者は興味深く聞いた。しかし同時にそれが、ジェンダー研究を専攻する筆者を前にした“模範的”な語りだとも感じていた。リョウタさんの実践をより実証的に検討するため、二者間のインタビューだけでなく、他の男性もいる場でのリョウタさんを見たいと考えた。

そこでリョウタさんにワタルさんを引き合わせたのには、2つの理由がある。はじめにワタルさんがジェンダー問題にも関心を持ちながら化粧する男性として生きているためだ。ワタルさん(1995年生まれ、会社員)は2018年から化粧を始め、眉やベースメイクのみならず、アイシャドウや口紅等のポイントメイクも積極的に楽しんでいる。ワタルさんは化粧のジェンダー規範意識を解消したいという思いのもと、自身の化粧をSNSで発信したり男性化粧のイベントを開催したりしている。ジェンダー問題への関心を同じくする二人であれば、心理的安全性が担保されやすいだろうと筆者は考えた。

表2 懇親会の会話内容

通し番号	主な話し手	内容
a	W・*	来るまでに何をしていたか
b	W・R・*	自己紹介
c	W・R・*	Wと*が出会った経緯
d	W・R	化粧を始めたきっかけ
e	W・R	化粧について、他の人と話をするか
f	W・R・*	男性たちの化粧のきっかけ
g	W・R	Wの情報発信や交流活動について
h	W・R・*	男性としてアイメイクすることの難しさ
i	W・R	最近の化粧のモチベーション・悩み
j	W・R・*	男性アイドル・男性俳優の化粧について
k	W・R・*	Rに似合いそうなアイシャドウ
l	W・R	男性として化粧することに迷いはあったか
m	W・R・*	男性のジェンダー規範と化粧実践との関係
n	W・R	勤務先に化粧して行くか
o	R	店員に褒められて高価な化粧品を買った話
p	W・R	男性はなぜ化粧に抵抗があるのか
q	W・R	外出時、どこで・どのように化粧直しをするか
r	W・R・*	男性は化粧を褒め合うか
s	W・R・*	Rの面接

筆者のフィールドノートをもとに作成。Wはワタルさん、Rはリョウタさん、*は筆者を表す。

次にリョウタさんとの交流は、ワタルさんにとってもメリットがあるだろうと想定できたためである。ワタルさんは男性化粧で起業することを目指して、男性にヒアリングを行ったり、SNSやイベントで化粧する男性たちと交流したりしている。そのためリョウタさんと話すことは、ワタルさんにとっても有用である可能性が高いと判断した。

懇親会当日、リョウタさん、ワタルさん、筆者は約3時間の間、食事をしながら歓談した(表2)。IV.2.以降では、懇親会でのフィールドノート、および筆者が後日リョウタさんに行ったインタビューを中心に参照しながら、彼がどのようにワタルさんとの関係性を築いたかを分析する。

2.「すごいフラットに話せたな」

懇親会の約10日後にリョウタさんに実施したインタビューで、筆者は当日の感想を尋ねた。リョウタさんは「すごい楽しかった」と始め、ワタルさんとは今まで会った人とは「レベルが違っていて話が合う」と振り返る。それは彼がワタルさんと化粧やジェンダーについての「問題意識」(表2通し番号h、l、p、r)や「ふだん感じてること」(表2通し番号d、e、i、k、n、o、q)を共有できたためだ。

リョウタさんは他の同年代の男性と比べて、ワタルさんとは「すごいフラットに話せたな」と振り返る。

リョウタ：最近、結構男性の、同年代ぐらい

の男性の方と話すとき、(中略) たまにこう引っ掛かりながら話すこととかも、なんかあったりするんですけど、(中略) そういうのは全然感じずに、なんかこう、すごいフラットに話せたなって。

リョウタさんが同年代の男性と話すときに感じる「引っ掛かり」とは、彼が化粧していることについて「そっち行っちゃうんだ」と反応され、「目に見えない壁」ができることを指すという。これはIII.4.で見た、リョウタさんが「ホモソ」の友人に化粧を施したときの「一方的な感じ」という語りに通ずる。

リョウタさんの「フラット」という感触を支えた背景には、単に化粧という共通点があることだけでなく、彼らがジェンダー問題に関心を持ちながら化粧していることがあると考えられる。これを捉えるうえでは、藤田智子(2005)による、現代日本の青年期男性たちの身体像についての聞き取り調査が参考になる。

藤田の調査によれば、青年期男性たちは「男らしい身体」を目指して行う筋力トレーニングや運動、食品摂取などの身体加工行為について互いに情報を共有している。しかし彼らが身体加工行為やそれについてのコミュニケーションを一緒に楽しむ場の存在は確認できないため、藤田は、男性にとって「あくまでも友人は競争相手であるともいえる」(藤田 2005: 94) と考察する。

ジェンダー問題への関心を共有するリョウタさんとワタルさんにとって化粧実践は、藤田(2005)の事例のように「男らしい身体」を競って獲得する行為というより、「男らしい身体」を価値づけるジェンダー規範に疑義を呈するものである。IV.1.で述べたように、ワタルさんは化粧のジェンダー規範意識を解消したいという思いを強く持つ。リョウタさんもワタルさんの考えに関心を示し、この思いを抱いたきっかけを尋ねると、ワタルさんは次のように答えた(表2通し番号l)。

ワタルさんは昔から、女性が好むものが好きだったり、「かわいい」と言われたりすることが多

かったが、周囲の人びとの反応に「男の子なのにね」というニュアンスを感じるがあった。以前は「そういうものだ」と受け入れていたが、徐々に、「男の子なのに」と言われること自体がおかしいと思うようになった。

これを聞いたリョウタさんは、彼自身はワタルさんほど「男性のなかでマイノリティ」ではないものの、野球やサッカーといった「男子あるある」に詳しくないため、ワタルさんと同様に「グラデーション的には少しマイノリティ寄りなのかもしれない」と答えた。

リョウタさんはワタルさんとの間に「グラデーション」的な差異を認めつつ、「男性のなかでマイノリティ」という位置性に連帯意識を感じていることが読み取れる。実際に彼らは男性としてアイメイクがしづらいこと(表2通し番号h)や、化粧直しをする場所がないこと(表2通し番号q)等の化粧する男性に特有の困難について、「確かに!」と頷き共感し合う。

このような文脈のもと、リョウタさんはワタルさんを「競争相手」(藤田 2005)ではなく、連帯意識や共感を通した「フラット」な関係性としてまなざすことが可能になる。リョウタさんにとってワタルさんとのつながりは、「優越志向」(伊藤 1993)をつくりあげるような「ホモソ」の振る舞いとは異なり、むしろそれを学び捨てる機会になっているといえよう。

3.「マイノリティというわけでもない」

では、IV.2.でみたようなワタルさんとの関係性を、リョウタさんは「ホモソ」と比較してどのように捉えているのだろうか。筆者はリョウタさんに、懇親会でのワタルさんとのやり取りは彼のいう「ホモソ」に「近かったか、あるいは遠かったか」と尋ねた。

リョウタさんは、ワタルさんとのコミュニケーションを「ホモソ」からかなり「遠かった」と評価し、さらに「すごい居心地がよかったな」と続ける。彼はその理由を、化粧という共通の話題があったこと、筆者とワタルさんとの「仲良さそう

な雰囲気」から筆者へのハラスメントの懸念が低いと判断できたこと、さらにワタルさんが「よく笑って」話しやすい人だったことから説明する。

他方で、リョウタさんがこの語りをまとめる際に言及するのは、ワタルさんがジェンダーをはじめ社会的な面で「マイノリティというわけでもない」という点であった。

リョウタ：[ワタルさんは] ジェンダー的にマイノリティ、向こうの方が社会的にマイノリティというわけでもないから、こっちとしてもそんなにこう、気兼ねなくというか。

*：あー、うんうんうんうん。

リョウタ：まあ歳……ちょっとまあ年齢の差があったとしても、こっちの発言でもものすごくないかインパクトを与えるっていうわけでもないし、そうっすね。

この語りからは、IV.2.ではリョウタさんが自身とワタルさんとの間に「グラデーション」的な差異を感知していたものの、最終的には二人を「マイノリティというわけでもない」男性同士として位置付けていることがわかる。男性同士という認識は、年齢の差よりも優先される。リョウタさんはワタルさんよりも6歳年上であるが、ワタルさんがジェンダーの面で「マイノリティ」でない以上、「こっちの発言でもものすごくないかインパクトを与えるっていうわけでもない」と判断する。

ワタルさんを男性同士とみなしながら、リョウタさんは、筆者を「女性」として位置づける。懇親会で彼は「女性ってどうやって[化粧を]始めてるんですか？」(表2通し番号f)、「女性はメイクでどういうところを褒めるんですか？」(表2通し番号r)と度々筆者に尋ね、「女性」としての発話を求める。

このようなリョウタさんのジェンダーカテゴリーの認識は、彼の言葉遣いにも表れる。リョウタさんは会の中盤頃からワタルさんに対して敬語がくだけ、時折「タメ口」が混ざった。ただし筆者に対して「タメ口」になりかけたときは、途中で

敬語に戻っていた。初対面でないうえに年下だが「女性」の筆者には敬語を使い、初対面であるものの男性同士のワタルさんに「タメ口」を使う様子からは、リョウタさんがジェンダーカテゴリーの同質性を強く意識していることが窺える。他方でワタルさんは、リョウタさんに対して敬語を使い続けていた。ワタルさんの側は、リョウタさんとの年齢差や、初対面の相手であることを意識し続けていたといえよう。

IV.2.では、リョウタさんとワタルさんの化粧を通じた関係性が連帯意識や共感に基づく、「ホモソ」とは異なるつながりであった側面を明らかにした。しかしリョウタさんは度々「タメ口」を使う一方でワタルさんは敬語を貫くという構図からは、二者の関係性が完全に「フラット」なわけではなく、「優越志向」(伊藤 1993) やさらには「権力志向」(伊藤 1993) がつくりあげられ得る側面が見えてくる。これはリョウタさんが、ワタルさんとは男性同士であるという認識を優先させ、年齢差や初対面であること、さらには彼らの間の「グラデーション」的な差異を棄却することで引き起こされる。

男性同士であるという強い意識は、リョウタさんが「ホモソ」への愛着を保持し、そこでの振る舞いを保ち続けていることを表すだろう。その意味で、懇親会でのリョウタさんの振る舞いは、完全に「ホモソ」から「遠かった」とは言い切れない。このことは、次のIV.4.で確認するように、リョウタさんも部分的に認識するところであった。

4.「笑っておしゃべり」できない

インタビューの終盤で筆者はリョウタさんに、ワタルさんとのコミュニケーションに「残るホモソ的な部分があったか」と質問した。リョウタさんは「ホモソ感」は「あんまりなかった」としながらも、「僕がこうだったらよかったのにな」と思うことがあると述べる。それは、自身の振る舞い方についてである。

リョウタさんは、懇親会に「ホモソ」とは異なる居心地の良さを覚えながらも、自分の価値観や

振る舞い方がこの場にふさわしいか確信しきれず、「普通に楽しそう」にすることが難しいと感じていたという。III.でみたように、リョウタさんはジェンダー問題への関心と共に化粧するようになった過程で、「優越志向」(伊藤 1993)をつくりあげるような「ホモソ」のコミュニケーションへの問題意識を深めた。しかし現在の彼は「ホモソ」の振る舞いを学び捨てる過渡期から「まだなかなか抜けられな」いため、「普通に楽しそう」に話することが難しいと語る。そのようなリョウタさんが自身と対照的にまなざすのは、ワタルさんが筆者と「普通に楽しそうに」「笑っておしゃべり」していた様子である。

リョウタ：ワタルさんと*さんとがすげえ、なんか普通に楽しそうに話し、なんか、笑っておしゃべり、してるのを見て、なんか、なんか、羨ましかったというか(笑)。

*：アハハ(笑) そうなんですか。

リョウタ：羨ましいというか、そう、そういう風にできたらいいなって、結構常々思うんですよね。

リョウタさんは「笑っておしゃべり」するワタルさんが「羨ましかった」と笑いつつ、「そういう風にできたらいいな」と常々思うと語る。続けてリョウタさんは自身の振る舞いから「堅さみたいなのところが抜けな」いのに対し、ワタルさんを「柔和」と表現する。

このことは、ワタルさんの側にも認識されていた。筆者は後日ワタルさんに懇親会の感想を尋ねた。ワタルさんは、リョウタさんとは化粧や美容への関心を共有していたため、学校や会社の知人たちに比べれば親近感を覚えたものの、彼がふだんSNSやイベントで交流しているような「美容界限」の雰囲気とは少し違ったとする。ワタルさんによれば、「美容界限」の人たちには、人当たりがよく物腰の柔らかい印象があるという。ワタルさんはリョウタさんの振る舞いを、「美容界限」の物腰の柔らかさとはある程度異なるものとして捉え

ていた。

懇親会においてリョウタさんはワタルさんと、化粧実践がジェンダー規範に疑義を呈するものになるという意識を共有することで、「ホモソ」とはある程度異なる形でつながることができた。ただしワタルさんの感想からもわかるように、彼らのつながりは決して強固でも排他的でもなく、ゆるやかなものである。

ここからは、リョウタさんが化粧実践と共に「ホモソ」の内と外を行き来しながら生きていることが見えてくる。リョウタさんは「ホモソ」の外で、女性たちや同じく化粧する男性とつながりながらも、一見わからない化粧をしたり敢えて化粧を隠したりしながら、「ホモソ」に出入りし続けることができている。換言すれば、リョウタさんは化粧を習慣化しながらも、「ホモソ」から完全に離脱することなく生きていける状態にある。そのためリョウタさんには、「ホモソ」の内でも歓迎される振る舞いも残り続けている。だからこそリョウタさんは「ホモソ」の外でも、伊藤(1993)のいう「優越志向」や「権力志向」を行為遂行的につくりあげるような「ホモソ」の振る舞いを表出させてしまう。

ただしリョウタさんは上の語りの後、自身の振る舞いの堅さを克服していれば、ワタルさんと「もっと話せたかもしれない」と続けていた。彼はこのことを決してつながりの失敗としてはみなさず、「ホモソ」の振る舞いをさらに学び捨てる展望を見出している。

V. 結びにかえて

——男たちをつなげ直すものとしての化粧

化粧する男性として生きるリョウタさんの語りと実践から見えてきたのは、彼が化粧実践を通して他の男性とのつながり直しに開かれる様相である。V.ではリョウタさんのつながり直しの試みにおいて男性の化粧実践が持つ意味を考察し、リョウタさんにとって化粧実践はどのような意味を持

つか、という本稿の問いに答えたい。

リョウタさんのつながり直しは、化粧が一時的な装飾行為であることと、男性の化粧実践がジェンダー規範に疑義を呈する実践になり得ることに支えられている。リョウタさんはジェンダー問題への関心と共に化粧を始めたことで、男性規範を強く内面化した男性コミュニティ「ホモソ」の外とのつながりに開かれる。

同時にリョウタさんは化粧を隠しながら「ホモソ」の内にも居続けられているために、化粧実践を通してこれまでと異なる形で「ホモソ」とつながり直そうとし始める。「ホモソ」で突然化粧していることを打ち明け、居合わせた友人に化粧を施す彼の実践は、「男が化粧するなんて」という「ホモソ」の規範意識を揺るがす。

さらにリョウタさんは同じく化粧する男性・ワタルさんとジェンダー問題への関心を共有し、共感や連帯意識を通してつながる。リョウタさんにとってこのつながりは、彼が「ホモソ」で身に着けてきた振る舞いを学び捨てる機会になった。

ただしリョウタさんのつながり直しには限界もある。彼は「ホモソ」に愛着を保持しながら出入りし続けるゆえに、「ホモソ」の外でも「ホモソ」の振る舞いを表出してしまう。そこで男性同士がまとめあげられ、「女性」が差異として有徴化される限り、リョウタさんのつながり直しがミソジニーとホモフォビアを基盤とする男性同士のホモソーシャルな関係 (Sedgwick 1985=2001) を生み出す可能性は決して否定できない。

しかしながら、リョウタさんの一連の実践は、彼が「ホモソ」の内と外とを行き来しているからこそ可能になっていることには重要な意味があると、筆者は考える。一見わからない化粧を「ホモソ」で突然見せて他者を化粧実践に巻き込んだり、「ホモソ」の外で「優越志向」(伊藤 1993) をつくりあげるコミュニケーションを学び捨てる機会に開かれたりするリョウタさんの試みは、「男は化粧しない」、「男は『優越志向』を持つ」という幻想を通した男性ジェンダーの反復行為を攪乱する、「ジェンダー・トラブル」(Butler 1990=2018)

の実践であるといえよう。

このようにリョウタさんの化粧実践はこれまでとは異なる形で他の男性たちとつながり直す機会を彼にもたらしめるのだといえ、これを本稿の問いへの答えとしたい。本稿の結果は、男性の化粧実践から、男性として生きるという現象を照らし出すものである。ただし本稿はあくまで男性の化粧実践の意味野に切り込む基礎作業であり、本稿の議論は男性の化粧実践のひとつの様相に過ぎない。今後は複合的な調査と分析を重ね、化粧しながら男性として生きるという現象を明らかにしていく。

謝辞

本調査にご協力を賜った御二方、棚橋訓先生、匿名査読者の御二方に心より御礼申し上げます。調査実施にあたっては、お茶の水女子大学ナガセ研究奨励金、JSPS 科研費 23KJ0959 の助成を受けた。

注

- 1 調査実施にあたっては、所属大学倫理審査委員会の承認を受けた(受付番号 2022-58、2023-53)。
- 2 リョウタさんの「ホモソ」という表現は、ホモソーシャル (homosocial) 概念と関連することが推測できる。しかし本稿では「ホモソ」を足早に学術的なホモソーシャル概念と同一視するのではなく、リョウタさんの語る「ホモソ」の意味に接近することで、彼の生活世界における化粧実践の意味を探りたい。なお日本の男性同士の関係性を扱う研究では、しばしばイヴ・コゾフスキー・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) のホモソーシャルの議論 (Sedgwick 1985=2001) が援用されるが、その妥当性は十分に検討されていない。すでに先行研究では、セジウィックの枠組みの限界が指摘されている (佐伯 2015; 星乃 2024)。

参考文献

- Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge. (竹村和子訳, 2018, 『新装版ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社).
- 曹美庚, 2016, 「身体接触における文化の影響」『阪

- 南論集——社会科学編』(阪南大学学会)第51号(3): 263-274.
- 藤田智子, 2005, 「青年期における男性の身体像に関する考察」『ジェンダー研究』(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター)第8号: 79-98.
- 平松隆円, 2009, 『化粧にみる日本文化——だれのためによそおうのか?』水曜社.
- 星乃治彦, 2024, 「明治末期における『男の絆』と軍隊——巖谷小波とドイツの性科学者たち」『アジア・ジェンダー文化学研究』(奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター)第8号: 21-31.
- Iida, Yumiko. 2005. "Beyond the 'Feminization of Masculinity': Transforming Patriarchy with the 'Feminine' in Contemporary Japanese Youth Culture." *Inter-Asia Cultural Studies* 6(1): 56-74.
- 伊藤公雄, 1993, 『「男らしさ」のゆくえ——男性文化の文化社会学』新曜社.
- Jourard, Sidney Marshall. 1966. "An Exploratory Study of Body-Accessibility." *British Journal of Social and Clinical Psychology* 5(3): 221-231.
- 株式会社インテージ, 2023, 「ポストコロナでも成長を続ける男性化粧品市場——2022年は5年前の1.5倍、23年上半期も前年同期比15%増」, 株式会社インテージホームページ, (2024年10月26日取得, <https://www.intage.co.jp/news/1786/>).
- 川野佐江子・徳迫栞・沢辺祐馬・日比野英子, 2021, 「男性化粧に対する現代人の意識とその社会的背景」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』(大阪樟蔭女子大学学術研究会)第11巻: 23-34.
- Miller, Laura. 2006. *Beauty Up: Exploring Contemporary Japanese Body Aesthetics*. University of California Press.
- 西岡敦子, 2013, 「男性の化粧は受け入れられるのか——男性の化粧行動から」『繊維製品消費科学』(日本繊維製品消費科学会)第54号(4): 332-338.
- 小口藍子, 2024, 「パフォーマンス・ヴィジュアルを援用する男性／男性性研究の考察——理論から展望へ」『Gender and Sexuality』(国際基督教大学ジェンダー研究センター)第19号: 1-22.
- 佐伯順子, 2015, 『男の絆の比較文化史——桜と少年』岩波書店.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. 1985. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia University Press. (上原早苗・亀澤美由紀訳, 2001, 『男同志の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会).
- 竹原卓真・奥野波留香・柴入陽, 2021, 「男性の魅力におけるメイクの効果」『日本顔学会誌』(日本顔学会)第21号(2): 61-70.
- 山越英嗣, 2022, 「関係性としてのタトゥー——千葉市でヒップホップファッション・ストアを営む若者たち」山本芳美・桑原牧子・津村文彦編著『身体を彫る、世界を印す——イレズミ・タトゥーの人類学』春風社.
- 山本梨華子, 2018, 「化粧から見る男性の美意識の変化」『早稲田社会科学総合研究』(早稲田大学社会科学学会)別冊2017年度学生論文集: 155-170.

掲載決定日: 2025年5月13日

Abstract

What It Means for a Man to Wear Makeup: A Basic Consideration Through One Man's Narrative and Practice

Aiko Oguchi*

In contemporary Japan, the practice of men wearing makeup has been expanding and gaining popularity. Past frameworks on men and masculinities tend to assume ideologies and structures in advance, lacking in the examination of the specific practices of each individual to try to live as a man. Through interviews and participant observation of a man who routinely wears makeup, this article investigates what it means for him to wear makeup and explores his practices of trying to live as a man. Since starting to use makeup along with an interest in gender issues he has felt uncomfortable with groups of men with whom he used to fit in. He recognizes they internalize gender norms against his makeup practice. He also finds it problematic that they underestimate caring communication and care practice including makeup. However, with makeup practice, opportunities have opened up to him to experience new ways of connecting with other men, such as putting makeup on his male friends and interacting with another man who also wears makeup. It is indicated that makeup practice enables him to reconnect with other men in a way that is different from that in which he previously connected with them.

Keywords: contemporary Japan, men, makeup, interview, connectedness

* Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

上野千鶴子、江原由美子編（有斐閣、2024年）

挑戦するフェミニズム ネオリベラリズムとグローバリゼーションを超えて

青山 薫*

新自由主義とグローバル化による困難な時代に「フェミニズムは生き残れるか」という、江原由美子の問い（江原2022）から本書は始まる。そして、フェミニストや女性だけでなく、人類が、生き残るために必要なフェミニズムの展開をめざす。江原の問いは、ナンシー・フレイザーの「フェミニズムは資本主義の侍女となってしまった」——グローバル化に伴う格差の拡大も、女性の貧困化さえも見逃し、一部のエリート女性だけが資源や選択肢や能力を獲得する新自由主義に加担した（Fraiser 2013=2019）という批判に対する反問でもあり、本書は、これをわがこととして受け止めた上野ほか各論者からの応答である。

上野千鶴子（第1章）は、『家父長制と資本制』（岩波書店、1990年）刊行後30年間の変化を論じ、グローバル金融資本主義の中で、プロレタリアートは「階級的主体になりえない」（35-38頁）プレカリアートとなり、南北格差は移民と使用者の差として国内にも存在するようになり、ジェンダー間格差も、女性間・男性間格差も拡大したことを指摘する。

これを受けて足立真理子（第2章）は、金融危機以降の「フェミニズムの相貌をもつ新自由主義」（70頁）と「再生産領域の金融化」（92-94頁）の関連をひもとく。家計・世帯に金融取引のメカニズムが浸透し、学費も年金も、ひいては再生産そのものも、労働力のコストではなく「投資」となる。同時に、男性の「短期で無茶な決定を諫め」（96頁）、投資のリスクを抑えることができる新たな女性像が創られる。

そこで伊田久美子（第3章）が、資本主義批判としてのフェミニズムを再評価する。第二波フェミニズムは、「妻」「母」でない一人称の女性主体を登場させ、性と生殖と女性の身体の解放を主張し、「私的領域」を劣位に置く近代国民国家に異

議を申し立てた（113頁）。3点を結ぶ「個人」は多様で、先進国中心主義に異を唱え、第三波に続くフェミニズムのネットワークと連帯を開いた。

岡野八代（第4章）にとっては、リベラリズムの価値を手放さず、ポスト構造主義におけるアイデンティティの構築も有効とするのがフェミニズムである。それは、「個人の選択」を促すリベラルな資本主義の複雑な抑圧構造を理解可能にする。例えば、母親「業」を疎外・搾取といった労働概念に関係づけ、「ケアの倫理」（148頁）へとつなげる。フェミニズムは、「個人の選択フェティシズム」（152-153頁ほか）を脱し、分かち合いの倫理を築いたのである。

しかし日本では、強固な「男性稼ぎ主型」生活保障が機能不全を起こしている。それを大沢真理（第5章）が明らかにする。ひとり親家庭の貧困率が非常に高いことより衝撃的なのは、0～4歳と25～29歳の女性で、国による所得の再配分を経て余計に貧しくなる点である。大沢はこれを、女性が働くこと、産み育てることに制度が「罰を科している」（178頁）と言う。「罰」は、家父長制社会におけるミソジニーの具現化である（184頁）。

山根純佳（第6章）は、ケアをめぐる新自由主義的改革とフェミニズムの関係に焦点を当てる。フェミニズムがめざすケアの「脱家族化」は、現在、低賃金と「再生産労働の国際分業」によって成り立っている。ケア市場の拡大と公共機関の民営化が労働者の待遇を悪化させ、ギグワーカーと移民を増加させている。無償ケアのために賃労働を制限される女性と、ケアサービスを外注できる女性の格差を広げている。フェミニズムは当事者運動と連帯し、ディーセントな家事・ケア労働を計画すべきだ、と山根は主張する（210-211頁）。

女性と子どもの貧困をデータで裏付けてきた阿部彩（第7章）は、配偶者「死別」女性と「未婚」

* 神戸大学国際文化学研究科教授

女性の貧困リスクに注目する。この30年余で「死別」女性の貧困リスクは高齢者で上昇し、かつて「看取り保証」(220頁ほか)とも呼ばれた「死別」への所得保証は弱まった。未婚女性の貧困率は就労世代で上がり、高齢者で下がったがいまだに4割ある。均等法に代表される労働市場改革は、ケア負担の少なさから男性同等に働けるはずだった未婚女性の利益にさえならなかったのである。

以上から、3号被保険者制度や遺族年金を批判して縮小・撤廃するのではなく、女性に対する防貧機能を認め、取り戻そうという阿部の結論(237頁)は発想の大転換と言える。

労働市場における格差と女性の関係については、金井郁(第8章)が検討する。1990年代以降、補助役だった女性労働者が能力発揮の主体とみなされるようになってきた。ここで、エリート女性だけのネオリベラリズムに抗するため、金井はアマルティア・センのケイパビリティ概念(Sen 1992=2018)を導入する。何かを実現するために、「個人の選択」ではなく、抑圧構造・権力関係を問題にするケイパビリティは、構造的変化のために集団的エイジェンシーを要請する。これによって女性は連帯し、格差を変革し得るのである。

佐藤文香と児玉谷レミ(第9章)は、女性兵士問題の新展開を見る。グローバル化と新自由主義の中の「新しい戦争」(264頁ほか)では、人道支援など戦闘以外の任務が増し、女性兵士の包摂が進行した。そこに、フェミニズムの知が取り込まれている。国家はさらに民間の軍事安全保障会社を使い、市場を通じて、軍隊のジェンダー化、人種化、階級化された権力構造を損なわない暴力も行使する。「新しい戦争」は交差的な格差を縮小させず、私たちはさらに批判的な知を模索するほかない(279-280頁)、と佐藤・児玉谷は結ぶ。

最終章では三浦まり(第10章)が、フェミニズムと新自由主義化の力学を改めて読み解く。まず、男女賃金格差が大きく女性管理職割合が低い日本で、新自由主義に加担した、とフェミニズムの罪を問うのは現実的でない。新自由主義によるジェンダー平等の道具的利用が、あたかも反女

性差別に見え、左派的な反新自由主義と右派的な「反・反差別」が共振することもある(298-299頁)。「個人の選択」によるトランスジェンダーの権利と女性の安全が対立させられ、反新自由主義と「女性を守る」名目のミソジニーに女性たちが取り込まれる例も、三浦は挙げている(300頁)。

このように、確かに困難な状況に向き合い真に迫る各章の、連帯の結節点はどこにあるのか。乱暴にまとめれば、新自由主義と対立するケア中心の社会を構想し、「男並み」の女性登用に引き込まれないこと、「母親罰」の撤廃とケアの権利をめざすこと、個人が生き延びるだけでなく、差別・抑圧の構造を変革するような集団的エイジェンシーをはぐくむこと、である。まさに人類が生き延びるために必要不可欠な結節点と思われる。

一方、本書に対する小さな不満を挙げるとすれば2点。やはり第二派フェミニズムが公のものにしたセクシュアリティの政治性について、フェミニズムをも揺るがすジェンダー二分法そのものに対する疑義について、ほとんど触れられていないことである。どちらも新自由主義とグローバル化に深く関わる。とはいえ、これらもふまえた挑戦と連帯を求めつつ、フェミニズムが今後も生き延び、必要とされる道を本書は照らしている。

参考文献

江原由美子, 2022, 『持続するフェミニズムのために——グローバリゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ』有斐閣。

Fraser, Nancy. 2013. "How Feminism Became Capitalism's Handmaiden - and How to Reclaim It: A Movement That Started out as a Critique of Capitalist Exploitation Ended up Contributing Key Ideas to Its Latest Neoliberal Phase." *The Guardian website*, Oct. 14, 2013. (菊地夏野訳, 2019, 「フェミニズムはどうして資本主義の侍女となってしまったのか——そしてどのように再生できるか」『早稲田文学』2019年冬号, 筑摩書房.)

Sen, Amartya. 1992. *Inequality Reexamined*. Russell Sage Foundation. (池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳, 2018, 『不平等の再検討——潜在能力と自由』岩波書店.)

ジュリア・セラーノ著／矢部文訳（サウザンブックス社、2023年）

ウィッピング・ガール トランスの女性はなぜ叩かれるのか

山田 秀頌*

目下吹き荒れているトランスジェンダーに対する嫌悪感情は、反動的な政治勢力と結びつくことで、女性とマイノリティの権利取り消しを正当化するために大規模に動員され始めている。本書の翻訳出版は、日本においてもトランスフォビアが激化する中、2022年にクラウドファンディングで企画され、目標を上回る270万円超という成果をあげたことで実現した。評者も微力ながら推薦メッセージを送り、支援した一人だが、トランスをめぐる状況がいつそう悪化していく世界情勢において、本書が読まれる必要はより高まっている¹。

著者のジュリア・セラーノは、トランス・アクティヴィズムとフェミニズムに関する代表的な論客の一人であり、本書だけでなく、*Excluded: Making Feminist and Queer Movements More Inclusive* (2013)をはじめ複数の著作をもつ。著者はオンライン上でも活発に発言するアクティヴィストであり、あらゆる論争的な主題について、問題を整理しつつ独自の視点から切り込んでいくスタイルで、自身のウェブサイト上にて数多くのエッセイを公表している。2007年に原書が出版された『ウィッピング・ガール』は、2024年には第三版も刊行され、著者の代表作であると同時にトランス・フェミニズムの主要著作の一つとみなされている。

本書は全20章にわたり、自身もトランスの女性である著者の経験が前面に押し出されている。「はじめに」で著者がいうように、トランスが自身の経験について書く場合、それは自伝であることが多い(27頁)。他方、専門家がトランスを研究対象として書く場合——その「専門家」は医者、心理学者、人類学者、社会学者、フェミニズム／ティア理論家であったりするのだが——そこでは往々にして、日常に根差したトランスの経験や視点は

消去されることになる。著者は、自身の経験に大きく依拠しながらも、経験をフェミニスト的な分析に接続する。それによって、「専門家」が流通させる一面的な理解(第七章・第九章)や、メディアによるセンセーショナルな描写(第二章)が、いかに偏ったものであるかをあばくのだ。

『ウィッピング・ガール』がトランス・フェミニズムの著作として位置づけられるのは、本書がなした理論的な貢献が大きい。レスリー・ファインバーグやケイト・ボーンスタインのような論客がトランスの抑圧の根源を性別二元論に見定めて以来、トランス・アクティヴィズムの目標は「ジェンダー二元制をぶち壊す」(36頁)ことだという考えが主流になった。本書はこの考えを相対化する。著者の分析によれば、自身のようなトランスの女性——女性としてのアイデンティティをもち、女性として生活する女性、あるいはそれを目指す女性——が、にもかかわらず様々な場面で差別に直面しうるのは、「ただ単に二元制的ジェンダー規範に沿った生き方をしていないから」というより、「女である」から、そして「女性性を表現しているから」である(267頁)。そして、トランスの女性が女性である／女性的であるために被る蔑視や排除を一般的なトランスフォビアから区別して、ミソジニーとして位置づける。ただし、トランスの女性が経験するミソジニーには、トランスが特に被害を受けるものもある。例えば、女性性はもとより人工的だとみなされているが、トランスの女性性はトランスであるという理由で殊更にニセモノであると軽蔑され、「ハイパーフェミニン化」される(42頁・70頁)。そこで、トランスであることと交差して働くミソジニーを、著者は「トランス・ミソジニー」と呼ぶ(41頁)。このような、トランスの女性が経験する差別を女性差別として問題化する姿勢こそ、『ウィッピング・ガール』

* 東京大学非常勤講師

ル』をトランス・フェミニズムの著作たらしめているものだ。

本書によるもう一つの理論的な貢献は、トランスに対する差別的な構造、枠組みや価値観を問うための用語としてシス概念を位置づけたことにある。伝統的に、「トランスでない人」を指示する言葉としては、生物学的な、遺伝的な、普通の、本物の、といった形容詞が用いられてきた。こうした「トランスでない人」を「標準」として位置づける用語に代えて「シス」を使うことで、トランスでない人々を優遇する社会をトランスの側から捉え返すことが可能になった。著者の「シスセクシズム」もまた、そうした捉え返しのための概念である(38頁)。本書は、いかに著者自身を含むトランスの女性の正当性が、トランスであることと、女性である／女性的であることの両方の理由で切り下げられていくのかを説明するために、独自の分析概念を次々と創出する。そのすべてをここで紹介することは到底できないが、一つを挙げるとすれば、第八章で詳述される「シスセクシュアル特権」だろう。最終章にあたる第二十章では、本書の結論として、トランス・アクティヴィズムとフェミニズムは「あらゆる形式の〈ジェンダー特権〉に注視し、挑みかかるべき」という見解が示される(386頁)。生まれつきの女性あるいは男性であるために、「誰が女で誰が男か正確に判断する能力と権限が自分にはある」(195頁)のだという特権意識は、そうした〈ジェンダー特権〉の一つであるに違いない。

本書が考案した「トランス・ミソジニー」の概念や、トランスの抑圧を分析する道具としての「シス」の位置付けは、その後のトランス研究にとって欠かせないものとなり、最近も注目すべき成果が生み出されている。前者の例としては、Jules Gill-Peterson, *A Short History of Trans Misogyny* (Verso, 2024) が、後者の例としては Emma Heaney ed., *Feminism against Cisness* (Duke UP, 2024) が挙げられる。

著者はフェミニンであることに誇りをもっており、フェミニズムは女性性をエンパワーすべき

で、「人為的産物」やパフォーマンスの地位に追いやるべきではないと主張する(第十九章)。生物学者である彼女は、女性性は単に「構築」されて押し付けられるものではない、と主張するにとどまらず、私たちには女性性や男性性へ向かう「内在的傾向」があって、それは脳にハードワイヤーされている(潜在意識下で自身のセックスの本来の在り方を理解している)と示唆する(第五章・第六章)。これは本質主義だろうか? ジェンダー研究者は、トランスを「ジェンダーの社会構築」の最良の例かのように想像する傾向にある。だが単純な社会構築の概念は、例えば出生時に男性の性別を割り当てられた人が「社会化の圧力の下で男性になる」ことは説明できても、「社会化の圧力があるにもかかわらず、女性になる」ことは説明できない。後者の主体化を説明するためには、社会化の圧力に抵抗する心理学的な領域が必要になる。著者によるジェンダー・アイデンティティ概念の分析(105頁以下)は、社会構築主義的なトランスの理解において切り落とされてきた、ジェンダー越境的な同一化における無意識の動因を再評価しようという試みとして理解できる。だが、その動因を脳に還元するのは、フェミニスト理論としては安易な道だろう。

著者による多岐にわたる批判は有用である反面、批判対象と同じくらいの単純化を免れていないのは気がかりだ。また、サンフランシスコのクィア／トランスコミュニティに根差す著者の問題意識には、アメリカ固有の文脈ではないかと思われる部分もある。おそらく読者の多くは、時に熱心にうなずきつつ、時に首を傾げて異論を言いたくなる気持ちに駆られるのではないか。だが、そうした読まれ方こそがフェミニズムの著作にはふさわしい。

注

1 評者による推薦メッセージは以下。

<https://greenfunding.jp/thousandsofbooks/projects/5658/activities/21568>

湯澤規子著 (角川書店、2023 年)

焼き芋とドーナツ 日米シスターフッド交流秘史

土屋 匠平*

本書は19世紀後半から20世紀の日本と19世紀初頭から20世紀のアメリカ合衆国(以下、米国)における女性たちの時間と場所を超えた「シスターフッド」を、「日常史」として〈食〉に着目し描き出すことを目的としている。筆者湯澤が愛知県一宮市の毛織物工場の女性労働者への調査を通じた高井としを著『わたしの「女工哀史」』(1980)と出会ったことが本書の出発点である。従来の女性労働史上の「正史」『女工哀史』(1925)の著者は高井(1902-83)の内縁の夫、細井和喜蔵(1897-1925)であり、その出版の約半世紀後に高井は女工としての経験を自らの筆により世に放ったのである。湯澤は、高井をはじめとする女工たちの生活と労働について「『わたし』という主語の獲得」(13頁)プロセスを描き出そうとした。『女工哀史』に関する先行研究は、著者が男性のため女性の多様な声が捨象され、男性視点で産業革命期の女性労働者の犠牲者イメージが強調されたことを問題視しており、湯澤は同じ問題意識を引き継いでいる。

本書が先行研究と異なる点は、「日常茶飯」(17頁)という枠組みを用いて、米国を先進モデルと定置しない日米比較・関係(「交流」)史(26頁)を目指したことにある。「日常茶飯」とは、育児や掃除、調理などと名付けられていない「取るに足らない」日常の行為を指す(18-19頁)。「茶飯」に着目する意図は、主食や三食を対象としてきた従来の〈食〉の歴史研究では見落とされてきた間食や喫茶などの食と食の「あいだ」(20頁)に意味を見い出すことにある。日常のありふれた合間にこそ「等身大の女性たちの日々や生身の人間としての姿」(17頁)が立ち現れるという筆者の視座は新たな歴史研究の扉を開く可能性があるだろう。

本書は日・米の二部構成で全八章からなる。第一章は、高井が10歳で岐阜県から(細井と出会う)東京市に移住し工場で働き始める様子を通し

て、産業革命期の急速な都市化と労働者の生活空間を描く。『女工哀史』では女性労働者たちが暮らす寄宿舎が「豚小屋」と表現されたが、湯澤は工場の食堂で形成されたシスターフッドに着目し、「個性と人格」を持つ女性たちの生き生きとした姿を描く。ストライキ時の寄宿舎内決起集会では、男性たちが「大文字の」(50頁)主張(労働環境の改善や賃上げ、自由の権利など)をした一方で、高井は壇上で日常の食事改善を訴えた。湯澤は高井の言動を社会に対する「等身大」の抵抗と解釈する(50頁)。

第二章は、20世紀初頭の女性の生活と労働の分離・再編を扱う。従来の女工史観では、資本主義下の過酷な労働環境によって女性労働者は自由を奪われて、分断され、組織的抵抗ができない被害者として捉えられてきた(63頁)。それに対して筆者は、女性労働者が賃金を獲得して集団生活の中で胃袋を満たしながら日常生活世界での喜怒哀楽の共有を通して、主体的に自由や権利を主張し、抵抗する側面を明らかにする。

第三章は、富山湾の魚津での「民衆暴動」としての「米騒動」の歴史観をジェンダーの視点から批判的に再考する。実際は「騒動」ではなく、「話し合いで済んだ」女性たちの嘆願であり(104頁)、その背景には魚津に長く根付いていた女性主体の社会運動と「女性たちの自治圏」(114頁他)が存在していた。しかし「騒動」との新聞報道が男性労働者を扇動し、各地での暴動に発展した。

第四章では、日本で女性労働者によるストライキが単発的な運動に留まった要因は、20世紀以降の女子教育の「挫折」(132頁)にあると説明される。明治前期の日米間女子教育思想の交流によって、「わたし」の主語の獲得を促す新しい女子教育の胎動がみられたが、明治中期以降には良妻賢母論の台頭によってそれが下火になったと論じら

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員(DC)

れる。

米国編に入る第五章では、17～18世紀の女性史を概観した上で、19世紀に女性作家が共和国の母思想(178頁)などの既存の女性像に囚われない「わたし」の生き方を発信し、作品を通じて「わたしたち」の共感が生まれるありようが論じられる。

第六章は、マサチューセッツ州ローウェルの紡織工場の女性労働者による出版活動と自己表現から彼女たちの「織機の間の知性」(209頁他)に焦点を当てる。寄宿舎の女性労働者の余暇活動(講義や展覧会、図書館での読書会や作文サークル、雑誌・新聞の講読など)を通じた「自己修養」の実践と女性同士の連帯や社交の様子が描かれる。ローウェルの工場で働いていたルーシー・ラーコムが残した詩では、工場の窓に貼られた新聞の切り抜きが「窓の宝石」と表現されていたことから、彼女たち特有の感性と工場内で文章を読む意欲に満ちていた様子を見出している(231頁)。

第七章は、パッチワークキルトを通して社会・政治的発信をした19世紀の西部開拓時代の女性たちを取り上げている。男性同様の労働が女性に求められる過酷な開拓の暮らしのなかで、キルト制作を通して、女性たちは心理的な癒しを得たり、新しく建てた家に彩りを与えたりしていた。開拓の暮らしでは女性間の友情や繋がりが重要であり、集団での縫製作業は女性間のコミュニティ形成に役立ち、奴隷解放運動などの社会運動や慈善活動で重要な役割を果たしたと筆者は指摘する。

第八章では、1871年にマサチューセッツ工科大学に初めて入学した女性で、学校給食制度や家政学の基礎を築いたエレン・スワロウ・リチャーズ(1842-1911)の個人史と、彼女の理念や実践を継承したボストンの女性組織WEIU (Women's Educational and Industrial Union) による都市の女性の移民や労働者への食・栄養調査や教育、支援活動が紹介される。WEIUは労働者階級と中産階級の女性たちによって組織・運営されており、筆者はそこに階級を超えた「シスターフッド」(313頁)を見い出している。

以下では全体的な意義と批判を述べる。各章の概説で見てきたように、これまで見過ごされてきた「日常茶飯」を通して女性たちの感情や経験、声を掘り上げ、過酷な労働環境下でも彼女たちが「わたし」という主語を用いて主体的に生きた様子を照射しようとした本書のアプローチは重要である。同分野では、生活思想に着目した女性史研究者の天野正子が、女性たちの個別的多様な生活経験や思想を内在・主体的に理解する方法を「ロウ・アングル」からのフェミニズムの視座としたが、本書もこのような流れの生活史の事例研究として共鳴するところがありそうだ¹。

その一方で、女性労働運動に関して日本は米国ほど盛んではなく、その要因は新しい女子教育の「挫折」にあるとされている点の実証が不十分であると言わざるを得ない。例えば、女性史の視点から日本の女子教育を研究してきた小山静子は、良妻賢母思想の啓蒙や再生産だけではない女子教育の史的理解の可能性を示している²。当時の女子教育を「挫折」と断定する前に、日常茶飯のリアリティを描き出すという本書の強みを活かして、当時の教育を受けた女性たちの「等身大の」声や経験をもとにした史料による精緻な分析や考察があってもよかったのではないか。

前著『胃袋の近代』(2018)で、筆者は〈食〉からの日常史を先駆的に展開し、新たな社会史研究の枠組みを提示し、歴史研究にインパクトを与えた。本書はそうした研究の系譜の上にありながらも、一般読者にも分かりやすく、女性労働の現代的問題にも接続できるように書かれている。読者は本書で登場する日米の有名無名の女性たちに共感し、「わたし」と対話し、時代を超えた「わたしたち」のシスターフッドを感じることができよう。

注

- 1 天野正子, 1997, 『フェミニズムのイズムを超えて——女たちの時代経験』岩波書店。
- 2 小山静子, 2023, 『高等女学校と女性の近代』勁草書房。

吉田容子、影山穂波編著（古今書院、2024年）

ジェンダーの視点でよむ都市空間

松岡 由佳*

本書をめくると、扉裏に *Understanding Gender and Urban Space from the Geographical Perspective* という英文タイトルが記されている。編者を含めた11人の執筆者は、いずれも地理学を専門とする。地理学とジェンダーの間にどのような関係があるのかと思われた方もいるかもしれないが、地理学の重要な概念である空間や場所には権力関係が刻まれており、本書の執筆者たちはジェンダーという切り口からその解明に取り組んでいる。章立てに沿って、本書の内容を順に紹介していこう。

第1章「なぜ地理学にジェンダーの視点が必要なのか」（吉田容子・影山穂波）は、ジェンダー概念や地理学におけるジェンダー研究の展開をまとめた理論的な章である。未知なる世界や自然を「客観的」に観察して記述するという伝統的な地理学の知は、男性によって形成されてきたものであり、女性は研究の主体にも対象にもなれなかった。その批判として1970年代に登場したのが、第二派フェミニズムの影響を受けた英語圏の女性研究者によるフェミニスト地理学である。目に見えるもの、地図に表せる事象を主に扱ってきた地理学において、空間に隠れた可視化しづらいジェンダー関係を取り上げることの意義を論じている。

第2章から第11章では、それぞれの執筆者が自らの研究をもとに考察を行っている。

第2章「労働とジェンダー」（影山穂波）では、日本で女性の社会進出を促す法整備がなされてきた一方で、性別役割分業を前提とした制度や就業構造のもと、雇用形態や賃金の男女格差が依然として残ることが指摘される。その上で、インドのチェンナイで働く日本人女性の事例をもとに、自由やゆとりを持ちづらい日本的な労働とは異なる働き方を考察している。第3章「地域社会とジェンダー」（関村オリエ）が論じるように、日本の都市空間には、男性は都心（生産労働の場）に通勤

し、女性は郊外（再生産労働の場）で家事や育児を担うという性別役割分業が明瞭に表れている。郊外ニュータウンに暮らす主婦たちが起業して活躍の場を得る例もみられるが、それは安定した家庭を基盤とする女性たちの生産／再生産の過重労働によって成り立っている。

第4章「ケア・サービスとジェンダー」（久木元美琴）では、女性労働力率の上昇とともに、特に都市部において保育や介護などのケア・サービスが不足してきたことが指摘される。これを踏まえ、公式統計には表れない「隠れ待機児童」やケア施設の立地問題、先進国におけるケア労働力の不足と「グローバル・ケア・チェーン」など、ケアをめぐる多様な地理学的視点が示されている。第5章「ジェンダーと視覚表現」（福田珠己）は、フェミニスト地理学者のジリアン・ローズ（Gillian Rose）による視覚表現研究の枠組みをもとに、コロナ禍の「ステイホーム」が親密で安全な場所として表現されていたことを批判的に検討する。その上で、ホームを女性的で私的な領域に位置づけようとする二元論的理解への問題提起を行っている。

第6章「ジェンダー化された空間の生産」（原口剛）は、単身男性労働者が集まる釜ヶ崎の変容を論じる。高度経済成長を支える安価な労働力として若い単身男性が流入し、バブル崩壊後はジェントリフィケーションの波が押し寄せた。その過程には資本主義とジェンダーが絡み合っていることを、アンリ・ルフェーヴル（Henri Lefebvre）の「空間の生産」論に依りつつ問題化する。第7章「政治権力とセクシュアリティ」（吉田容子）は、都市空間における遊廓の配置や売春街の形成をたどる。戦後に外国軍が進駐した呉市の事例からは、占領する側の権力や地方行政、外国籍の兵士たち、売春関係の業者や女性たち、そして市民といった多

* 名古屋大学大学院環境学研究科

様な差異や権力関係が重なり合いながら、女性の身体やセクシュアリティが管理されていたことが明らかとなる。

第8章「都市空間とセクシュアリティ」(須崎成二)は、欧米の都市にみられるゲイディストリクトや日本の新宿二丁目地区の事例から、それらの地区が同性愛者にとっての拠り所となっていることを論じる。その上で、レズビアン空間は、女性であり同性愛者であるという二重のマイノリティ性によって可視化されづらくなっていることを指摘する。第9章「移民女性の組織化と『場所』の創造」(阿部亮吾)は、在日フィリピン人女性の自助団体を取り上げる。フィリピン人女性が直面する家事・育児の過度な負担や配偶者からの暴力などの問題は、家庭という私的空間に閉じられてきた。そうした問題を公的空間に開くためには「中間的な場所」が必要であり、自助団体の活動場所がその可能性をもつことを論じる。

第10章「グローバル・サウスの女性労働とジェンダー」(太田麻希子)は、発展途上国の不安定就労やグローバル都市における低収入のサービス労働を女性や移民が担っている状況を問題化する。その上で、フィリピンの事例から、グローバリゼーションのもとでの女性就労がローカルなジェンダー規範に方向づけられていることを指摘する。第11章「異なる場所の異なる声をきく」(倉光ミナ子)は、サモアの事例をもとに開発とジェンダーについて考察する。サモアでは、兄弟たちより姉妹たちに高い社会的地位を与えるという慣習・伝統が存続しつつも、キリスト教化の過程で「夫に従う妻」という規範が受容されてきた。この事例が示すのは、具体的な「場所」の歴史や女性たちの声に基づいてジェンダー平等を考えることの重要性である。

地理学でジェンダー研究に取り組む日本の研究者は未だ少数派であり、主に地理学書を刊行してきた出版社から本書が上梓されたことの意義は大きい。読者には地理学やジェンダーに関心のある

学生が想定されており、各章末に添えられた文献案内や学習課題から、読者が興味・関心に沿って学びを深められる構成となっている。学生時代の評者は、ジェンダーという言葉に敷居の高さを感じていた。学問としてのジェンダーに出会うことも大切であるが、まずは身近な問題なのだという意識をもつきっかけが必要であると考え。本書のような初学者にも読みやすい書籍を通じて、身の回りに潜むジェンダーの問題をとらえるためのヒントが得られるように思う。その次のステップとして、研究のすそ野が広がることを期待したい。

また、本書の末尾には補章「フィールドワークにおいて注意すべきこと」(杉江あい)が設けられ、フィールドにおける調査者の立ち位置が研究に与える影響や、フィールドで起こりうるハラスメントの問題に触れている。こうした調査・研究のプロセスは、地理学ではこれまで十分に検討されてこなかった問題であり、ジェンダーの視点を活かしつつ議論を深めていく必要があると思われる。

本書で惜しまれる点としては、執筆者の間でジェンダー概念についての考え方や問題意識に違いがあるように感じられ、全体を踏まえたまとめにあたる章も設けられていないことから、本書を通じたメッセージをどのようなものとして受け取ると良いか少し戸惑った。もっとも、ただ一つの声へと集約せずに、つねに多声的であることが、ジェンダー研究においては重要かもしれない。もう一点、都市を鳥瞰するような表紙写真が気になった。都市空間におけるミクロな権力関係を扱う本書の内容とは相容れないように思うが、「どこでもない場所 nowhere」から研究対象をとらえてきた従来の地理学への批判が込められているのだろうか。写真の着色は、都市空間へのまなざしが無色透明で中立的ではなく、男性中心主義というレンズを通したものであったことを表すのだろうか。

吉村さやか著（生活書院、2023年）

髪をもたない女性たちの生活世界 その「生きづらさ」と「対処戦略」

合場 敬子*

著者は本書の冒頭で「髪をもたない女性たちの経験は、調査者にとっても被調査者にとっても聞きづらく語りづらいことと捉えられ（中略）、研究の対象として焦点化されてこなかった」（10頁）と指摘している。当事者であるがゆえに、調査の過程で著者自身も困難を感じながら、しかし「聞きづらく語りづらい」調査上の困難を乗り越え、「髪をもたない女性たちの経験」を読者である私たちに届けているのが本書である。また著者自身が調査を進める過程で経験した困難も補論1で明らかにされている。それは著者自身が髪をもたない当事者であることにより「調査を始めるまで秘匿化し、ながらく言語化することのできなかった発症以降の経験」（18頁）から生じた困難である。そしてこの補論1が本書を非常に稀有なものにしている。

2012年からおよそ7年をかけて、「円形脱毛症を考える会」という当事者団体に、著者が当事者会員として参加し、丁寧なインタビューを基礎にしたライフストーリー調査法を使いながら、当事者である聞き手（著者）と語り手が今まで経験してきたお互いの「生きづらさ」を言語化し、それを軽減・解消しうる対処戦略——「ウィッグ生活」（第2章）、「このゆびとまれ」（第3章）、「さらす」（第4章）、「スキンヘッド生活」（第5章）——を考察している。「病気」というスティグマを隠蔽することを「パッシング」と定義した上で、「ウィッグ生活」は「パッシングによって生じる問題経験を『病気』や『障害』という社会問題として承認しやすい文脈ではなく、多くの女性たちが日常的に感じている『身だしなみやおしゃれの面倒さ』という文脈に位置づけることによって、『生きづらさ』を軽減／解消」（60-61頁）しようとする対処戦略である。「このゆびとまれ」の戦略は、当事者が経験する「生きづらさ」は個人的問題ではな

く社会問題であると意味づけし、「当事者同士のネットワークを形成し、クレーム申し立て活動を展開」（108頁）する戦略である。「さらす」は、円形脱毛症という病気を広く正しく知ってもらうために、「啓発活動の場ではかつらを外し、髪をもたない姿を『さらす』ことを通して、クレーム申し立て活動を行」（111頁）う戦略である。さらに、啓発活動の場以外の日常生活でも、かつらは使わずに、「髪をもたないままの姿（まだら頭・たまに剃ってスキンヘッド）」（167頁）で生活する戦略が「スキンヘッド生活」である。「ウィッグ生活」以外の戦略は、当事者が経験する「生きづらさ」を、個人的問題ではなく社会問題であると意味づけていることが明らかにされている。

筆者は女子高生の体毛の除去について考察（合場 2022）をしたことがあるので、円形脱毛症の女性たちの「髪」に関わる「生きづらさ」と、筆者が調査の過程で出会った、非常に肌が弱い「体毛」を除去できない女子高生「恵」（仮名）の「生きづらさ」に共通点を見出した。本書の「ウィッグ生活」という戦略をとる髪を持たない女性たちは、「身だしなみやおしゃれに配慮しながら、『女らしく』生きる」（59頁）ために、ウィッグをつけている。なぜなら彼女たちにとって、頭に髪があることが自らの女性性の表示において重要だと認識しているからである。一方で、恵は「女の子」として体毛が無いことが望ましいことだとは知っていたとしても、生理的な理由で体毛を除去できず、そのままにしていた。つまり両者が示しているのは、女性性が、「毛」は女性身体の頭にあるべきであるが、頭以外の女性身体に「毛」はあってはならないということで構築されている点である。同じ毛であるのに、生えている場所によって異なる評価を与えるという奇妙な規範が、日本を含む多くの社会で女性身体に対して働き、それにより女性の

* 明治学院大学国際学部教授

「生きづらさ」が生まれている。

このように女性性と髪の関係は本書の議論において重要な点であるが、その部分の説明が不十分である。本書では、英語圏の文献において、「古今東西を問わずいにしえの時代から、髪は女性性や女性美のシンボルと捉えられてきたことの確認作業がなされている」(12頁)と説明され、その具体例である図0-1は『『女性にとって髪は重要』であることを示す資料の例」(13頁)として掲載されている。しかし、細かい字で英語の文章と写真が表示されているのみで、内容を読むことが困難である。さらに著者は日本社会には『髪は女のいのち』といわれる根強いジェンダー規範」(10頁)があると主張しているが、この「根強いジェンダー規範」が日本社会においてどのように構築されたのが説明されていない。これはたぶん著者の他の論文で探求されているのかもしれないが、本書でも必要だったと思う。

さらに、「ウィッグ生活」という戦略をとる女性たちが経験している「身だしなみやおしゃれの面倒さ」を「ジェンダー役割のもとで女性一般が感じる『生きづらさ』」(209頁)と説明しているが、これは適切ではない。なぜならジェンダー役割を、筆者は211頁で結婚、出産、子育てと定義している。だとすれば、女性が特定の外見を表示することが望ましいとされ、そのために身だしなみとして化粧をしたり、脱毛したりすることを奨励されることで「面倒さ」を感じることは、ジェンダー役割が生み出す問題として把握するよりも、望ましいとされる「女性性」や「美」の規範との関係で説明したほうが適切である。実際、著者は表5-1(196頁)で、「ウィッグ生活」と「スキンヘッド生活」の対処戦略と「女性性」との関係を示し

ているが、「このゆびとまれ」と「さらす」という対処戦略と「女性性」との関係は明示していないので、それらをこの表に是非加え、考察してほしい。

終章では、著者が立脚する障害社会学が、「障害学とその主流的視角とされてきた障害の社会モデルに対する『反省』」(219頁)のもとに誕生したと説明されているが、両者の違いが専門外の筆者には分かりにくかった。特に、「国連・障害者権利条約」や「障害者差別解消法」などの成立は、障害の社会モデルの成果であると指摘されているが、もう少し具体的に説明してほしい。一方で、障害の社会学モデルがアクティビストとしてクレーム申し立てをする当事者に焦点を当てるのに対して、障害社会学がアクティビストとしての側面だけでなく、「可変的、且つ、流動的で、さまざまな属性とともに生きる、一生活者」(221頁)の側面にも光を当てることを行っているという点は理解でき、その生活者としての側面を本書は生き生きと描きだしている。

筆者は本書によって円形脱毛症という病と、それによって髪を失った女性たちが多様な戦略を駆使しながら、日常生活を生きていることを知ることができた。本書は、著者がインタビューした多くの女性たちが持っていた、円形脱毛症という病を広く正しく知ってもらいたいという願いを実現することに大きく貢献している。一人でも多くの人に本書を読んでほしい。

参考文献

合場敬子, 2022, 「無毛化する女子高生の身体」『女性学』(日本女性学会)第30号: 52-72.

平山亮、佐藤文香、兼子歩編（勁草書房、2024年）

男性学基本論文集

川口 遼*

本書は、英語圏の男性性に関する基本論文を編んだものだ。本書の構成は、男性性概念に関する議論動向をレビューする巻頭言の後に、「I ミクロな社会分析としての男性性」、「II マクロな社会分析としての男性性」、「III 軍隊・戦争研究のなかの男性性」、「IV 歴史学のなかの男性性」が続くものとなっている。

まず、平山亮による巻頭言「男性性役割の社会化から、男性性による不平等の正当化へ」は、冒頭に示した本書の性格を示すマニフェスト的な役割を果たすとともに、収録された論文が書かれた学術的背景を読者と共有する役割を担っている。具体的には、「男性『かくあるべし』という男性性役割ではないものとしての男性性概念とその意義」（16頁）について、「ヘゲモニックな男性性」概念が、時に多様な用いられ方をしながらも、男性性が性の不平等を正当化する働きをすることに焦点を当てることで、ジェンダー研究に貢献してきたことが確認される。

続いて、Iでは解説「『男をつくりあげる実践』から、性の不平等を腑分けする」とともに、「1 男性、男性性、そして援助要請の文脈」、「2 ハイブリッドな男性性——^{メン}男たちと^{マスキュリニティーズ}複数の男性性に関する社会学の新しい方向性」、「3 ヤワなペニスを硬くして——高齢男性の生活に見られる年齢・階級・ジェンダーという社会関係」が訳出されている。1は、一般によく知られている「問題に直面した男性が支援を求めない傾向」について、その傾向が既存の男性規範や役割の社会化によって一定程度影響を受けていることを認めつつ、それでも生まれる男性個人間および男性個人内の多様性を指摘し、男性性の社会心理学が性役割の社会化と男性性の社会構築の両方に注目することを促している。2は、女性的とされてきた要素を取り込む形での男性の言動、外見、価値観等の変化を「ハイブリッ

ドな男性性」として概念化する研究群をレビューするものである。そこではこの研究群が、表面上の男性性の変化を、権力と不平等のシステムそれ自体の変容というよりも、その正当化の方法の変容と解釈してきたことが確認される。3は、男性性研究においては、若年男性の経験に重きを置く傾向をエイジズムと批判しつつ、高齢男性に関する研究には、男性たちがいわゆる「理想の男らしさ」をどれだけ懸命に追求しているのかや、男らしさの再定義をどのように始めるのか、といったことを明らかにする可能性があることを、「サクセスフル・エイジング」（84頁）を称揚する広告等の分析を通じて示している。

IIでは、冒頭の解説において、まず日本における男性性をめぐる研究史の特徴として「唯物論との関係の『希薄さ』」（113頁）をあげつつ、グローバルな資本主義の展開と男性性の変容の関係を視野に収めるという趣旨が示された上で、「4 新自由主義的メリトクラシーにおける白人労働者階級の少年たち——『アスピレーション向上』アジェンダの落とし穴」、「5 グローバルな文脈における男性の実践とジェンダー関係を研究する」、「6『ヘゲモニックな男性性』から『男性のヘゲモニー』へ」が訳出されている。4は、若者、特に若年男性の学校から職場への移行の失敗が問題となる中、彼らのアスピレーションを掻き立てることによって対応しようとするイギリス政府のとり政策が、結果として「真の原因である経済的、社会的、文化的資本の不平等な配分という問題を覆い隠してしまう」（123頁）ことを論じるものである。5は、グローバル化と男性性の変容をテーマに、男性の暴力、男性の家庭内での実践、男性の健康等について国境を越えた分析を行う書籍の序論の訳であり、エスピン＝アンデルセンらの議論および女性の経験に対してトランスナショナルなアプローチ

* 東京都立大学人文科学研究科客員研究員

を取る研究群を念頭に、男性性研究における比較社会分析の可能性を提案している。6は、この分野の最重要概念である「ヘゲモニックな男性性」概念に、どうしても特定の男性集団の特性や「理想の男らしさ」といった理解がまわりつくことを嫌い、代わりに「男性という社会的カテゴリーへの権力の付与およびそれに対する同意調達がなされている状態『男性のヘゲモニー』」(118頁海妻による解説におけるまとめ)の利用を訴えるものである。

IIIでは、軍事的／軍事化された男性性概念を用いるフェミニスト国際関係論や軍事社会学などの研究動向を抑える解説の後、「7 防衛専門家たちの合理的な世界におけるセックスと死」、「8 ヴェールに隠された参照項——九・一一後アフガニスタン攻撃に関するブッシュ政権の言説におけるジェンダー構築」、「9 国際関係における軍事化された男性性」が訳出されている。7は、「精神の軍事化のメカニズム」(225頁)——例えば「安全に使用できないような種類と数の兵器を保有すること」(201頁)といった非合理の合理化が、深くジェンダー化された「彼ら(引用者注：防衛専門家たち)の使う言語を学び、彼らの情報や議論になじむ」(202頁)なかで果たされていくことを、防衛専門家たちのコミュニティに参加する機会を得た筆者自身の経験をもとに論じるものだ。8では、2001年のアメリカによるアフガニスタン攻撃が少女と女性を「テロリスト」から守るというレトリックによって正当化されたことを例に、「『ネイション』および『敵』の支配的な言説的構築が、ジェンダーに関する既存の文化的語りを参照することを通して(再)生産されている」(251頁)ことが論じられる。9では、関連する議論をレビューしながら、フェミニストらによる暴力を終わらせようとするプロジェクトにとって「軍隊の内部とその外部における男性性の構築に焦点をあてた二重の戦略」(265頁)、すなわち「軍隊その他の軍事的制度内部における軍事化された男性性の再構築の試みを支援すると共に、より広い社会における男性性を脱軍事化する方法を探る」(265頁)ことの重要

性が主張される。

IVでは、男性史あるいは男性性の歴史学的研究の研究史を概観する解説ののちに、「10 男性性、身体化された男性労働者、そして歴史学者のまなざし」、「11 キリスト教的兄弟愛、あるいは変態性欲?——第一次世界大戦期の同性愛アイデンティティと性的境界の構築」、「12 ジェンダーと帝国主義——一九世紀末ベンガルにおける植民地政策と道徳的帝国主義のイデオロギー」が訳出される。10は、労働者階級のジェンダー史の「身体論的展開」がもつぱら女性のセクシュアリティ、外見等への注目として果たされることによって、「労働者階級史はますます職場における男性の身体存在を自然化し、職場においては女性の身体は場違いだという考えを強めてしまう」(302頁)ことを懸念し、男性性についての歴史研究において「労働する身体」へ注目する必要性を主張する。11は、第一次世界大戦期のアメリカでの裁判——海軍による「変態性欲者」に対する捜査が地元の牧師と若い水兵の性的関係を明らかにしたというもの——を取り上げ、関係者が「事件」の評価を争う中で展開した、「性的なもの」と「性的でないもの」の線引きをめぐる文化的闘争を描き出す。12は、イギリスによるベンガル地方の植民地支配に関する言説の分析を通じて、帝国主義的な対外支配が「男らしさの理想」に関する一連の概念を通じて正当化していく様を描き出すものだ。

以上のように本書においては「男性性はどのようにつくりあげられるのか」との視点のもと、対象、方法ともに多様な論文が収録されている。巻頭言および各部冒頭の解説が収録論文のみならず関連分野の良質なレビューとなっており、研究動向および当該分野における今後の課題の把握の観点からも得るものが多い。例えばIの解説にて、男性のあり方の「表面的な変化を過大評価してしまうことこそが、不平等な社会関係の維持に加担することになる」(33頁)懸念を指摘しつつ、「構造の変動を安易に語らないことは、むしろ希望」(33頁)であると主張されるが、男性性研究が論じていくべき重要な論点だと思われる。

メリッサ・M・シュー、キンバリー・K・ガーチャー著／三木那由他、西條玲奈監訳
(フィルムアート社、2024年)

女の子のための西洋哲学入門 思考する人生へ

槇野 沙央理*

知識は私たちを守ってくれるか？ 知識は私たちに見合う尊厳があることを教えてくれるだろうか？ 知識は私たちを、伝統から救い出しながら伝統へと向かわせてくれるだろうか？ 私たちを身軽にしてくれると同時に自発的に引き受けたい指針をも与えてくれるだろうか？ (引き受けざるを得ない指針に向かわせてくれるか？) 知識は私たちを本当に破壊的にしてくれるだろうか？ 私たちは、哲学という営みに身を委ねることで、この世界をよりマシに生きることができるだろうか。

『女の子のための西洋哲学入門』は、これらの問い(厳密にはプレッシャー)に応じようとする、日本語では稀少な一冊である。所収された諸エッセイは、マイノリティ属性が相対的に強い人々の言葉や経験を掘り取ることで、哲学がまさにその哲学らしさを獲得する方法(普遍性・客観性・自律性のヴェールをまとう言葉使いを行使する権限)にある種の勇氣を持って放棄しようとする。その様子はまさに、哲学という学問領域が、自身をストリップする過程そのものに見える。言い換えれば、哲学が哲学というもっともらしい見かけを獲得するプロセスそのものを作り変えようとするように思われるのである。

本書の構成は、全四部・合計20章からなる。編者のシュー&ガーチャーによると、それぞれの部は、「自分とは何か」、「知識とは何であり私たちはいかにしてそれを求めるのか」、「社会構造や権力関係はいかにして私たちの現実をかたちづけているのか」、「私たちの行為や態度に関する倫理」(49-50頁)と特徴づけられる。もし、既存の学問領域において典型的なテーマや、それぞれの章のアプローチに着目して捉え直すなら、以下のように言えるだろう。第Ⅰ部では、伝統的な哲学の問題とされてきた「同一性」・「徳」・「自己知」等々のテーマへのフェミニズム的なアプローチが展開さ

れる。第Ⅱ部では、そもそも哲学が前提としてきた科学的・学問的方法論がどのようなものであったかの捉え直しと新たな提案がなされる。第Ⅲ部では、「人種」・「ジェンダー」・「クィア」といったフェミニズムに関連ある諸概念および実践が、哲学的な思考法や道具立てを活用して論じられる。第Ⅳ部は、前Ⅲ部よりさらにハイブリッドな印象を与える。そこでは、想像力や感情の働きを分節化することを通じて世界へと応答しようとする者たちへの倫理が語られる。

本書が学際的な取り組みであることは論を俟たず、哲学の営みにフェミニズム的な観点からの見直し、つまり哲学がフェミニズム的な観点を内在化することが必要であるという認識を与える。この内在化のプロセス——私なりの表現をするなら、哲学が哲学というもっともらしい見かけを獲得するプロセスは、個々の語り手によって模索され、解体され、形作られようとしている。

例えば、第Ⅲ部第12章「言語——コミュニケーションでの集中攻撃」(エリザベス・キャンブ著、三木那由他訳)を取り上げよう。ここでは、記述と評価との区別を(実践的にも概念的にも)困難にする「厚い語」(338頁)が、誰かしら「ターゲット」をその人々に相応しいとされてきた「場所」に位置づけ、うまく適合しない人々を非難するもので(337-338頁)あることが人種およびジェンダーにまつわる具体例を挙げながら論じられる。例えば、かつてアフリカ系アメリカ人に対して頻繁にぶつけられてきた「小僧^{ボーイ}」という言葉が、白人に対して従順で未熟な存在であることを、ターゲットに要請してきたことが取り上げられる。ところがキャンブによると、人々を抑圧する方法は、誰かを抑圧しようとする話し手に対する逆襲の手段ともなりうる。哲学者のポール・グライスによって考案された「推意」は、偏見を利用して

* 立教大学非常勤講師

他者を侮辱する会話のメカニズムを解明すると同時に、言葉の解釈を行うという責任を聞き手が話し手へと打ち返す可能性、相手のやり口を利用して相手をやり込める余地があることを示唆しているという。(グライスの専門家である三木によって施された訳注は、丁寧で親切である。)

キャンプの「言語——コミュニケーションでの集中攻撃」における実際の言語使用への態度は、古典的な言語哲学の議論にしばしば見受けられがちなものとは異なっている。そうした議論において、実際の言語使用における力関係はほとんどまったく考慮されず、それどころか、力関係を排除して言葉の意味を捉えることが当然だ(常に成り立つ)と暗黙裡にみなされてきた。それどころか、言語哲学の理論が扱う言葉にヴァリエーションはほとんどなかった。語であれば名詞、文であれば陳述文が典型とみなされた。これらのことから一歩踏み込んで述べるなら、古典的な言語哲学の理論は、標準的で、整っていて、本来あるべき姿・形をした言葉が存在するのだというメッセージを送り続けてきたのである。(この伝統に対する批判は、ジョン・オースティン(1975, Lecture 1)を参照のこと。)だがキャンプは、理論に都合のよい言葉を標準形とするのでなく、問題としての言葉自体に寄り添っている。キャンプのエッセイは、既存の理論によって説明可能な範囲を広げる応用研究というよりも、そもそも、問題としての言葉に寄り添った言語哲学の展開が可能であることを示している。(すでに同趣旨の『バッド・ランゲージ: 悪い言葉の哲学入門』(ハーマン・カペレン、ジョシュ・ディーバー 2022)が翻訳で刊行されている。)私はここに、哲学の問題を哲学の問題として立ち上げるためにはフェミニズム的観点が必要なのだ、という展望を見てとる。

本書は、哲学の専門家にとってだけでなく、非専門家や初学者にとっても魅力的なフェミニスト哲学の入門書となっている。とはいえ、一冊で、フェミニスト哲学の現在を語り得ているわけではない。本書には、フレンチ・フェミニズムの成果

があまり積極的に取り上げられていない。(訳者に横田祐美子氏が加わっているのも、読者は、横田氏の研究に目を向けることでフレンチ・フェミニズムへと接近可能ではある。)また、哲学の正典をフェミニズムおよびポスト・コロニアル的な観点から読み直す試み(よく知られているのは、ペンシルヴェニア大学出版局による「フェミニスト解釈」のシリーズである)も、無視されている。しかしながら、本書がこれらの課題に対してそれほど重い責任を負うとは思われない。今後、類似の書籍が出版され雑誌特集が組まれることで解決されれば構わないだろう。

最後に、よりプラグマティックな観点から、本書がもたらす希望について述べておきたい。ノンバイナリーおよびバイナリーの女性(シス・トランスを問わない)は、しばしば「女性哲学者」と呼ばれる。この呼称は、そうした人たちが、真性の「哲学者」(ここには「人間」という言葉を置き換えることもできる)ではないために、例外的に知性を持った存在であることを証明してきた／せざるを得なかったし、これからも証明し続ける必要があることを示唆している。このことは、「アジア系の哲研究者」という呼称についても言えるだろう。本書の刊行に続き、フェミニスト哲学の展開が本邦において活発となることで、いつか私を含め、アジア系の女性とみなされる哲学者が、自身の知性を証明し続ける負の連鎖から解放されることを望む。

参考文献

- Austin, J. L. 1975. *How to Do Things with Words*, Second Edition, Harvard University Press. (坂本百大訳, 1978, 『言語と行為』, 大修館書店.)
- Cappelen, Herman and Dever, Josh. 2019. *Bad Language: Contemporary Introductions to Philosophy of Language*, Oxford University Press. (葛谷潤・杉本英太・仲宗根勝仁・中根杏樹・藤川直也訳, 2022, 『バッド・ランゲージ: 悪い言葉の哲学入門』勁草書房.)

大畑凜著（青土社、2024年）

闘争のインターセクショナルリティ 森崎和江と戦後思想史

君島 朋幸*

赤と黒、直線と曲線と円とが重なり綾をなし、僅かにざらつき、どこか版画的色彩もとい陰翳をまとう書物がここに上梓された。『非所有の所有』『闘いとエロス』復刊時に精緻な解説を寄せた大畑凜氏による、森崎和江研究待望の一冊である。

近年復刊が相次ぎ、再評価の機運が高まっていた2022年6月、森崎が世を去ったことは記憶に新しい。没後ただちに編まれた『現代思想』特集号に寄せられた論考の数々が物語っていたのは、かの女が遺したテキストの、目を見張るほどの多彩さであった。しかし、いや、その多彩さゆえにというべきか、かの女の著作を専門的に扱った研究は存外に少なく、水溜真由美を筆頭に、ブレット・ド・バリー、茶園梨加、佐藤泉などの仕事に限られてきた。その点で本書は稀有に違いないのだが、さらに、森崎テキストが湛える思考の強度を個人の資質にのみ帰する評伝的記述とも趣を異にする点においてこそ、その独創性を評価すべき書物となっている。

本書冒頭、著者は書く——ある思想を〈現在〉という地点から継承することは、いかなる営みでありうるのか、と。対象とするのは、森崎のキャリアの初期に位置する筑豊時代（58～78年）のテキストと、その方法論たる「聞き書き」である。これは、かの女が他者の〈わからなさ〉と対峙した際に何度も立ち戻る歴史的現場としての〈筑豊〉から案出されたスタイルでもあり、他者に自らを開いていく態度そのものといってよい。そして、この「聞き書き」の分析の視座として導入されるのが、主題に採用されている「闘争の交差性」である。本書の重要な参照先となるアンジェラ・デイヴィスに従えば、この概念は、レイシズム、セクシズム、グローバル資本主義、産獄複合体といった暴力的抑圧の諸相を注視し、他の闘争との連続的な水脈を掘り起こすものである。これを踏まえ

た本書が、具体的な運動史との綿密な照応のもと分析するのは、ときにマスキュリンで暴力性を帯びがちであった〈集団〉や闘争の原理を、森崎自身の現実や周囲の女性たちとの出逢いから問いに付し、それを全き別様の水平的な共同＝協働性に向けて再構成するために選び取った〈書く〉という動力である。これにより、副題にある「戦後思想史」も、労働力合理化の歴史的必然性を説く政局に抗う反時代的姿勢をこそ森崎のテキストに読む著者の手で、これまでにない姿で縫り合された〈現代〉への水脈として綴られることになるだろう。以下、各章の概要である。

第一章「翻訳としての聞き書き——『まっくら』というはじまりについて」では、谷川雁との共同生活を開始した筑豊という場と、『サークル村』のスタート、そこでの女たちとの出逢いをもとに、「聞き書き」によって著された『まっくら』（61年）が読解される。地上とは異なる炭坑内のエロスや人間関係を記録する「聞き書き」における、とりわけ他者の〈わからなさ〉を抹消しない倫理的次元の翻訳行為としての〈書く〉の思想的可能性が検討される。

第二章「非所有を所有する、あるいは女たちの新しい家」では、『非所有の所有』（63年）が書かれた時期を中心に、大正行動隊による強姦殺人事件の衝撃をはじめ、マルクス主義用語を援用した所有形態の問題に引きつけながら、これを女たちの現実から照射し変形させていく森崎の〈非所有／被所有〉をめぐる錯綜した議論が丹念に辿られていったのち、女たちの新たな共同性としての〈家〉が考察される。

第三章「流民を書く、土地とともに書く——労働力流動化と〈運動以後〉の時代に」では、60年代後半～70年代前半の、国内エネルギー転換による労働力流動化・合理化と炭坑閉山、そして三井

* 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程

三池労働闘争といった文脈のなかで、本書の鍵概念となる〈流民〉という想像力と、〈集団〉の論理として書かれた『奈落の神々』(74年)が中心的に論じられる。

第四章「抵抗の地図——沖縄闘争と筑豊」では、「おきなわを考える会」とミニコミ誌『わが「おきなわ」』が取り上げられる。施政権返還(「本土復帰」)を控えた沖縄における／対する言論空間のなかで、「筑豊－北九州－沖縄－与論島－朝鮮－倭寇(海)」をつなげていく(中略)森崎による思索の足跡」から導出された〈地図作成法〉(222頁)の一端が示される。

第五章「「ふるさと」の「幻想」——流民としての「からゆきさん」をめぐって」では、アジア侵略と女性の性的搾取といった、性、階級、民族という三点の輻輳と矛盾に向き合う主著『からゆきさん』(76年)が、先の〈流民〉の視座から照射され、故郷と「ふるさと」の乖離や「アジア体験」をめぐり葛藤した文体が読み解かれていく。

第六章「方法としての人質——あるいは「自由」をめぐって」では、「二つのことば・二つのところ」(68年5月)等の時期に僅かに用いられた「人質」という言葉を、金嬉老事件や植民地朝鮮における性的緊張といった森崎の経験と交差させつつ論ずることで、〈流民〉として〈集団〉を求め続けた森崎の「思想的な〈方法〉——あるいは方法的な思想」(270頁)としての「人質の自由(292頁)」(「不自由さを新たな関係の自由へと拓いていった方法」(311頁))までが論じられる。

終章「森崎和江を書き継ぐ」では、森崎の読み手を介して「森崎のように」あるいは「森崎とともに」思考する〈現在〉が示される。特に、植民地主義の極致であるイスラエルによるガザ侵攻と大量虐殺への言及など、著者の問題意識と森崎が記してきた思想の道筋とが、今一度「闘争の交差性」

として確認される。

最後に簡単な質問を投げたい。現在著者は、谷川や上野のみならず金時鐘、黒田喜夫といった詩人らを取り上げ、森崎の綴る〈流民〉との比較分析に着手している。しかし本書では、森崎思想の鍵語となる「裂け目」「虹」「筋肉」「火」等が詩的表現として言及されるが、当の森崎の詩作品に対する考察がなかったことが惜しまれる。ときに重なり、ときにズレていくこの〈流民〉といった同時代的表現が、詩人らの手で、他ならぬ詩として書き留められているのであれば、詩の分析はやはり必須となろう。佐藤泉が指摘する森崎の言語論や、翻訳の問題系もこの点に関わるだろうし、そうした作業を経ることで「闘争の交差性」という視座も一層輝くように思われた。その点、本書の対象時期と重なる、森崎の詩集『さわやかな欠如』(64年)等は、どのように読まれうるのだろうか。

他にも隣接領域の〈民衆〉〈群衆〉研究との接点も気になったが、もとよりこうした注文は、本書の瑕疵をあげつらうものでは決してない。戦後思想・文学、ポストコロニアル、フェミニズム等の諸運動体や研究領域を鮮やかに繋ぐ、本書の多脈的な回路ゆえのものである。今後本書は、森崎研究にとどまらず、インターセクショナルリティを思考・実践する研究や運動現場において、〈私たち〉というコレクティブのありうべき〈現在〉を示す〈地図〉として何度となく参照されるに違いない。

参考文献

- 水溜真由美, 2013, 『「サークル村」と森崎和江——交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版。
 佐藤泉, 2023, 『死政治の精神死——「聞き書き」と抵抗の文学』青土社。
 大畑凜, 2025, 「森崎和江の流民論とその時代、あるいは現在について」『社会文学』(日本社会文学会) 第61号: 20-33。

小田原のどか、山本浩貴編（月曜社、2023年）

この国（近代日本）の芸術 〈日本美術史〉を脱帝国主義化する

村上 由鶴*

本書は、アーティストやキュレーターへのインタビュー、研究者の論考およびレクチャーといった多彩なテキストを通じて、日本の美術に現代まで横たわる帝国主義および植民地主義的観念に光を当てるものである。

編著者によれば、本書のきっかけには、2022年に東京都人権プラザにおいて計画されていたアーティスト・飯山由貴の作品《In-Mates》（2021年）の上映が、東京都総務局人権部によって不許可とされた事例がある（なお、本書ではこの問題を「検閲」と表現しているが、後に述べる理由により本稿では「不許可」とする）。飯山の《In-Mates》に限らず、行政等の判断により作品の展示が制限される事例は繰り返されてきた。例えば、本書にインタビューとして参加する小泉明郎の《空気#1》（2015年）も「MOTアニュアル2016 キセイノセイキ」展での展示が認められなかった。

こうした問題の背景には、決定権者による「傷つくかもしれない誰か」への「配慮」があるが、その「配慮」の対象から排除され本当に傷ついている誰かの姿は見えてこない場合が多い。各論考は、「平和」や「平等」の下に、見て見ぬふりをされる存在を生む構造と、そこに働く帝国の論理を詳らかにしている。そこで通底しているのはこの国の芸術が抱える問題をインターセクショナルな視点から紐解く姿勢である。

まず、第1章では、本書の副題で「〈日本美術史〉」がカッコで括られていることの含意が示される。「日本美術」と言っても、「日本」というナショナルな枠組みも、「美術」の概念も、実は自明なものではない。これらの領土／領域は、いずれも帝国主義のロジックと差別に基づいて制度化されてきたことが明示され、これが本書全体の議論を導いている。

続く第2章において、嶋田美子「なぜ私は「日

本人慰安婦像になって」みなければいけなかったのか？」や、吉良智子「女流美術家奉公隊」では、帝国主義の被害者として語られがちな女性の間にも、階級格差や植民者／被植民者という非対称性があり、「女性の人權」の問題として単純化できないことが指摘される。特に、「慰安婦問題」に対してシスターフッドに基づき、日韓の国境を超えた連帯を提唱する日本のフェミニストに対して「傲慢で無責任」（141頁）とする嶋田の批判は、「連帯」の名の下に覆い隠されてしまう権力関係を可視化するものである。

また、中嶋泉は「エロスと美術 1960-80」において日本の美術界と女性美術家の「出会いそびれ」（172頁）を指摘し、吉國元（第7章）は、本来ならば喜ばしいはずの大陸を超えた人と人との出会いが、植民地主義下では徹底的な間違いとなったことを「出会い損ね」（726頁）と表現している。おそらく、本書で語られた事例以外にも、連帯やポジティブな社会的インパクトにつながり得たかもしれない多くの「出会い」が偏見や構造的差別によって結実しなかったはずである。そして「出会い」の最も不幸な形としての植民地主義は、支配者による二者択一の論理によって、身体と領土が侵略されていく過程であった。

前述の女性間の格差に関する議論は、第4章の北原恵による『「御前会議」の表象』に登場する彫刻家・荒木光子（375頁）に関する記述とも交差する。『マッカーサー元帥レポート』（GHQが編纂した戦史）の芸術面での統括や、この戦史の編纂に大きく関与した荒木に向けられたミソジニー、「婦人戦争犯罪人」とする告発など、北原の調査に基づく記述により、ミセス・アラキに強く惹きつけられた。一方で、彼女の生を「正しい／正しくない」といった単純な二項対立に回収しないまなざしもまた、本書の各論考に共通する。

* 秋田公立美術大学ビジュアルアーツ専攻助教

本書は全体を通じて、この国の美術やそれをめぐる問題が照射する課題を、決して単純化しない。このことは、美術が「複雑なものを複雑なままに伝えられる」方法であり、場所であることをあらためて意識させる。一方で、美術は「自由に読み取ってよい」ものとして提示され、美術館では作品の背景説明が避けられる傾向がある。本書で紹介される美術作品をはじめ、人権課題を扱う作品の展示機会は増えているが、アーティストやキュレーター、そして美術の現場は、啓発の役割を回避してはいないだろうか。美術の領域では、どんなものであれ「強制」が生じることへの恐れが美德とされているあまり「問題を可視化するつもり」の作品でも、その「つもり」が伝わらないことがあり、その「伝わらなさ」が見る側の責任にされることもある。受け手の関心や背景によってまったく異なる意味が与えられ、結果的に、作り手の意図とは大きく乖離した認識や理解が広まり、曲解された「多様性」や「自由」に回収されてしまうこともある。もちろん、これがすべての美術作品に当てはまるとは言えないが人権課題を扱った作品においても美術の慣習に則って「自由な受け取り」が推奨されるなかで、加害と被害の非対称性が曖昧になり、実際に生じている深刻な問題の理解につながらないとすれば、やはり肝心なことが抜け落ちている。本書を読み、「複雑なものを複雑なまま伝える」という方法を信じつつも作品で人権的課題を扱う手つきの妥当性について検証する必要性を改めて感じた。

最後に、第3章の飯山のインタビューで語られる、東京都人権プラザ企画展「あなたの本当の家を探しにいく」の付帯事業として計画されていた

《In-Mates》の上映が、東京都人権部によって不許可となった問題に触れたい。当時、私は人権プラザを運営する東京都人権啓発センターに勤務し、本展の企画担当を務めていた。私がこの問題を「検閲」ではなく「不許可」と呼びたいのは、問題の本質が上映禁止の結果ではなく、その上映を「懸念」する理由を知らせるメールに含まれていた誤った歴史認識と差別的な言説、これに基づいた行政判断にあると考えるからである。言うまでもなく上映が禁じられたという結果は無視できない。しかし私は、本件をめぐる交渉の経験を通じて「検閲」の有無や定義をめぐる議論が問題の本質を見えにくくすると感じた。この件は、表現の自由にも関わるが、差別感情に基づいた歴史認識とその誤りを訂正しようとしない行政の態度が現実には差別として機能しているという点により深刻な問題があると私は考えている。

第5章の大坂紘一郎と編著者・山本との率直な対話を読むなかで、私は自分が美術の立場から東京都人権プラザを活動の場として選んだことを思い出していた。いま思えばナイーブだったが、公共施設でありながら美術においてはオルタナティブとして機能し、制度への問いかけになり得る可能性を持つ場所だと感じていたのだった。美術という領域には「美術の場所」と「そうではない場所」を分け、「美術界の人」による「そうではない人」の周縁化がある。こうした分断が、美術の社会的な広がりを阻んでいる現実があると、個人的には感じている。そのなかで、本書のポストコロナるかつ複層的な視点は、美術をより開かれた実践へと導くための出発点となり得るだろう。

宋連玉著（有志舎、2023年）

植民地「公娼制」に帝国の性政治をみる 釜山から上海まで

菊地 夏野*

1990年代に被害女性たちがカミングアウトして日本軍「慰安婦」問題が明らかになって30年以上経った。わたしはちょうどその時代に大学に入学し、「慰安婦」問題の経過を見ながら自己形成した人間である。2000年代以降、バックラッシュが激化し、社会的レベルにとどまらない政治的なレベルでの封じ込めが確立するのを怒りを感じて見守らざるを得なかった。

90年代の戦後補償を求める運動は市民の力強いうねりを巻き起こし、アジアの各地から被害者たちをお呼びし集会を開いた。あの頃の運動の雰囲気懐かしく思える。現在、あのようにアジア全域へ手を繋ごうとする余裕を持つ運動は多くはない。しかし、本書の問いは、当時の市民運動や言論がはらんでいた限界性を鮮やかに浮き彫りにする。

それは、吉見義明がこの問題の研究を牽引した歴史学者らの認識に代表されるものだ。吉見らは、「慰安婦」制度と公娼制の違いを強調し、公娼制に比べて「慰安婦」制度の暴力性は大きいとした。これに対して鈴木裕子らは反論し、両者の共通性や連続性を重く見た。この論争は当時注目され、わたしも拙著『ポストコロニアリズムとジェンダー』（2010年）で取り上げた。宋が指摘するように、吉見らの認識はわかりやすく、戦後補償や問題解明を求める当時の運動と言論に勢いを与えた。しかし、大きな禍根を残すことにもなった。

例えば2010年代の朝日新聞バッシングにおいて、右派が問題としたことのひとつが、被害女性が「キーセン」出身であったことを報道しなかったということだ。右派は従来から、「慰安婦」女性と「公娼」ら売春女性を同じものとし、「金目当ての淫売」として中傷した。そのような言説状況の中、「慰安婦」被害女性を公娼と切り離して謝罪と補償を求めるのは、短期的には理解されやすくて

も、本質的には、そのような右派の差別的歴史観を批判することができない。

ここで抜け落ちているのは、宋が本書で論じる「慰安婦」制度と公娼制度の連続性である。朝鮮半島や中国大陆における日本政府と日本軍の展開に伴う売買春管理の変遷をみれば、公娼制を中心とする性管理と不可分のものとして慰安所が設置されていったことが明瞭になる。

公娼制がそれ自体として戦前日本の家父長制を構築する基盤的制度の一つであった以上、「慰安婦」制度と公娼制を切り離す必要がどこにあるのだろうか。それはやはり、公娼制のような売買春の問題に対する理解の不足であろう。

しかしもちろん、吉見ら研究者や市民運動に女性差別や家父長制への問題意識がなかったわけではない。そうではなくて、売買春の問題が複雑で、現在の学問や言論では解きほぐせない、いや逆に、現在の学問や言論が理解を拒む対象であるからだ。それは90年代も現在もほとんど変わらない。「売買春／セックスワーク」をめぐる今でも大きな混乱と対立が続いている。

その意味で本書が提示している認識は、そのような対立を超える、通底した問題意識である。

本書は、性管理における日本政府と日本軍の定見のなさを抉り出す。政府らは、拡大する日本軍の領域に伴い、性病や性暴力を軽減する性管理政策を必要とする。同時に、諸外国からの批判をおそれ、日和見的に形式を変化させる。しかし変わらないのは、形式上女性の「自発性」によるように見せながら、実態は高額な前借りと過酷な労働環境、そして厳格な性病検査で女性を縛る二重性である。

そして本書が指摘する、この性管理政策の各所に見られる民族差別である。本土と朝鮮半島、中国大陆それぞれで、日本人女性と朝鮮人女性は差

* 名古屋市立大学人間文化研究科

をつけられ、新聞等の報道においても表象のされ方が異なった。半島の経済が植民地化によりどんどん壊滅させられ、人々は困窮し、上海など大陸に移動せざるを得なくなるが、移動先で女性たちの生き延びるすべは零細労働や売春しかなかった。

植民地化は朝鮮人女性たちの生活を奪いながら、たどり着いた売春の世界でも差別したのである。宋が提唱する、そしてわたしも希求する「脱帝国のフェミニズム」はこのような歴史的現実から立ち上がる。階級と民族によって分断される女性。この分断の有り様を丁寧に従い、それに抗うのが帝国を脱するための方法であろう。

逆に言えば、脱帝国のフェミニズムを実現するには、「売買春／セックスワーク」への理解が欠かせないということである。本書でも度々言及される娼妓運動は、「売買春」を悪とし禁止することで平等を達成できると信じる。しかしそのように道徳的次元からのみ把握し行動しようとするのでは、「売買春」がどのような社会構造に置かれているのかわからない。「売買春」は結婚制度とともに資本主義社会のセクシュアリティ管理の要諦とされている。女性は結婚制度によって労働を搾取され、売買春差別によって結婚制度へ追い込まれる。であるからこそ、ラディカルなフェミニストはセックスワークを女性の権利として提唱した。しかし同時に、セックスワーカー差別は根深く構造的であり、そのように権利を訴える力を持つワーカーはわずかである。そのため、娼妓運動の被害者視が説得力を持ち、世論は傾く。性差別や資本主義の問題は解決できないから、当面、売買春を禁止することで被害者を救おうというわけ

である。けれども禁止からこぼれ落ちる売買春は必ず存在し、その環境は悪化することがワーカーたちの運動からずっと指摘され続けている。

この悪循環が終わらないのは、フェミニストの多くとワーカーたちに「階級差」があることも大きい。フェミニストとして発言力をもち得る女性の多くは学歴や階級、地位の高いひとびとである。売買春に携わる女性たちの多くはその反対であり、他に選択肢の少ない中でその仕事を選ぶ。差別される仕事につくことを身近に感じずに済む者が、そこにつかざるを得ない者たちの気持ちを想像するのは難しい。それよりは、単純に禁止しようとする行動することの方が容易い、それが「フェミニスト」として称揚されるのであればなおさら。

セックスワークの主張は、その仕事が「常に素晴らしく特別に価値あるもの」だからというより、「他の仕事と同じように、売る側と買う側のニーズがある」から必要なのであり、また労働の権利を主張することでその環境をより改善する必要があるからなされるのである。

公娼制や「慰安婦」制度のように女性への抑圧と暴力が明白なものはセックスワークとは当然言えない。セックスワークの主張はそれらのような暴力的制度を擁護するものではない。むしろ、いまだ完全に保障や実現のされなかったことのないセックスワークの権利を主張することで、現状を少しでも改善し、本当の意味での差別からの解放を目指すためにある概念である。であれば、本書が示すように、セクシュアリティの管理を不可欠とした帝国主義の解体こそ求められてくるのである。

ジョアン・C・トロント著／岡野八代監訳（勁草書房、2024年）

ケアリング・デモクラシー 市場、平等、正義

武田 宏子*

2024年は、「ケアの倫理」の観点からデモクラシー理論の再構築を試みるジョアン・トロントの著作が日本に本格的に紹介された年となった。本書『ケアリング・デモクラシー』の監訳者である岡野八代がトロントとの共著として『ケアするのは誰か？』（白澤社）を2020年に出版して以来、「ケアの政治理論」への関心は高まっていたが、主要著書が翻訳されたことによって、この問題に関する議論を日本で広く展開していくための基盤が整ったと言えることができるだろう。

今回、翻訳版に改めて目を通してみて、本書が世界金融危機から数年が経過した時代状況を真正面から受け止めることで、ケアの観点からデモクラシー論を丹念に練り直し、現実社会で実践される政治を再構想する真摯な努力を行っていたことに強い印象を受けた。そして、そういう印象は、細心の注意をもってことばを選び、注釈を施した翻訳によるところも大きいのだろう。

本書の原書が出版された頃までには、グローバルに展開する新自由主義型資本主義経済システムに対する批判がいつの間にか沈静化して、その「不-死」(non-death) (Crouch 2012) が議論されるようになっていた。この過程で、多くの人びとが新自由主義型資本主義経済によって周辺化された状態に置き去りにされ、自己責任原則が喧伝される社会状況で「ケア」を提供し、また、受ける機会を確保できずに苦闘していたが、そうした政治経済の構造的な歪みが問題として顕在化するためには、ブレグジット国民投票と米国大統領選という2016年の政治的「大事件」が生じる必要があった。その後、約10年が経過して第二次トランプ政権が成立し、現在、権威主義的な統治手法を駆使して世界経済と国際関係を混乱に陥れている。こうした現状に至る過程を念頭に本書を読むと、トロントの議論は新自由主義型資本主義経済の問題

を正確に炙り出し、「ケアの倫理」を基盤として政治経済を再構築するための道筋を具体的に示す処方箋であったと言え、今まさに読まれるべき重要性を有している。この意味でも翻訳版の出版を歓迎したい。

ここで、本書『ケアリング・デモクラシー』が政治経済に対して持つ意義が、トロントのフェミニストとしてのコミットメントに深く依拠しているのを確認することには意味があるだろう。本書の中核的な主張は、前著『モラル・バウンダリー』（勁草書房）を踏まえて、「人類的な活動であり、私たちがこの世界で、できるかぎり善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動を含んでいる」（24頁）と定義されるケア実践を民主主義の理論、生、実践の中核に据える必要があると整理できるが、この時、トロントは、ケア実践の共同性と相互依存性を特に重視している。そこで、本書では、トロントがベレニス・フィッシャーとともに概念化した「ケアの4つの局面」——①関心を向けること (caring about)、②配慮すること (caring for)、③ケアを与えること (care giving)、④ケアを受け取ること (care receiving) ——に第5の局面として、複数の他者とのコミュニケーションを通じて信頼や敬意を醸成し、連帯する活動実践を意味する「共にケアすること」(caring with) を新たに付け加えている (47頁)。このように、本書の議論では、ケア実践はケアの受け手と与え手の間での双方向的でダイナミックな関係性において捉え直されている。

トロントによれば、ケア実践の関係的な性質は、新自由主義を乗り越えて、オルタナティブな民主政治の可能性を提示するための基盤となる。経済的行為を人間活動の中心に据え、国家や社会の役割を制限する新自由主義が政治経済シス

* 名古屋大学大学院法学研究科

テムのイデオロギー的礎とされることによって、人間の生は個人が市場で行う『選択』の総和であり、その選択の責任はその個人が負うものである」(55頁)と考えられるようになった。この前提からすると、ケア実践もまた、個人が自らの選択で行う個人的な行為ということになる。対して、フェミニスト政治経済学やフェミニスト政治理論の領域での議論は、そうした自己責任を強調する新自由主義の個人主義的な前提によって、特定の関係性の中で「選択」がなされる際に影響する構造的抑圧や不平等が覆い隠されてきたことを指摘してきた。

ケア実践をめぐる理解の不足や誤解、欺瞞へのフェミニストによる批判を踏まえて、トロントは本書でさらに議論を進め、新自由主義型資本主義経済の下で行われるケア実践がはらむ権力性や暴力性にまで批判の対象を広げている。彼女が「保護パス」と「生産パス」と呼ぶ(97頁)行為は、危険を排除したり、生産活動に従事して家族の物質的ニーズを充足するための経済的資源を確保することを目指す、主に男性によるケア実践であるが、この種のケア実践は家庭内での「女性化された」ケアワークを行う責任を免れる根拠となってきた。また、「保護パス」と「生産パス」は「善い」シティズンシップの要件を構成するが、この理解を通じて、男性が「生産」活動に従事することで「保護」される家族のメンバーは「依存」状態にあると見なす権力構造が維持され、その陰で「保護」されているはずの者たちがしばしば暴力の対象となってきたことが見過ごされてきた。より最近の議論において、トロントは、「保護パス」や「生産パス」を父権主義的な「悪いケア」(bad care)と呼び変えているが、「悪いケア」は男性性のみではなく、新自由主義型資本主義経済の構造と実践とも分かちがたく結びついている。

こうした現状に対してトロントが提示する対抗策は、フェミニストが積み重ねてきた議論に深く根差すものである。具体的には、トロントは、本書で新たに導入されたケア実践の第5局面である「共にケアする」ことの重要性を強調し、その上

で、「私たちはみな、ケアの受け手である」(209頁)という認識から、自己と他者のニーズを捉え直すことによってケア実践について再考することを求めている。トロントによれば、こうした「再考」は、ケア実践をケアの受け手と与え手という閉じた二者関係に固定するのではなく、他者の観点から関係性について絶えず考え直し、刷新する方向での変化を促す。既存の他者との関係を「連帯」へと作り直し、活性化することで、政治経済のあり方を変えていく。この点に、社会主義フェミニズムとラディカル・フェミニズムの議論の系譜を見出すことは難しいことではない。

とはいえ、そうした「フェミニスト」であるトロントの議論を、新自由主義型政治経済にどっぷりと浸かった私たちが読みこなすことは簡単なことではない。この問題を浮き彫りにするために、ひとつの逸話を紹介したい。昨年5月、トロントを迎えて開催した、若手研究者が研究発表を行うワークショップにおいて、「あなたがターゲットとする議論は何か」という質問が寄せられた。そのすぐ後、ちょうど後ろの席に座っていた筆者にもわかる程度の声で、トロントが「ターゲット」とため息交じりに呟いたのが聞こえた。

今後、研究者として名をなしていかなければならない若手研究者が自分の業績を際立たせるために特定の議論を「ターゲット」にするのは、現在の研究環境からすると通常の振る舞い方なのだろう。けれども、『ケアリング・デモクラシー』の議論を踏まえれば、軍事的攻撃を行う際に用いられる「ターゲット」という言い方は、「ケアの政治理論」に関連した対話の場であるはずのワークショップには適さない。にもかかわらず、トロントの著書を読んだ上でワークショップに参加した者でさえ、そうした言葉づかいをしてしまう。このように、『ケアリング・デモクラシー』は、現代という時代を生きる者にとっては読み込み、十全に理解して使いこなすことが難しい本である。だからこそ、良質の翻訳で本書が刊行されたことを再度、歓迎し、この本がじっくりと、丁寧に読まれることを期待したい。

優生保護法のグローバル史

貴堂 嘉之*

2024年7月3日、最高裁は「旧優生保護法は憲法違反である」とし、国に賠償を命じる判決を下した。1948年に成立した同法は1996年までの48年間、精神障害や知的障害などを理由にした断種／不妊手術を認め、その数は2万5千人に上るとされる。「不良な子孫の出生を防止する」ことを目的とした同法下での断種／不妊手術は、戦後最大の人権侵害とも呼ばれる。

この被害者に対して国の救済が始まる歴史的転換期に、本書はグローバルな視点から同法を検証すべく、以下の歴史的問いを投げかける。「ナチ・ドイツによる悲劇を目撃した戦後の世界で、優生保護法が成立することが可能となったのは、一体なぜなのか」、「人間の「質」に優劣を定め、劣った形質の者の生殖機能を強制的に奪うことを規定した法律を、基本的人権を盛り込んだ新憲法を自ら起草するまでした連合国最高司令官総司令部（GHQ／SCAP）は、なぜ認めたのか」（14頁）と。

優生保護法に関する研究は膨大にあり、松原洋子、市野川容孝、利光恵子、荻野美穂、藤野豊、田間泰子らが、科学史、生命倫理、ジェンダー論、日本近現代史から各々に接近を試みてきた。これら同法下での断種／不妊手術、人工妊娠中絶、家族計画の政策・実践を個別に深く検討するアプローチとは異なり、本書は、優生学の名のもとに人口の「質」を管理する法律の側面と、中絶の合法化と避妊の促進という人口の「量」を調整する手段を確立する法律の側面という、「質」と「量」の問題としてこれらを整理してその関係に着目し、これを同時代のグローバルな優生学運動や純血政策（人種主義）、人口政策の中に位置づけ検証することを試みた（16頁）野心的な国際共同研究である。

本書は4部構成で、全部で11の論考からなる。第1部では、優生学が科学的権威を失う時期である1930年代から戦中・戦後初期の米独英の動向が

分析され、戦勝国の優生学者らがナチ優生学との切り離しを図り、戦後優生学への橋渡しをお膳立てする様子が描かれる。小野論文では、米国内で人種的・階級的な要素の排除が主張される様子を、紀論文では独で行われた米国主導の法律家裁判の検証を通じて、ナチ断種法の不法性が問われることなく、それが結果として優生保護法成立へのお墨付きを与えたと論じる。寺尾論文は、英優生学が「リベラルな優生学」を自称し個人の自発的な選択としての避妊や断種を推奨した様子を描き、ブラッカーらが優生保護法を肯定的に評価した背景を分析している。

第2部は、戦後の過剰人口という問題群を扱うパートで、「第三世界」における人口抑制プログラムや家族計画がいかに求められていたのかをコネリー論文は整理する。全体としては、優生保護法の「量」の管理の側面とグローバルな人口抑制策の連関を論じることで、新たな優生保護法史を拓こうとしている。デ・マトス論文では、日本の占領統治に参加したオーストラリアによる反応を、「白豪主義」的な移民政策と関連づけながら、日本人移民の流入を阻止する方策として論じられたとの指摘が興味深い。保明論文は、優生保護法下の不妊手術・中絶・受胎調節の「地続き性」に着目するとともに、占領下日本の「トランスナショナルな交流の産物」（日本人だけでなくGHQ／SCAPの職員も非公式ながら策定に関与）として同法を捉える（168頁）ことで、従来の見立てを刷新している。

第3部は、優生保護法による中絶合法化の側面に注目し、そこに純血政策としての顔を見る。竹内論文では、日本の優生学が「民族」「混血」という概念を戦前・戦後を貫き継続させていたことを「貫戦史」として提示する（199頁）。この点は日本におけるレイシズムと優生学の関係を問う意味でも重要で、コブナー論文ではさらに、占領軍

* 一橋大学大学院社会学研究科教授

兵士と日本人女性のフラタニゼーションや「GIベビー」をめぐるパニックが検証されている。こうなると、混血児の出生防止が同法成立の背景にある可能性が浮かび上がるわけだが、有賀論文では、1950年代～60年代に実施されていた日米混血児を対象とした国際養子縁組事業を取りあげ、これが混血児にいかなる帰結をもたらしたかを検討している。

最後の第4部は、優生保護法の成立後に同法がモデル法となり、アメリカ統治下の琉球（沖縄）と韓国においていかに参照されたかが描かれる。豊田論文は、「人口過剰」問題を抱えた沖縄で、琉球列島米国民政府（USCAR）がほぼ同一内容の法制定を支持したものの、それが阻まれる背景を探っている。玄論文は、竹内論文と同じく「貫戦史」（植民地遺産と冷戦的断絶の二項対立を超えて）の視点から、植民地時代以来の日韓の医師らの交流を追い、1973年に「母子保健法」が制定されるまでの過程を検証する。

以上が本書の各論文のまとめである。評者はまず、一国史の枠組みのなかでの先行研究をのりこえ、グローバルな優生学運動史のなかに日本の優生保護法を位置づけ直し、その多面的な理解をもたらす国際共同研究の成果を生み出した編者の挑戦に最大限の敬意を表したい。日本の研究者と、米・英・豪・韓国の各大学に籍をおく研究者がタグを組み、すべての章が有機的につながっている共同研究の模範のような論集といえよう。

本書の最大の功績は、日本の優生保護法が、戦前と戦後の優生学をつなぐ回路を切り拓いた法律として国際的にも重要な役割を果たし、この法律自体が日米合作、あるいはトランスナショナルな優生学運動との共犯関係の産物とみなしうることを提示したことではないか。日本で広く読まれた米本昌平ほか編『優生学と人間社会——生命科学の世紀はどこへ向かうのか』（講談社現代新書、2000）では、「ナチズム＝優生社会＝巨悪」の図式からの離脱が提唱された。英を優生学の始発駅、独を終着駅とする思考停止状態から脱し、どのように戦後へとつながり、新優生学の時代へと展望

がひらけるのかが問われた。近年の研究史では英独をつなぐ米国の優生学運動に注目が集まっているが、本書でも世界初の断種法を制定した米国が日本を占領し、ドイツの戦争犯罪を裁く国際法廷を仕切ったことの重要性が浮かび上がる。

グローバル史の分析視角によって、あらためて第一次世界大戦以降の優生学運動は、英独米などが互いに相互参照しつつ推進した、トランスナショナルな複合的な運動体としての性格を持っていたことが明らかになった。都合よくナチ優生学との切り離しを行いつつ、戦後にマーガレット・サンガー由来の産児調節／家族計画、人口政策が継承され、1970年代に本格的に優生学が批判の目にさらされるまで、断種を含む優生学実践は延命させられたのである。このトランスナショナルな関係性の構築では、サンガーと加藤シズエ、あるいはクラレンス・ギャンプルなど注目すべき人物がすでに判明していたが、本書では日本においても古屋芳雄という、国際的な人脈を持つ人物が複数の章に登場しているのが興味深い。古屋は、戦前には厚生省の技官として国民優生法の立案に関与し、戦後には人口政策としての受胎調節に注力し、国立公衆衛生院で受胎調節普及のパイロット事業を行った。そもそもこの施設はロックフェラー財団から寄贈されたものであり、米国との深い関係など今後のさらなる検証が待たれる。

今後の研究の広げ方としては、量の統制という観点から、米国や日本の移民行政との関係（1924年移民法は優生学者の関与の産物、日本の「過剰人口」対策と戦後のブラジル移民など）を総合的に検証する作業や、「モデル法」としての検証作業としては沖縄・韓国のみならず、戦後中国についても「一人っ子政策」を含めて検証できるとより世界発信できる共同研究となるのではないか。

以上、評者なりのコメントを述べてきたが、本書が日本の優生保護法のグローバルな歴史的意義を新たに提示する成果として広く読まれるべき研究書であることはいうまでもない。本書による問題提起が国際的な評価を得て、これに続く研究が現れることを期待したい。

山崎明子著 (人文書院、2023年)

「ものづくり」のジェンダー格差 フェミニイズされた手仕事の言説をめぐって

大室 恵美*

2024年後半から、幾度目かの「編み物ブーム」が到来しているようだ。芸能人の発信やSNSが火付け役となって毛糸が品薄になる程だと日々メディアが報じている。編み物は手軽で楽しい、脳トレになる、鬱に効く、「編み物男子」などの言説が溢れる中、なぜ「編み物女子」とは言わないのだろうか、そのような言説はいつからあるのだろうか、など色々な疑問が浮かんでくる。編み物をはじめとする手芸は社会においてどのような意味を付与されてきたのか……そんな問いに答えてくれるのが本書である。

著者の山崎明子氏は奈良女子大学教授で、女子美術教育の歴史を中心に手芸や工芸、テキスタイルをめぐる諸相を研究しており、本書は既刊の『近代日本の「手芸」とジェンダー』（世織書房、2005年）をはじめ2022年までの論考をまとめ、書き下ろしを加えたものである。本書では手芸に加え職人による工芸も射程に含めた「ものづくり」が創出する「価値」に注目する。近代以降の日本社会における言説の分析を通して、ものづくりを行う主体が女性の場合だと、ジェンダー化された言説が構築され愛情や社会貢献、喜びの言葉が付与される一方で、生産された製品の価値は低く見積もられてきたことが明らかにされる。

本書は7つの章と序章・終章からなる計9章構成である。序章では上述の「価値」とそれを創出する言説に焦点を絞ることが述べられ、価値づけの例として梅棹忠夫の「妻無用論」（1959年）に対する批判的検討が行われる。梅棹は、サラリーマンの妻である専業主婦たちは家事労働が簡単になってできた余白を、趣味に過ぎない料理や裁縫などの「偽装労働」で「水まし」して埋めているとする。著者はこれを、女性たちが行ってきた手芸や編み物などの生産活動の価値を切り下げる言説の創出の例として提示する。

第一章からは明治以降の時代の移り変わりに従って、手芸（一～五章）、工芸（六・七章）をめぐる言説が分析されていく。第一章では明治初期からの言説が検討され、手芸の必要性を説きつつ効能を示し倫理観へと結びつけながら「女性が手芸をすることは価値あること」という発信がなされていたことが明らかにされる。具体的には、女子向けの学校教育の整備、手芸に関する出版物の増加、博覧会などの展示、「手芸美人」像の流布を通して手芸が「フェミニイズ（女性化）」されていたことが指摘され、手芸文化を広める言説として明治以降再開された皇后による養蚕が持ち出されていたことも言及されている。

第二章では内職に焦点が絞られ、女性の内職は男性の労働力を補う生産の下請であったことが確認される。明治中期以降に出現した内職案内や徳富蘇峰による『家庭小訓』、「女性雑誌」の分析から僅かな稼ぎでも家計のため、国家のために喜んで行うという言説が形成されていったことが分かる。この言説は、一五年戦争期に男性労働力を安価に補うために女性たちを動員するものとして再度盛り上がりを見せていくことが示される。

第三章では戦時下の手芸に注目していく。その特徴として①戦地の兵士に役立つと思われるもの、②手芸制作を通して兵士を想う主体であることを表明するもの、という2点が明らかにされる（117頁）。手芸に必要な材料が入手しにくくなる中、毛糸で編まれた靴下のような実用品だけでなく「慰問人形」（98頁）と呼ばれた簡易な縫製品で「癒し」を届ける役割があったことも指摘される。

第四章では戦時下の手芸の中でも特に「千人針」に焦点を当て、実際は多くの女性たちによる協働行為であった千人針が、「ただ祈ることしかできない弱き存在」（142頁）としてまなざされていたことが、絵画作品などの分析を経て示され

* お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程

る。弱く無力な「縫う女」の表象が「闘う男」イメージを構築してきたのではないかということが提起される。

第五章では1950～70年代に女性を中心とした「手芸ブーム」を、新聞の家庭欄などから分析して「新たな主婦規範」が出現したと指摘されている。手芸の材料が安定供給されるようになり、唯一無二の手作りの品で家庭空間を個性的に作り変えることが主婦の使命であると意味づけられていたことが明らかにされる。

第六章では「女職人」と呼ばれる女性たちをインタビューした複数の書籍から語りを再分析し、女性の参入が賛美されつつも、女性たちは職人の労働力不足に際し投入されるべき備蓄労働力(221頁)で、手工芸全体がフェミニナイズされつつあることが考察される。技術が途絶えつつある伝統工芸において「女職人」が救世主のように語られるが、実際は産業全体の女性化というジェンダー再編成が行われていることが明らかにされている。

第七章では、刑務所にいる受刑者たちを稼げるものづくりから排除された「女性化された」人々と捉え、刑務所で作られた物品を販売する各地の「矯正展」や矯正協会発行の雑誌から、刑務所における製作は厳しい状況にある伝統工芸の一つの継承の形をとっていることを指摘する。続いて終章では、抵抗のための手芸や男性による手芸、ハンドメイドブームを概観しながら現在進行形のものづくりを考察している。

最後に本書の分析を踏まえた論点を三つ指摘しておきたい。第一に、本書のタイトルにも入っている「ものづくり」という言葉についてである。ものづくりと聞くと多くの人は製造業や伝統工芸を想起するのではないだろうか。代表的な例として、経済産業省の下部組織である中小企業庁が行なっている「ものづくり補助金」¹がある。ここでは新製品・サービス開発が補助の対象で、ものづくりとは企業が行なっているものという前提が見

て取れる。男性に割り当てられる稼げる生産がものづくりに分類され、女性たちが家庭内で担ってきた手芸は排除されているのではないか。

第二に、第一章の皇后による養蚕が、明治になって再開された意味についてである。その起源は古代中国で儒教の一環として出現²し、朝鮮半島でも王妃による養蚕の儀礼は長く存在していた。「脱亜入欧」が志向された明治期において、女性の手芸・繊維工業への従事が促進されるためのシンボルとして中国の思想が再導入されたことはどのように捉えられるだろうか。女性の性役割が強化できるなら「脱亜」しなくても良いと判断されたのであれば、近代化の意味がジェンダーによって異なるのではないか。

第三に、手芸と愛情の結びつきと、前提にある異性愛規範、性別二元論である。女性が男性に手作りのものを用意することは愛情であるという規範があるのではないだろうか。本書で指摘されていた家庭を飾るための手芸も、戦場への癒しも、近代家族の異性愛規範における妻から夫への愛情表現とその模倣なのではないか。千人針などの兵士への差し入れについても、女性による手作りのものが奨励されたのは、手芸と女性の結びつきに加えて、女性から男性への愛情を示す手段として手作りのものが求められたのではないだろうか。

冒頭で言及したような編み物ブームの中で、ものづくりを取り巻く言説がこれまでどのように「価値」を作り出してきたのか、「フェミニナイズ」をキー概念として分析した本書が出版されたことは、現在のものづくりを考察する上で歴史的な興行きを与えてくれるだろう。

注

- 『ものづくり補助金総合サイト』
<https://portal.monodukuri-hojo.jp/about.html>
(2025年3月31日取得)
- 難波純子, 2004, 「中国古代の紡織とジェンダーロール——「女工」の起源」『中国文化研究』第21号: 75-88.

エルザ・ドルラン著／ファヨル入江容子訳（人文書院、2024年）

人種の母胎 性と植民地問題からみるフランスにおけるナシオンの系譜

伊達 聖伸*

『人種の母胎』という表題には、女性差別が人種差別を胚胎する子宮になったことと、「性」と「人種」のマトリックスが同じ型で析出されたことが含意されている。本書のテーゼは、女性と非白人を対象とする医療言説の権力が西洋の人間〔＝男性〕科学を支えてきたというものである。

第I部「女性たちの病気」では、古代から17世紀の古典主義時代、さらにはそれ以降も、女性の身体が病める身体として表象されてきた歴史が描かれる。ガレノスの四大気質説に基づき、冷たく湿った女性の気質は、熱と乾湿の均衡が保たれた男性よりも不完全とされてきた。宗教も医学も、ともに女性を劣位に置いた。誘惑者イヴの危険性を説く神学と、女性の受動性と冷感症を強調する医学のあいだには齟齬もあったが、セクシュアリティと道徳性において「危険」（76頁）とされた女性は医学でも説明することができた。男性ならば健康の指標であるはずの熱が、女性においては病気の指標とされ、娼婦やアフリカ人女性や女性同性愛者などに割り当てられたからである。女性の冷たく湿った気質が原因とされたヒステリーは、やがてブルジョワ階級に典型的な病とされ、逆に熱を帯びた女性の身体は女性性欲亢進症や不妊症の説明に使われ、階級的には庶民や社会の底辺ないし境界にいる女性の病とされた。

第II部「国民の生成」は、女性の「健康」概念の形成が、女性を「国民」を産む「母」として再定義する過程と相関的であったことを論じている。出産はもともと女性たちの管理下にあったが、16世紀末頃から男性医療従事者が介入するようになると、産婆は魔女と見なされ、助産婦の職務は世俗的な医療制度のなかで再編された。妊娠や出産はしばしば死をもたらす病気として認定されたが、次第に医療言説は、男女間の優劣の秩序を維持したままで、出産を奨励する基準を作り出す。それ

は、女性の病気の大部分は生殖器系の機能の不調に由来するが、リズムが規則的であれば健康というものである。フランス語で月経や生理は「規則」という意味もある語の複数形«*règles*»で言い表わすことができるが、昔からそうだったわけではないのかと思って評者が調べたところ、17世紀末からの用法らしい。18世紀半ば以降、妊娠や出産は病気から健康の世界に移行したが、それはフランス国民を再生産する女性を、病的な「女性ヒステリー症者」（173頁）や黒人女性や奴隷よりも優れた存在と見なす視線と連動していた。

第III部「人種の発明」は、女性差別のモデルが近代的な人種概念に適用されたことを示している。植民地を鏡として国民が作られる過程で、白人の母が国民の母胎となる一方、黒人やアメリカの「インディアン」はいわば「女性化」を通して人種化された。17世紀末の時点では、アフリカ人女性奴隷はマラリアに対する免疫を持つためよい乳母とされていたが、18世紀半ば以降は入植者の子どもが黒人奴隷の乳を吸ってその気質を取り込んでしまうことが懸念され、白人女性による母乳育児が推奨された。医学権力は、黒人の身体が奴隷労働に耐えられることを示す際には男性化し、人種の劣等性を示す際には女性の病気モデルを用いて奴隷制を正当化した。植民地権力は、黒人の力に恐怖も抱きつつ、フランス国民とムラートやクレオールとの差異を強調した。

本書が対象とする時代はおもに17～18世紀で、医療言説の背後に広がる空間は奴隷貿易の舞台であるフランス、アフリカ、カリブ海地域だが、その示唆の射程は広くて長い。以下、評者の関心に引きつけて、3つほど論点を展開しておきたい。

第1に、両アメリカ大陸におけるフランスの植民地の比較である。本書第III部で触れられているように、フランスの植民地の農園では黒人奴

* 東京大学大学院総合文化研究科教授

隷とヨーロッパの年季奉公人がほぼ同数だったが、17世紀末になると奴隷の割合が増えた。白人入植者と黒人奴隷の婚姻や子どもたちの条件を規定した1685年の「黒人法典」にも関わる論点だが¹、行政官や入植者は白人女性たちを求めた。そうして植民地に送り込まれたのは、「精神異常者」や「乞食」を収容していた病院から集められた女性だった(338頁)。道徳性に問題ありとされていた彼女たちは、大西洋を渡ることによって美德を備えた貞淑な女性に変貌した。それは、黒人女性が不道徳な役回りを引き受けて、白人女性の潔白を際立たせる機能を果たしたからである。この漂白作用を、ケベックと比較するとどうなるだろうか。北米のヌーヴェル・フランスでは、毛皮貿易などに従事する男性入植者が多く、女性の数が極端に少なかったため、1663年から1673年にかけて、ルイ14世の支援を受けた約800人の「国王の娘たち」(Filles du Roi) が送り込まれた。彼女たちの多くも孤児院などで育った貧困層の出身だったと言われているが、目的地がケベックかカリブかによって選定基準に違いがあったのか。植民地での生活や子孫たちの社会的地位はいかなるものだったのか。比較研究はほとんど聞かない。

第2に、19世紀絵画の女性表象である。本書は、17世紀に発見された女性の健康がたくましい農村女性をモデルとしていたことを指摘している(130頁)。連想したのは、19世紀の農民画が過酷な労働の現実を捨象して素朴で敬虔な女性を描く傾向を持ち、また田舎という自然の懷に抱かれた若くて健康な農婦に対する都会の男性の欲望がしばしば投影されていることである²。よく知られているように、マネ《草上の昼食》(1863年) がスキャンダルを巻き起こしたのは、従来は神話の世界と結びつけられていた女性の裸体画を、同時代の西洋のブルジョワの世界に持ち込んで描いたからだ、男性が裸の女性の歯を検査している場面を描いたジャン＝ルイ・ジェロームの《奴隷市場》(1866年) が問題視されなかったのは、中東という植民地空間の女性表象だったからで、こうした点も女性と人種の相関関係から読み解く必要がある。

第3に、現代フランスのムスリム女性である。20世紀後半以降、科学の装いを凝らした生物学的人種概念はタブーとなったが、文化的人種差別に姿を変えて存続している。諸宗教を平等に遇するはずのライシテが、イスラームに対して差別的な形で現われる面もあることは否定できず、しかもヴェール問題が注目を集める傾向は女性の身体の管理という関心の継続を示唆している。医療言説が魔女やヒステリー患者を周縁化してきたように、現在支配的なライシテ言説がムスリム女性を焦点とする権力として作用しているならば、「人種」の母胎はライシテ体制下の「宗教」の母胎にもなったと言えよう。そもそも本書は2000年代のヴェール問題のなかで書かれた書物であり、著者は権力関係の交差性と複合的な差別を分析する「インターセクショナリティ」の概念をフランスに導入した者の一人である。本書の背景あるいは延長線上にヴェール問題があることは、「訳者解説」でも指摘されている(383頁)。

権力の狡知というものがあるとすれば、それは被支配層に充満していく不満が支配層に向かって暴発しないよう、被支配層間で敵意が処理されるように仕向けることである。17世紀の植民地の農園では、年季奉公人の不満は経営者に対してではなく奴隷へと向かった(336頁)。しかし、カリブの島の奥地に身を潜めた原住民と奴隷が連帯し、共通の敵である白人に立ち向かったエピソードで本書は結ばれている。人種の母胎は、言説を通じた支配という構造を生んだが、そうした支配体制に亀裂を入れる小さな者たちの歴史^{イストワール}＝物語をも生む可能性を孕んでいる。

注

- 1 ルイ・サラ＝モランス『黒人法典——フランス黒人奴隷制の法的虚無』(中村隆之・森元庸介訳、明石書店、2024年)も本訳書と前後して刊行されている。
- 2 馬淵明子「描かれた農婦——一九世紀フランスの農民画における主題をめぐって」鈴木杜幾子・馬淵明子・池田忍・金恵信編『交差する視線——美術とジェンダー2』ブリュッケ、2005年。

土屋葉編著（現代書館、2023年）

障害があり女性であること 生活史からみる生きづらさ

稲原 美苗*

本書は、「障害者について論じられるときは、たいてい障害者男性に、女性について論じられるときは、たいてい健常者女性にスポットライトが当てられる」という一文から始まる（4頁）。この一文はアフリカ系アメリカ人のフェミニスト思想家ベル・フックスの文章中の「黒人」を「障害者」に、「白人」を「健常者」に置き換えて、本書の編著者である社会学者の土屋葉が障害のある女性について表現したものである。障害者について論じられるときには障害のある女性の声が聞かれず、障害という側面だけを取り上げ女性という側面は切り捨てられ、女性について論じられるときには障害のある女性は置き去りにされていると指摘する。本書は、家庭、学校、職場、福祉施設、医療機関のなかで障害のある女性たち48名が経験した「生きづらさ」を調査し、それらを生む社会構造を明らかにすることを目的としている。

本書は土屋の他、社会学や障害学などを専門としている研究者や当事者の8名が執筆し、3部構成で全10章から成り立っている。さらに、本書にはイントロダクション、3つのコラム、執筆者たちの座談会が収録されている。本書の調査については共同研究で集まったグループが主体となって準備し、その時々状況に応じて複数のメンバーが調査に参加し、インタビュー記録をメンバー全員で共有し、検討する形で行われた。

まず、第Ⅰ部「障害とジェンダーをめぐる困難」では、精神障害、視覚障害、発達障害といった障害の種別にジェンダー問題と関連付けて議論を展開する。第1章では、社会学者の後藤悠里が精神障害のある女性5名が抱える生きづらさについて考察し、精神疾患の症状として問題となるものと、社会的な障壁によって問題が生じているものとに区別が必要であると指摘する。例えば、精神障害によって生じる症状、服薬の必要性は、当事

者の日常生活における行動を困難にし、一方、妊娠・出産に対する医師の否定的な態度などは、障害のある女性ならではの生きづらさを生む。第2章では、編著者の土屋が視覚障害のある女性1名の生活史から記述し、「不利益」というキーワードと関連付けて生きづらさを描く。具体的には、三療業に従事する当事者は、性暴力を回避するために仕事を制限するという不利益を被っており、医療場面では人権侵害を受け、生活面では稼働能力と育児・家事能力がないなどの烙印を押されたことを報告する。第3章では、社会福祉学の研究者である伊藤葉子が、発達障害のある女性8名の語りから彼女たちの生きづらさは人間関係のなかで生じることを考察する。彼女たちは他者からの要求に応じようと頑張り続け、幼少期から継続的に「疲れ」を感じると言い、この疲れが重なって、行動やコミュニケーションなどの制限を生じさせ、日常生活を困難にすると指摘する。

第Ⅱ部「ライフコースと性役割」では、人生のそれぞれの時期や他者との関係性のなかで生じる「生きづらさ」について、障害をジェンダー規範と関連付けて論じている。まず、第4章では、障害学を専門とする河口尚子が、10名の女性の語りから恋愛・結婚・妊娠・出産における生きづらさと関連する女性規範および自己アイデンティティについて論じる。恋愛の際に身体規範、結婚の際に家事役割・嫁役割規範、妊娠、出産の際に跡継ぎを設けるという女性規範があり、それらの規範が生きづらさに直結する。結婚、妊娠、出産を経験している障害のある女性が相対的に少ないこと、女性としてのアイデンティティを確立しづらいこと、女性規範に順応できないことが生きづらさに繋がっていると指摘する。第5章では、第4章に引き続き河口が、5名の障害のある女性たちの性暴力被害についての質的調査を報告する。具体的

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

には、加害者との間に上下関係があること、性暴力以外のハラスメントが起こっていた事実、被害を申告しづらいこと、相談しても適切に対応してもらえなかったという実態が挙げられる。性暴力が生じる要因として、障害のある女性が性的な存在として認識されていないという現実とともに、障害があるゆえに人として低く見られる現実があるという「性文化のダブル・スタンダード」(152頁)があり、性被害を未然に防ぐ方策がないと同時に性的に利用されやすい・性暴力の被害に遭いやすいことが示される。第6章では、後藤が、障害当事者運動内で活動していた女性5名の語りを取り上げる。近年、露骨な排除や差別は減っているものの、障害のある女性たちの生きづらさは残っていると指摘し、制度的なもの・慣行的なもの・概念的ものの3つに分類されると言及する。運動内で障害のある男性はリーダー的な役割を占め、女性にサポート的な役割を担わせ続ける。一方で障害のある女性たちは、家事・育児・世話役割規範に応じるように強いられるために「家庭」と「運動」の両立の難しさを語る。第7章では、福祉社会学の研究者である時岡新が、調査時における研究者から当事者への問いかけや解釈を詳細に検討し、障害のある一人の女性の「生きづらさ」をめぐる認識が生じていく過程を炙り出している。例えば、当事者である女性と聞き手である時岡の認識が各場面で異なっていることが、問答を繰り返す過程で明確にされ、また、研究者自身の先入観をもとに問いかけたことによって当事者に「窮屈を感じさせていた」ことを反省を込めて振り返っている。

第三部「これまでとこれから 課題・論点」では、本書における鍵概念「インターセクショナリティ」、「セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」、および障害のある女性による運動史について述べられている。第8章では、社会学者の渡辺克典がインターセクショナリティの主要な考え方、この概念の拡がり、日本における議論や実態調査の展開について示す。差別の経験は、表現できない曖昧な感情として当事者のなかに残

り、言語化されにくい。特に、障害と女性という交差性を経験する女性の生きづらさは、記述することが難しく、認識されていないことを指摘する。第9章では、河口が「性と生殖に関する健康と権利」の概念とその成立過程、さらに、日本の優生保護法と母体保護法における障害のある女性たちが経験してきた歴史について言及する。障害のある女性に対する性と生殖に関する健康と権利の保障については課題が残っていることが指摘される。第10章では、社会学とジェンダー論を専門とする瀬山紀子が、1980年代半ばに障害のある女性たちが月経や子宮摘出をめぐる対話を続けてきたことを述べている。障害のある女性同士で対話してきた内容を紹介し、その内容は現代社会を生きる障害のある女性たちの生きづらさを解決する端緒になる可能性を示唆する。

3つのコラムについても紹介したい。コラム1と3のなかで臼井久実子と小森淳子は、自身が経験した複合差別や生きづらさについて一人称の視点で書き綴っている。臼井は聴覚障害のある女性として自身の孤立させられてきた経験を述べている。小森は、アテトーゼ型脳性まひの当事者として、性と生の主体になれなかった経験を振り返る。コラム2では、土屋が視覚障害のある一人の女性のライフストーリーを聞き取って、当事者の「語りたい」経験(215頁)をすくいとることの必要性を訴える。

本書は、総勢48名の障害のある女性一人一人の生活史を探究することによって、彼女たちを生きづらくさせている社会構造を抽出した一冊である。当事者たちと研究者たちが交流し対話をするなかで、彼女たちの「生きられた経験」が少しずつ言語化され、その「生きられた経験」を当事者の視点から捉え直すことによって、彼女たちの生きづらさを生む社会構造を捉え直すことができる。本書は、「障害」と「女性」の交差性について考えるなかで、既存の女性学と障害学が見落としてきた障害のある女性たちの経験について当事者の視点から考察している点で高く評価できる。

イヴァン・ジャブロンカ著／村上良太訳（明石書店、2024年）

マチズモの人類史 家父長制から「新しい男性性」へ

前川 直哉*

フランスの歴史学者である筆者が2019年に著した *Des hommes justes: Du patriarcat aux nouvelles masculinités* の翻訳である。

本書は4部（全15章）構成となっている。第Ⅰ部「男性による支配」で、世界中にあまねく見られる男性支配の起源を歴史に求めた上で、第Ⅱ部「権利の革命」ではフェミニズムの歴史を概観し、第Ⅲ部「男性の挫折」では産業構造の変化に伴い男性支配が揺らいでいると示される。そして第Ⅳ部「ジェンダーの正義」では家父長制を変調させ、男性性を転換し、男性支配を終焉させるべきとの結論に導かれる。紙幅の都合上全ては紹介できないため、ここでは第Ⅰ部と第Ⅳ部に絞ろう。

第Ⅰ部で筆者は「地上で最も普遍的に見られる特色の一つ」である「男性による支配」について、「家父長制はどこから来たのだろうか。また、家父長制が時代を超えて、あらゆる宗教、あらゆる政治権力において、信じられないほどの安定を得ている理由はいったい何なのだろうか」と壮大な問いに挑む（18-19頁）。同様の問いはゲルダ・ラーナー『男性支配の起源と歴史』（1996）や、最近翻訳されたアンジェラ・サイニー『家父長制の起源——男たちはいかにして支配者になったのか』（2024）など広く議論されてきた。ジャブロンカは旧石器時代に起源を求め、男女の役割分担は新石器時代への移行に伴いさらに進められたと説く。妊娠・出産・授乳といった生物学的な現象に対し「たった一つの普遍的解釈しかなされなかったこと」すなわち「女性を一つの機能に固定し、その生物学的な条件を運命と定め」る解釈により、家父長制が誕生したとの見立てである（46-47頁）。

あらゆる地域や時代の例証を縦横無尽に繰り出す議論は説得力に富み（翻訳は相当に骨が折れたと推察する）、また作家でもあるジャブロンカの文章の切れ味は鋭い。「家父長制は出産能力を女

性の本質であると定めることで成り立っている。女性には腹があると言う代わりに、女性には腹であると言うに等しい」（47頁）、「実際、男性の頭を悩ませているのは、「権威の失墜」や「世界の女性化」よりも、むしろ平等な社会の到来なのである」（290頁、傍点原文）といった印象的な文章が次々と登場する。もちろんこの点も、訳者の功績は大きいだろう。

本書の特色は、家父長制、男性支配について歴史をひもとくのみでなく、「男性性」の観点からこれを検証していることである。レイウイン・コンネル『マスキュリニティーズ』（2022）を援用し、男性性の複数性と階層性を前提としながら、「支配する男性性」が様々な形態をとってきたこと——これ見よがしな男性性、自己抑制的な男性性、自己犠牲的な男性性、曖昧な男性性——を解き明かす（第3章）。

第Ⅳ部では、家父長制が限界にきている現在、どのような男性性が必要かが問われる。

ジャブロンカが提示する新たな男性性の中心は、「支配しない男性性」である（第12章）。評者はこのアイデアを意外に感じつつも、なるほどその手があったかと納得した。この本で説かれている通り、そしてこれまでの男性性研究が明らかにしてきた通り、男性性はその内実を巧妙に変化させながら、男性支配への合意を取り付け続けてきた。近年使われることの増えた「ケアリング・マスキュリニティ（ケアする男性性）」を、評者が手放して歓迎できない理由もここにある。確かにケアはきわめて重要だし、ケアの価値を低く見積もることで男性支配が維持されてきた部分は大いにある。だが「トキシック・マスキュリニティ（有害な男性性）」を批判し、「ケアリング・マスキュリニティ」など新たな男性性を用意することで、結局は何らかの形で男性支配の延命が図られるのでは

* 福島大学教育推進機構准教授

ないか……という疑念を拭えなかったのである。

そこにきて「支配しない男性性」である。確かにこれならば、男性支配の延命を疑う必要はなさそう。そしてこのアイディアは、これまでの男性性が男性支配への合意の調達に利用されてきたことを明確に意識させる。

もちろん、全く新奇な表現というわけではない。例えば日本でも沼崎一郎が『「支配しない男」になる——別姓結婚・育児・DV被害者支援を通して』(2019)を著している。ジャブロンカの新しさは、男性支配の歴史とその限界を複数の男性性という観点から検証した上で、次のように説いていることだろう。「二〇世紀に女性たちは支配されていた社会で権利を獲得した。家父長制をさらに揺さぶるには、男性の参加が必要となる。男性を危機から救い出すのは、男性の権威を強化することによってではなく、逆に男性の定義を豊かにすることによってである。マッチョな姿勢や特権的な男性性、有毒な男性性などを周縁化するに至るまで、男性性を多様なものにしていくのだ」(382頁)。すなわち、「支配しない男性性」を中心とする新たな男性性の創出と多様化によってのみ、ジェンダーの正義の達成と、男性危機からの脱出が実現しようという主張である。

ジャブロンカは「支配しない男性性」をこう説明する。「女性の意志に対して恣意的な介入を控えることであり、同時に、女性が自由を実際に享受できる社会的および政治的条件を確保することでもある。一人の男性が自分や他人のために、女性がその性あるいはジェンダーゆえに制約を受けることがないような仕組みを実現したとすれば、この男性は支配しない男性性に従っていることになる」(294頁)。カナダのトルドー首相を高く評価し、クォータ制や紛争処理に女性が参加することの重要性、女性の貧困の解決、宗教における平等などに言及しながら、「支配しない男性性」のあり方を説く。「支配しない男性性は言論や権威、知識、武器、富、精神性を共有したいという欲求に基づいている。支配しない男性性は男女の平等を認めるだけでなく、家父長制、ミソジニー、差別、

暴力と闘い、男性性が権力の表現であることを拒否する」(317頁)。

「支配しない男性性」の他にも、エロティックな駆け引きの魅力を保持しつつ完全な性的同意を追求する「敬意を払う男性性」や、あらゆる場における「平等を重んじる男性性」も提案される。ケアの重要性にも当然目配りされ、ナンシー・フレイザーを引きケアの普遍化の必要性を説く。

ベル・フックスは『フェミニズムはみんなのもの』で「思い描くのは、支配というものがない世界に生きること」(hooks 2000=2020: 11)と書き起こし、「男性がフェミニズムの旗をかかげて家父長制に異議を申し立てること」が決定的に重要であると訴えた(同前: 178)。ジャブロンカは一冊を使って、こうしたフェミニズムからの呼びかけに正面から応えたと言えるだろう。本書のエピローグで彼は言う。「私は男性の権力に対して反対する男である。私はフェミニストなのだ」(417頁)。

このことを宣言し、男性にフェミニズムへの参加を促すために日本語版で400ページ以上の本が必要だったと考えると、何と男は手がかかる生き物か、との思いも去来する。だがシスジェンダー男性である評者が自身を顧みた時、確かにこうした徹底した考察が必要なかもしれないと感じる。男性をフェミニズムに動員するのは、それだけ骨の折れる作業なのだ。本書の冒頭にある通り、「男はあらゆる闘争に挑んできたが、男女の平等のためには闘わなかった。男はあらゆる解放を夢見はしたが、女の解放は夢見なかった」のだから(7頁)。

厚みはあるが文章は読みやすく、論旨は明快であり、随所に多くのヒントが散りばめられたたいへん魅力的な一冊だ。紹介できなかった章にも興味深い分析が満載である。多くの読者、特にたくさん男性に読まれてほしいと願う。

参考文献

hooks, bell, 2000, *Feminism is for Everybody: Passionate Politics*. Routledge. (堀田碧訳, 2020, 『フェミニズムはみんなのもの——情熱の政治学』エトセトラブックス.)

『ジェンダー研究』編集方針

- 1 『ジェンダー研究』（以下、本誌）は、学際的・国際的なジェンダーに関する最新の研究成果を発信し、グローバルなジェンダー研究の発展に寄与する。
- 2 本誌は、特集記事・投稿論文・書評からなる。
- 3 本誌は特集記事を企画し、時宜にかなったもの、国際的な関心の高いもの、新領域を開拓するものなど、現在のジェンダー研究にとって重要であるテーマで、質の高い論文を掲載する。
- 4 投稿論文は、国内外・学内外を問わず公募し、厳正な審査を経て掲載することで、質の高い学術論文の国内外への頒布を進める。
- 5 書評は、国内外のジェンダーに関する書籍を厳選し、最先端の研究動向の紹介およびそれについての考察を加えた論評を行う。
- 6 本誌の刊行により、国内外・学内外のジェンダーに関する研究の発展を促進し、グローバルかつ有機的な研究交流の構築を目指す。そして、国立大学法人として、男女共同参画社会の実現に貢献する等の、社会的要請にも応える。

『ジェンダー研究』投稿規程

- 1 投稿する論文は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
- 2 投稿者は、国内外を問わず、学際的に女性学・ジェンダーに関する研究に従事する、原則として修士号取得相当以上とする。
- 3 投稿する論文は、未発表の論文に限る。また、他誌などとの二重投稿は認めない。他で審査中のもの、掲載予定となっているものの投稿は、二重投稿とみなす。なお、この規程に違反した場合、新たな投稿を受け付けないなど、しかるべき措置をとる。
- 4 論文執筆における使用言語は、原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
- 5 投稿論文は、
 - ・日本語の論文は、注・図表・参考文献を含めて20000字以内。
 - ・英語の論文は、注・図表・参考文献を含めて8500ワード以内。
 - ・なお、1図表500字相当、1ページを要する場合は1000字相当とする。
 - ・挿図の場合は、1ページあたり1000字、刷り上がり20ページ内に入ることを原則に、およそ20点までとして全体を構成する。
 - ・挿図に用いる図版の掲載許可については、投稿者が自らの責任において然るべき手続きをとる。なお許可に要する費用は、投稿者負担とする。
 - * 定められた字数などの制限を超えた場合、形式において甚だしく不備がある場合には、受理できない。
- 6 論文の提出時には、以下をそれぞれ個別のデータファイルにして提出すること。6-1から6-3まではWordファイルで作成のこと。

- 6-1 表紙。論文タイトル(副題も含む)と投稿者氏名・所属を日本語と英語とで記す(タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある)。
- 6-2 要旨とキーワードを日本語と英語で提出。日本語は400字以内、英語は200ワード以内(ネイティブチェック済みのもの)。キーワードは日英ともに5語以内。
- 6-3 本文。注と参考文献を含む。
- 6-4 図表・図版。図表はWordまたはExcelで作成。写真はJPEGまたはPDFで作成。
 なお、執筆者を特定しうるいかなる情報(謝辞、科研番号)も6-1以外には記載してはならない。
- 7 投稿予定者は指定の期間に、ジェンダー研究所ウェブサイト上のエントリーフォームより、事前エントリーを行うものとする。エントリー後の投稿とりやめ、題目・内容の多少の変更は問題なく、連絡の必要もない。
- 8 投稿論文は、ジェンダー研究所ウェブサイト上の、以下のいずれかの投稿フォームより、必要事項を入力したうえで、アップロードすること。
 日本語投稿フォーム
 <https://form.jotform.me/72482244933459>
 英語投稿フォーム
 <https://form.jotform.me/72488720633461>
- 9 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。その際の費用に関しては投稿者が負担する。
- 10 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める『ジェンダー研究』執筆要項に従う。英語の投稿論文はStyle Sheet for Journal of Gender Studiesとする。
- 11 投稿論文の掲載の可否は、査読者による審査のうえ、編集委員会が決定する。ただし、本投稿規定・執筆要項や本誌の趣旨に合致しない原稿、また学術的論文としての水準を著しく達していないと判断された場合、審査の対象外とする場合もある。
- 12 編集委員会は、査読者の審査にもとづき、投稿者に論文の修正を求めることがある。求められた投稿者は、速やかに論文を修正し、修正対応表をつけて、メールにて提出しなければならない。
- 13 投稿者による校正は原則2回までとする。
- 14 投稿後、投稿論文を取り下げる場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。
- 15 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表・写真などが多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。
- 16 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、編集委員会の許可を必要とする。

改訂

2017年10月27日制定

2021年5月14日改訂

2024年1月16日改訂

『ジェンダー研究』執筆要綱

<https://www2.igs.ocha.ac.jp/jgs/>

編集委員長 Editor-in-Chief

大橋 史恵 お茶の水女子大学 | ジェンダー研究、国際社会学
Fumie Ohashi Ochanomizu University, Gender Studies/Transnational Sociology

編集委員 Editorial Board Members

天野 知香 お茶の水女子大学 | 芸術学、フランス近代美術史
Chika Amano Ochanomizu University, Art Studies/French Modern Art History

石丸 径一郎 お茶の水女子大学 | 心理学、臨床心理学
Keiichiro Ishimaru Ochanomizu University, Psychology/Clinical Psychology

倉光 ミナ子 お茶の水女子大学 | 人文地理学、地域研究
Minako Kuramitsu Ochanomizu University, Human Geography/Pacific Studies

宝月 理恵 お茶の水女子大学 | 医療社会学、歴史社会学
Rie Hogetsu Ochanomizu University, Medical Sociology/Historical Sociology

森 義仁 お茶の水女子大学 | 基礎化学、非平衡系化学
Yoshihito Mori Ochanomizu University, Basic Chemistry/Nonequilibrium Chemistry

脇田 彩 お茶の水女子大学 | 社会学、社会調査法、社会階層論
Aya Wakita Ochanomizu University, Social Stratification/Gender Studies/Social Research

学外編集委員 Advisory Board

板井 広明 専修大学 | 経済学史、社会思想史
Hiroaki Itai Sensyu University, History of Economic Thought

金井 郁 埼玉大学 | 経済学、ジェンダー研究
Kaoru Kanai Saitama University, Labor Economics/Gender Studies

北原 恵 大阪大学名誉教授 | 表象文化論、視覚文化論
Megumi Kitahara Osaka University, Culture and Representation/Gender Studies

仙波 由加里 お茶の水女子大学ジェンダー研究所研究協力員 | ジェンダー研究、生命倫理学
Yukari Semba Ochanomizu University, IGS Affiliated Researcher, Gender Studies, Bioethics

ジャン・バーズレイ ノースカロライナ大学名誉教授 | 日本学、ジェンダー研究
Jan Bardsley University of North Carolina, Japanese Humanities/Gender Studies

平野 恵子 横浜国立大学 | ジェンダー研究、国際社会学、インドネシア地域研究
Keiko Hirano Yokohama National University, Gender Studies/Transnational Sociology/
Indonesian Area Studies

三浦 まり 上智大学 | 政治学、ジェンダーと政治
Mari Miura Sophia University, Politics/Gender and Politics

編集事務局 Associate Editors

本山 央子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Hisako Motoyama Institute for Gender Studies, Ochanomizu University

嶽本 新奈 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Niina Takemoto Institute for Gender Studies, Ochanomizu University

黒岩 漠 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Baku Kuroiwa Institute for Gender Studies, Ochanomizu University

日本語校閲 Proof Readers

山口 裕二
Yuji Yamaguchi

和田 容子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Yoko Wada Institute for Gender Studies, Ochanomizu University

『ジェンダー研究』28号 2025年7月31日 発行

編集・発行 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
 Tel: 03-5978-5846
 Email: igsoffice@cc.ocha.ac.jp
 URL: <https://www2.igs.ocha.ac.jp/>

表紙デザイン 塩飽 晴海
印刷・製本 株式会社 白峰社

Contents

Foreword

- 1 Fumie Ohashi

Special Section: Commons/Commoning

- 7 Debates on Sustainable Development:
Personal Insights from a Feminist Political Ecology Approach
Wendy Harcourt
- 21 Exploring How Commoning Helps Reconfigure Feminist Analytical Tools
in Times of Socio-ecological Crises
Chizu Sato
- 39 Commoning Electric Washing Machines in Rural Japan
Fumi Iwashima

Special Contribution

- 53 Women and the Militarization of Common Land in Okinawa:
From the Requisition of Collectively-Owned Land for Military Use
Setsuko Kiriama

Article

- 69 What It Means for a Man to Wear Makeup:
A Basic Consideration Through One Man's Narrative and Practice
Aiko Oguchi
- 84 Book Reviews
- 116 Editorial Guidelines

Journal of Gender Studies No. 28 Date of Issue: July 31, 2025

Publisher: Institute for Gender Studies (IGS), Ochanomizu University
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610, Japan
Tel : 81-(3)-5978-5846
Email: igsoffice@cc.ocha.ac.jp
URL: <https://www2.igs.ocha.ac.jp/en/>

Cover Design: Harumi Shiwaku
Printing and Bookbinding: Hakuhousha Co., Ltd

